
吸血鬼の花嫁（仮）？

夏代悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼の花嫁（仮）？

【Nコード】

N3175W

【作者名】

夏代悠

【あらすじ】

親元を離れてひとり暮らし満喫中の大学生、中里香苗、もうじき二十歳。そんなわたしの前に現れた見知らぬ男はいきなりのたもつた。「私達の婚約を破棄したい。それなりの代償は払うつもりなので協力してはもらえないだろうか」と。婚約……ていうかそれ以前に、あなた、誰？

その日、わたしの帰宅時刻は深夜零時直前だった。

普段はもつと早いのかといえ、そうでもなかったりする。週の半分はこんなものだ。

所属しているサークル、大学に入学したばかりの昨年五月に、語学クラスで知り合った数人で勢いのままに立ち上げたカラオケ同好会の活動のため、である。

有り体に言ってしまうえば、仲のいい友達と一緒にカラオケボックスで歌い騒いでたらこんな時間になっちゃいました、ということ。

わたし自身は大学近くのマンションで気楽なひとり暮らしだし、わたし達がいつも利用している店は早朝まで営業しているのだけけれど、メンバーの中には自宅から通っている子もいれば、学校からは少し離れたところに部屋を借りて電車通学している子もいるので、必然的に最終電車、あるいは最終バスに合わせたの解散となる。

そういうわけで、その日もわたしの帰宅時刻は深夜零時直前だった。

カラオケボックスで注文した軽食でお腹は適度に満たされていたので、途中のコンビニやファミリーストランは横目に見るだけで通り過ぎる。

コインパーキング前に設置された自動販売機でペットボトル入りの水を買、うる覚えのメロディーを口ずさみながらいつもの帰り道を歩くわたしの足は、ある单身者向けの五階建てワンルームマンションの、エントランスの様子が視界に入ってきた位置でぴたりと止まった。

わたしの帰る先はそのマンションの四階、四一二号室だ。当たり前のことだが、帰宅するためにはエントランスを抜けなければならない。必ず通過しなければならぬその場所に、何か黒い人影が見えるのだ。

逆光のせいで黒っぽく見えるとかではなく、本当に黒い。何が黒いかというと、着ている服が。

そこに立っていたのは、黒いスーツに黒いシャツ、ついでに黒の革靴、黒い帽子の男だった。

その黒ずくめが、エントランスの、それも正面ど真ん中というなんと邪魔な位置に陣取り、偉そうに腕組みなんかしている。

——あんまり近寄りたくはない感じ。

黒一色なのは、単にお葬式帰りなのかも、で納得できなくもないけど。いや、シャツまで黒ってどうなのよとは思っけど。

でもそれがなんだってこんな場所で仁王立ちしてるんですか。人待ち？ 彼女さんがここの住人だとか。それならそれで、もうちょい端っこに寄ってくれてもよくない？ というかそうするべきじゃなからうか、常識的に考えて。

第一、このマンションの住人は女性が多いのだ。大学生とか専門学校生とか、若い女性が。不審者がいるんですけど、なんて警察に通報されても文句は言えないと思うのだけど、この人。

頭の中でこそあれこれ考えはしても、見ず知らずの不審者にわざわざ声をかけるような真似をするほどの親切心は持ち合わせていない。適当に会釈でもして通り過ぎる——しかないだろうなあ、これは。出入りできるのが一ヶ所だけだと、こういうときに困るんだな、ひとつ勉強になった。

とにかく、いつまでも路上に突っ立っていてもしょうがない。わたしは意を決して歩みを再開する。

距離が近づいて気がついたのだが、その不審者、不確定名黒男さんは結構な高身長だった。わたしは女子にしては背が高いほうだけど、この人と並んだらせいぜい相手の顎先ぐらいかも。体格はよくわからないが、少なくともひよろくはない。ついでに太ってもいい。

黒ずくめファッションと体格のよさとの合わせ技で威圧感倍増。せめて仁王立ちと腕組みやめればいいのに。つつかそのポーズでマ

ンションの外側に向かって立ってるので、着ている服を替えれば警備員に見えそうだ。現実の彼はどこからどう見ても不審者だけど。ふと、黒男さんとわたしの目が合った。わりと——いや、かなり整った顔立ちだ。

わたしは慌てて軽く頭を下げた。

黒男さんは目を逸らさずじっとわたしを見返してきた。そして言った。

「初めまして、中里香苗さん」

「——へ？」

いきなり名前を呼ばれ、わたしは間抜けな声を出してしまった。

あれ？ 不審者だ不審者だと思ってたらし知り合い？ こんな人様の邪魔になりそうな場所で待たれてたのって、わたし？ でも今、初めましてって言ったよね、この黒男。初めましてだったら知ってる人じゃないってことに——じゃあなんでわたしの名前知ってるのよ？

「随分と遅いんだな。大学は十八時までだと聞いていたからそれに合わせて訪問したつもりが、とんでもない待ちぼうけを食らってしまった。ああ、アポイントをとらずに来た私に全面的に非があるのだから、君を責めるつもりは全くない。もっとも、若い女性がこの時間まで出歩くのはいかがなものかと個人的には思うが」

「いったい誰ですか、この人は。ていうか六時間近く同じポーズで突っ立ってたんじゃなかるうな、おい。」

「突然の訪問で驚かせてしまったことは謝罪する。しかしどうしても君と話をする必要ができたのだ」

「うん、驚いたことは驚いた。訪問が突然だとかいう理由じゃないけど。」

「このような時間ですまないが、少し時間を割いてはもらえないか」
「お断りします」

考えるより先に口が動いた。

「たしかにこの時間では致し方ないか……。それでは明日、改めて

ということでは？」

「いや、そうじゃなくて」

なんで普通にアポイントとろうとしてるんだ、この男は。

「ええとですね、わたしと貴方とで何か話をする用事なんて、くないですか？」

それ以前にどこの何方様なんだ、こいつ。全く、これっぽっちも、思い当たらないんだけど。

「君にとってはそうかもしれないが、私にとっては必要があるからここに来たのだ」

とりあえず名前だけでも名乗ってくれないかなあ、不確定名黒男さん。

そんなことを考えながら相手との距離をとろうと地道にじりじり後退っているわたしに、彼は真顔でこう言った。

「我々の婚約についての話なんだ、中里さん」

大学内の最人気待ち合わせスポット、通称を噴水広場、別名が時計像前。この場所に正式名称があるのかどうか、わたしは知らない。呼び名で連想されるように、噴水があつて広場があつて、でもって夜間照明用の台と大時計というふたつを兼ね備えた、それはそれはへんてこな何かの像が鎮座ましましている。このモニュメントは卒業生が寄付したもので、デザインはその人によるのだとか。これが何の像なのかは、デザインしたその卒業生のみぞ知る、だ。

ちなみにこの大学に芸術系の学部はない。こんなけつたい——じゃない、面白いものを生み出した卒業生の職業が気になるところだ。その不細工、もとい、とても個性的なモニュメントを囲む形で置かれているベンチに腰掛け、わたしは迫りくる眠気と戦っていた。眠い。本気で眠い。もしそれが可能なら、今すぐ帰ってベッドにダイブしたい。そうしないのは、この後の三時限目に外語購読があるからだ。

外語学部でも文学学部でもないのに何故なのか、とは思うのだが、第一部と第二部のふたつに分かれている外語購読の、第二部の単位取得が卒業要件に含まれているのだ。そして外語購読第二部を選択するためには同第一部をクリアしていなければならない。さらには第一部を選択できるのが二回生以上ということで、一度単位を落としたら後がなくなってしまうという仕様。

そう決まっているものはしょうがない。しょうがないので真面目な学生らしく、テキストを広げ辞書を片手に予習なんぞをしている。しかし……眠い。

アルファベットを目で追っているとだんだん意識が遠のき、頭がぐくつと落ちかけてははつとして慌てて姿勢を正す。この繰り返しで、予習はちつとも進まない。

まずいなあ、とわたしはため息を吐く。運悪く厳しい先生様の担

当するクラスに割り当てられていて、困ったことにこの先生、ランダムに学生を指名してはその場でテキストの和訳をさせ、答えられなかったり訳が拙かったりすると容赦なく減点してくれるのだ。下手すると学年末試験で満点でも相殺で評価「不」確定という、笑うに笑えない状況に陥ってしまう。前期末、後期末と二回あるレポート提出である程度は救済されるという話だが、最初から減点されないのが一番いいに決まっている。

普段なら、こんな直前の昼休みに、食事もせずにテキストとにらめっこ、なんてことにはなっていない。遅くとも前日の就寝前にはきっちり片づけているのだ。

今回に限ってそれができなかったのは、あいつのせいだ。

あいつ。あの、いきなり現れてわけわからないことをぐだぐだと述べていった、あの黒好き男。

今日の寝不足は明らかにあいつのせい。あの男が悪い、これ決定。そろそろ日付が変わろうかという時刻にあいつに出会い、それからあいつの相手をしていたから、予習に当てるはずだった時間が削られたのだし、彼の語った内容について考えていてなかなか寝つけず、気づけば夜が明けていた。

生乾きの髪のままベッドに入り、ごろごろ寝返りうつていたため変な寝癖がついちやってる——のは、三分の一くらいは髪の毛ちゃんと乾かさなかった自分のせいでもあるけど。

それが関係しているのか、髪がなかなかうまくまとめられず、朝は何度かやり直す破目になったし、今も凝った首を軽く回しただけでまとめ髪がゆるんで髪がひと筋、首に落ちてきた。これで朝から何回目だったか。

いちいちまとめ直すのも面倒だし、今日はもうまとめずにおこうかな、いっそ。でも、邪魔になるんだよね、髪。ノート取っているときは特に。

バッグにヘアゴムかクリップか、何か入ってたっけ。

髪をまとめるのに愛用しているコームを引き抜き、うねうねにな

っている髪を手櫛で整えながらバッグの中を探る。愛用コーム二号、簪、前髪用の小さいクリップじゃ駄目――。

そのとき、隣に誰かが腰を下ろした。

「おはよ、カナちゃん。ここ座ったよ」

そんなとぼけたことを言ってきた学生の名を、三好みさ子という学部は同じでも学科が異なり、講義で一緒になる機会はないが、彼女もサークル――同回生、同クラスの友人ばかりで昨年結成したカラオケ同好会のメンバーなのだ。

みさ子は大学の近くにあるサンドイッチ屋の紙袋を手に持っていた。

その紙袋を開けながら、首を傾げる。

「カナちゃん、もうお昼食べたんだ？」

「いんや、まだ。これ終わらせたくてさ」

言いながら、わたしはテキストをばさばさ振ってみせた。

「三コマ目んだけど、時間なくて予習が手つかず状態」

「あらま。それはご愁傷様です」

おどけた調子で言い、みさ子は深々と頭を下げた。

「サンド一個分けたげようか？ 代金プラス手数料もらうけど」

「ん――いいや。四コマは空いてるから、三コマ目終わってから食べる」

「あつそ。それじゃあわたしは遠慮なく食わせていただきます」

「はい、どうぞ」

さて、わたしは予習の続きだ。

そう気合いを入れたとき、隣でみさ子が小さな声を上げた。

「何？ 頼んでないもんでも入ってた？」

「違う違う、そうじゃなくて――」

彼女は声を潜めて耳打ちした。

「見慣れない美形男子ひとり発見しちゃった。ほら、あそこの人」

「……ああ、そう」

みさ子はいい友達なんだけど、この、ちょっと見てくれのいい男

性を発見する度にはしゃいで報告してくれるところだけは、正直いらないと思うのだ、うん。

この子の場合には遠目に見て喜んでいだけで、相手に断りなく写メ、みたいな非常識な行動はとらないので、みさ子の美男発見報告を周囲は適当に聞き流している。

「あ、こつち向いた。一瞬こつち見た！ ほらほらカナちゃん、あの黒い服の人」

黒い服、と聞いてわたしが思い浮かべたのは、あの男だ。

いやいや、いくらなんでもそれはないだろう。あんな頭から爪先まで黒づくめなのは珍しくても、黒い服の男性ってだけならいくらでもいるんだし――。

そう自分に言い聞かせながらみさ子の視線を辿った次の瞬間、わたしは硬直してしまった。なんでここにいるのだろう、そこに立っているのは、スーツではなくカジユアルっぽいジャケットとジーンズという違いこそあれ――それでも黒一色なのは同じだ――まぎれもなくあの男だったのだ。

無言で突然立ち上がったわたしに、みさ子は目を丸くした。

「カナちゃん？」

「あ――と、ちょい用事思い出しちゃった。すっかり忘れちゃってて、急ぎなのにやばいかも、とか、あはは」

適当な言い訳で誤魔化しながら、テキストと辞書をバッグに突っ込んでいく。

「そんじゃあみさ子、また今度」

友人に軽く手を振り、わたしは足早に広場を離れた。

最後にちらりと振り返ると、あいつもこちらを見ていた。目が合う。挨拶のつもりだろうが、彼は少しでも手振ってきた。

わたしも手を動かす。こんにちは、でも、バイバイ、でもなく、動物を追い払うときのしっしっ、だ。

あの男はわずかに肩を揺らした。どうやら笑っているらしい。

――むかつく。

ようやく探り当てたシユシユで髪をまとめながら、わたしは昨晚の——日付的には今日になっていたが——ことを思い返していた。

「我々の婚約についての話なんだ、中里さん」

などと、真顔で意味不明理解不能な発言をした男を、わたしはおそらくはかなり間の抜けた表情で見つめていたと思う。

「……………は」

こんやく。婚約。婚約？

それはあれだろうか、将来は結婚しようねという約束ないし契約の、あの婚約のことだろうか。

それに今我々と言わなかったかこの人。我々ってどこの我々だ。

「単刀直入に言うが、私達の婚約を破棄したい。これは完全に私の勝手なので君を振り回してしまうことについては本当に申し訳なく思っし、勿論それなりの代償は支払うつもりだ。どうか承知してもらえないか」

真摯に言い、頭を下げまでする不確定名黒男さん。歳は三十から三十半ばまでくらいに見える。

特記事項、わたしとこの人はさっき初めて会いました。

特記事項その二、過去から現在に至るまでのどの時点においてもわたしに婚約者なんてものいません。

結論、

「失礼ですけど、人違いしていると思います」

言ってから思い出したが、わたしにとっては見知っても聞き知ってもいないどこかの誰かではあるが、相手は少なくともわたしの氏名と住んでいるマンション、現在大学生やっていることも何故か把握していたんだった。

こつも一方的にあれこれ知られているってどういうわけなんだろう

うと考えると、真っ先に思いつくのはストーカーだ。

しかし、いきなりストーク対象の前に出てきて婚約解消を申し入れてくるようなストーカー、いるだろうか。知らないうちに式場予約して友人知人に招待状までばら撒いてやがった！ ならありそうだけど、その逆の婚約やめますってことは——なんかちょこつと複雑というか自分が否定されたような気が。いや、ストーカーと決まったわけじゃあないけど。

男は何を言い出すのだというように片眉を上げた。

「人違いなどする筈がないだろう。君は確かに中里香苗さんだ。香苗さんも双子だという話は聞いていないし、まさかよく似た赤の他人だとも言うのか」

ええ、わたしも自分に双子の姉妹がいるなんて話は聞いたことありませんとも。生まれてこのかた十九年と十ヶ月弱ひとりっこのままだ。そっくりな別人説には縋ってみたいけども。

「あなたが言うようにわたしは間違いないく中里香苗ですけど、問題はその部分じゃなくてですね。ええと、あなたの言い方だと、わたしとあなたが今現在婚約関係にあるというふうに聞こえますが」

「いかにも」

素っ気なく頷く黒男。

いかにも、じゃないだろう、おい。

「それ、絶対に違います。婚約なんてした覚えありません。ちなみに親が仲良い人と将来は子供同士結婚させようみたいな約束した、なんて話も一度も聞いた覚えありませんから。ていうか、まずこれをお訊きしたいんですけど、あなたはいったい誰ですか」

「……兵吾だが。字は、兵隊の兵、五の下に口を書く吾でひょうこ」

「あの——それ、下の名前だけ、ですよ？ 名字じゃなくて」

「そちらは京吾と同じだからな」

………。

知らない人が追加されました。

だから、誰なんだそのけいこっていうのは。

知り合いにそんな名前の持ち主がいただろうかと思いを漁るが、ぱっと思いつける範囲内では確実はない。

「すみません、とりあえずフルネームお願いします。できたら漢字も」

訝しがる様子を見せても、不確定名黒男改め、自称兵吾さんとやらは「久喜」と答えてくれた。

「永久の久に喜ぶと書いてひさきと読む」

そして目を眇めて訊いてきた。

「まさかとは思うが、君は京吾の名字を知らなかったのか」

あり得ないだろうという口振り。本気で驚いているような声で。そうじゃないのだ。知らないのは京吾さんの名字ではなく、京吾さん本体のほうなのだ。

京吾さんって誰だ。

久喜京吾？ そんな人、知らない。会ったこともない。重なる時期に同じ学校に在籍していたという可能性は捨てられないが、仮にそうだったとして、その人個人を認識できるような距離ではなかったと断言できる。

「非常に申し訳ないんですけど、あなたの言うその京吾さんって人に心当たりがないんです」

すると久喜兵吾さんは失笑しかけという顔を一瞬見せ、

「そんなわけはないだろう」

「なんでですか」

「なんでって、君……」

そこで一旦言葉を切って、そして久喜さんは怖いほど真剣な表情になった。

「京吾だぞ。昨年亡くなった、久喜京吾。君の本来の婚約者だった。知らない筈がない」

どうしよう。またわたしの与り知らない新情報が出てきた。

わたしは最初は久喜京吾という謎の人物と婚約していて、でも今は目の前にいる久喜兵吾という人と婚約していることになっている

？ ええと、京吾さんは昨年亡くなっているわけで、当事者の片割れ他界につき約束はなかったことに、とはならず、相手が兵吾さんに変更になった、と。こういう理解でいいのだろうか。

それでもって兵吾さん的には会ったことない女と婚約なんかしてられるか、と直接相手に婚約破棄を言い渡しにやってきた？

うん。それなりに納得できる筋書きではある。思いつきり当事者のもう片割れであるわたしが何ひとつ知らないという事実を除けば、「何を言われようが知らないものは知らないですって。直接会ったことはありません。電話で話したこともありません。手紙のやり取り皆無です。いいですか？ わたしは、今日、あなたに聞かされ初めて、久喜京吾という人を知りました！」

きっぱり言い、わたしは久喜さんを睨み返した。

ヒールの上乗せ分を足せば成人男性の平均より軽く数センチほど高くなるわたしが、相手の目を真っ直ぐ見るために顔を上に向けるというのは、新鮮というかあまりないことではある。

久喜さんが何かを言いかけた時、物音がしてわたし達は揃ってそちらに目をやった。

ラフな格好をした若い女性が、コンビニにでも行くのか財布片手に階段を降りてきたところだった。オートロックの自動扉前で睨み合っていたわたし達に困惑したような顔をしている。

久喜さんはひとつ咳払いをして提案した。

「場所を移そう」

それに反対する理由はなかった。

会ったばかりの人間、それも異性をひとり暮らしの部屋に入れるような真似ができよう筈もなく、さりとてそこの駐車場の片隅でとなるとこの季節では蚊の餌になってしまう。

そんなわけで、話の続きは深夜帯にも営業しているファミリーストランでということになった。

道すがらわたしと久喜さんとの間に会話はなく、話の再開はファミリーストランの奥まった席に落ち着き、注文したアメリカンとアイスミルクティーを運んできた店員がテーブルを離れてからだった。

「本題に入る前にこれだけは確認しておきたいのだが」

そう口火を切ったのは久喜さんだった。

「君は本当に京吾との面識がなかったのか？」

わたしはこくこく頷いた。

「はい。本っ当に、全然まったく知りませんでした」

ましてやその面識のない相手に自分が売約済みでしたなんて話、寝耳に水にも程があるというものだ。

今時本人の意思まるっと無視して結婚相手決めるとかどうなのよ、というのは措くとしてもだ。

わたしの実家というのは大金持ち土地持ち証券持ちの類ではないし、やたら長くてご立派な家系図を誇るような名家でもない。中の中の下あたりをうろろろしている単なる庶民家庭だ。

親が決めた結婚だの許嫁だの、うちみたいな家には縁がない言葉だ——と一時間前なら豪語できたのだが、そのあたり何がどうなつてこうなっているのか、切実に知りたい。

「会ったことないっていつでも小さい頃のことだと忘れてるかもしれないんで、そのへんはちょっと自信ないんですけど」

「そうだな。本人にちゃんと確かめたことはないので推測だが、君

は少なくとも一度は京吾と会っていると思う。ちょうど婚約が成立した直前か直後か、そのどちらかに。逆算するとせいぜい三歳になるかならないかという頃だろうから、覚えていなくても不思議はない」

わたしは結構幼い頃の出来事を覚えているほうだ。そのわたしが覚えていないなら、性質の悪いインフルエンザで死にかけたり（二歳と五ヶ月）、母親が交通事故で他界したり（二歳と八ヶ月）と、このあたりだろうか。ちなみに認識している一番古い記憶が母の四十九日だったりする。

しかし……本人が全く了解してないつてのに、婚約成立も何もなくはないか？　そもそも現代日本において、それは通用しないと思うんだよね。いくら家族親族がこぞって薦め世間も太鼓判押すような優良物件が相手でも、当人が断固拒否したりぶち切れて親子断絶縁切り上等の覚悟で然るべき手段に出たら、それ以上はもうどうにもならない気が。

ストローの先でアイスティーに浮かぶ氷をつつきながら、わたしはそんなことを考える。

つつか、物心もついていないような時期に一度会ったかもしれないだけの相手と、わたしは婚約させられてたわけか。幼児だぞ幼児。物事の判断なんかできないぞ。仮に意思確認されて頷いたとしても、常識的に考えればそれは「あたし大きくなったらパパのお嫁さんになる！」亜種だろう。

そういえば、京吾さんっていくつだったんだろう。というかわたしとは何歳違いで、どちらが年長だったのだろうか。久喜さん、兵吾さんのほうが見た感じ三十代なので、京吾さんもそのくらいだったのかなとなく思い込んでいたが、考えてみればわたしより下だったという可能性もありなのだ。

たとえば二歳児のわたしと乳児の京吾さんとお見合いの真似事をさせられた——とか。久喜家の人々のことはわからないが、困ったことにうちの身内には喜々としてそういうことをやっちゃいそう

な人がいるのだ。

久喜さんが大きく息をついたので、わたしの意識は現実引き戻された。

「考えてみれば、京吾と面識があれば私を見てすぐにあれの身内だと見当がつきそうなものだからな。……実のところ極度に察しの悪い人間なのかとも思ったが」

こめかみを揉みほぐすようにしながら、そんなことを言ってくる。そこまで言うからには、ふたりの久喜さんはかなり似ていたのだろう。兵吾と京吾で名前も似ている、というよりこれはセットのような。

ひよつとして――。

「そんなに似てたんですか、久喜さんと京吾さんって方。ひと目見てぴんとくるくらいに？」

「ああ。兄弟だったからな」
「やっぱり。」

「双子だったんだ」

「……………ん？」

「ふたご」

「一卵性双生児」

一卵性の双子の場合、遺伝子情報が同一なので顔かたちも酷似する筈だ。そりゃあ太ったりやせたり、髪型や服の趣味、その他あれこれで差異はいくらでも現れるだろうけど。

一卵性双生児の片割れと面識がある人が、ある日ばったりもうひとりに出会ったとき、どう感じるものだろうか。

自分達に当てはめてみると、双子の片割れ京吾さんの知り合いである――と兵吾さんは考えてた――わたしが、ある日もうひとりである兵吾さんの電撃訪問を受けました。故人である京吾さんにそっくりな人を見れば驚くか、あるいは兄弟の存在を知っていればその正体にすぐ思い至り、そうでなくても明らかに血縁関係にある人だと推定するだろう、普通は。

それなのに、何も気づかず「あんた誰？」と言い出したわたしに
対して思うことが「こいつ鈍いな」でいいものなのか。なんだか釈
然としない。

ふと思いついて、わたしはさつきとは逆の質問をした。

「久喜さんと京吾さん、実はあんまり外見が似てなかったりしたん
ですか？ あ、一卵性双生児としてはってことですよ、勿論」

「そうだろうな」

久喜さんはあっさり認めた。

スティックシュガーの袋を片手で弄びながら、遠いところを見る
目をする。

「子供の時分には親族ですら見分けることができなくて混乱してい
たものだが、ある程度歳がたってからは――」

くしゃくしゃになったシュガーの袋を、今度は丁寧に広げていく。
「あれは私よりも早いうちに成長が止まったから、身長で差がつい
たのが大きかったかもしれない。それで他人に与える印象がかなり違
うものになっただろうから」

この人は絶対に百九十センチは越えて、おそらく百九十五近いと
思う。このぐらいあると混雑した街中でも背の高さだけで目を惹き
そう。

「京吾さんはどのくらいだったんですか、身長」

「正確な数値は知らないが、二十代男性の平均はぎりぎりクリアし
ていると常日頃主張していたらしい」

……双子なのに二十センチ以上の差がつけば、事あることにそう
主張したくもなるだろう。

わたしとならきつといい勝負だったろうけど――身長で女性相手
にいい勝負できて喜ぶ男性は稀少な気もするが――、どちらにせよ
わたしと京吾さんが背比べする機会は永遠に巡ってこない。

しかしまあ酷い話もあったものだ、とわたしは憤りを覚える。

乱暴な言い方をしてしまえば、双子のひとりが亡くなってその許嫁があぶれたからと、双子の残されたほうをスライド式に替わりの婚約者にしてしまおうということで、色んな意味でどうなのだそれは。

久喜さんも、そんなんでいいのか？——って、よくないから婚約をなしにするためにわたしに会いに来たのだった、この人は。うちの親も、こんな人生に多大な影響を与えるようなことをどうして秘密にしておいたのだろう。まさか忘れてたなんて理由ではさすがにないだろうし、不思議だ。

婚約というのは、いずれは結婚しますということ、その人の伴侶となつて添い遂げますってことで——そりゃ性格の不一致であつさり離婚、添い遂げるとこまでいかないかもしれないけど、一応気構えとしては。

とにかく、そういう約束をしておきながら当の本人には知らせずにおいて、そこになんのメリットがあるというのか。己に既に婚約者が存在すると知らないまま彼氏を作り、うっかり妊娠してしまつたのでできちゃった婚するからよろしく、などとある日突然娘に告げられるケースを想定しなかったのか我が父よ。

それに京吾さんが亡くなり婚約の相手が久喜さんに替わつたのは割と最近の出来事なのだから、せめてその時にでもふたりのことを教えてくれていてもよかつたのではないかと思う。わたしはきつとその時点で自分に婚約関係を継続する意思がないことを伝えただろうし、知らなかつたとはいえ婚約者であつた京吾さんのお墓に参ることぐらいはできた。

第一、予め兵吾さんの写真の一枚でも見せられていれば、会つてすぐああこの人かとわかつて時間を無駄にすることもなかつたのに。

兵吾さんのほうはすっかりわたしの顔を知っていたのだから、その点でも不公平というものだ。

「そついえば久喜さん。わたしの住所はうちの親に聞いたんですか？　あと最初からわたしの顔を知ってたみたいですけど、そつちもどうしてかなあ、なんて」

顔を知られていたのは、まあいいでしょう。ほら、お見合いなんかはまず写真、次に実際にお会いして、なのだし。

しかし住所——実家ではなくひとり暮らししているマンションを教えるなら、その前にわたしにひと言あつていいのではないだろうか。それを娘に内緒で婚約者用意していた人に求めてもなあ、という気もするが。

「京吾からよく写真を見せられていたので、昔から顔だけはよく知っていたが」

「え」

ええ？　昔からって、よく見せてたって、そんなことしてたのか京吾さん。

「一番最近のものなら今手元にある」

久喜さんは携帯電話を取り出し、何やら操作を始めた。携帯の色はメタリックなブルーで、持ち物まで全部黒一色にするほどのこだわりでもないらしいなどと思う。

しかし、久喜さんが携帯の画面に表示したものを見て、わたしは絶句した。

そこにはセミロングの髪で、鮮やかな色の着物を纏ったわたしがいた。高校時代は毎年同じ晴れ着を着せられていたが、髪の長さからみてこれは高校三年の正月だ。

写真の中のわたしは、目線だけは撮影者に向けお雑煮の餅を今まさに食べようとして大口開けていた。要するにすっごい間抜け面を晒している決定的瞬間。

「なっ、ななな、なんですかそれ！　よりもよってそんなアホ面写真兄弟で回し見するって、酷いじゃないですか！」

思わず腰を浮かせて久喜さんの携帯に手を伸ばしたが、それが届くより先に彼は携帯をポケットに戻してしまった。

「アホ面なのには同意するが、それを自分で言うか。ちなみに京吾がコピーデータを勝手に送りつけただけで、私が要求したわけではない」

だったらそんな写真データいつまでも携帯の中に保存しておかないで、とつと削除してくれと言いたい。

今はつきりと思い出したが、久喜さんが見せた写真は、父親の妹、わたしからすると叔母になる蝶子さんが、新しいデジカメ買ったのよと大はしゃぎで色々撮りまくっていた中の一枚だ。さらに思い出したが、昔からあの人わたしを被写体にすることが多かった、そういえば。近しい身内の気安さで、だらけきっているところだとか欠伸している瞬間だとか、他人に見せるには少々あれな写真もわんさかあったような、厭な記憶が。

まさかとは思っていたが、さっきの一枚以外にも間抜け面で写った写真が久喜家に流出していたらどうしよう。考えたところでどうしようもないけれど、考えるだに恐ろしい。

……ところでさっき、思いつきりアホ面って言わなかったか、久喜さん。

先にそう口にしたのはわたしだが、自分で言うのと他人に言われるのとは別だぞ。無言の訴えを込めてじとりと睨みつけてやるが、久喜さんは涼しい顔で無視してくれた。

「それから住所のほうだが、こちらは中里の——君の叔母にあたるのだったか？ 中里の蝶子さんが」

こっちも蝶子さんか。

「言い訳がましくなるが、私は君と連絡を取りたいと考えた時にまず、家族から君に私の連絡先を伝えて電話かメールをくれるよう言ってもらえないか、と彼女に頼んだ。頼んだのだが——これを機会に親交を深めるのもいいのかなんとかと数時間に亘って諭された上で住所を書いたメモを強引に押しつけられた」

「それは……」

「こちらとしても努力はしたのだが、そもそも話が噛み合っている
気がまるでしないような状況で、とうとう諦めた」

お疲れ様でしたとしか言いようがない。

ていうか何してくれちゃってるんだ蝶子さん。

わたしは叔母のおっとりとした顔を脳裏に思い浮かべ、ため息を
ついた。

だいたい直接会っているのに、わたしが婚約について何も知らないことを久喜さんに説明しなかったのか、蝶子さん。

なんて不親切なんだ蝶子さん。単に失念していただけかもしれないけれど。

わたしはげんなりしてしまった。

そりゃあ久喜さんだって、わたしが何も知らされていない、それどころか京吾さんとも面識がなかったとは夢にも思わないだろう、これでは。

久喜さんは店員を呼んでおかわりを頼み、わたしにも目顔でどうするか訊いてきた。

わたしの前にあるひと口飲んだだけのアイスミルクティーは、氷が溶けだして随分薄くなっているが、飲めないわけではないので断った。どうせシロップの味が勝ってしまったて多少薄くてもよくわからないだろうし、それにアメリカンとブレンドはおかわり自由でもそれ以外のドリンクは追加注文扱いになるからだ。

小腹がすいてきたなあとも思ったが、ものを食べるような時間でもない。帰ったらシャワーを浴びて寝るだけだ。でないと朝起きられなくなる。

携帯の表示でちらりと確認した時刻は、既に午前一時を回ろうとしていた。

新しく運ばれてきたアメリカンに、久喜さんは迷わずスティックシュガー二本分の砂糖を入れる。

コーヒーには砂糖もミルクも不要ですって感じなんだけどなあ、見た目の印象だと。顔の造りと味の好みに因果関係があるなどと考えているわけではないが、似合う似合わないはあると思う、ぶつちやけ。

軽くカップの中身をかき回してスプーンを置くと、久喜さんは「

さて、本題なのだが」と切り出してきた。

本題ってなんだっけ、と一瞬思ってしまったのは秘密だ。

「——ええと、わたし達は現在婚約していることになってるので、それを解消したいってことですよね」

「第一には、そうだ」

わたしが何も知らなかったせいで、本題に入る前に余計な時間を費やさねばならなかったということだ。親族は悪くてもわたしが悪いわけでは断じてないので、謝罪する気にはこれっぽっちもならないが、教えてくれてありがとうございました。

「別にいいですよ、婚約解消。というかむしろこっちから願います、今のところ結婚するつもり全然ないし」

わたしは軽い口調で久喜さんに言う。

結婚願望がないわけではないが、自分の人生設計では三十過ぎてからで、結婚を機に仕事を辞めて一年後には子供産んで——などと漠然と考えていたのだが、そうなるわたしはいいとしても久喜さんなんて立派に晩婚と言われるような歳だし。

それに知らないうちに他人に決められていた婚約者というのが、どうしても引つかかってしまう。というか気に入らない。

「でもわたしに言わなくても、久喜さんが断固拒否したら、それだけで婚約なしになったんじゃないですか？ ほら、わたしには事情を知らされてないからそれでショックを受けるとかないわけで、そこに花婿予定者がノーって言ったらうちの親は諦めたんじゃないかと。そうしたらすんなり解消でしょう」

「勿論、婚約の件を知つてすぐに、それを断りたい旨を久喜の長老格に伝えたし、君のところの蝶子さんにも説明して理解を求めようとはしたが」

あ、そうなのか。

やることはちゃんとやってくれてたんだな。そりゃそうか。わたしにとつてもだが、久喜さんにしても今後の人生を左右する一大事なのだから。

「それで駄目だったんですか」

まあ蝶子さん攻略を断念したのはわかる。これと思い込んだら最後、他人の意見は聞き流しまくる傾向があるので。

しかし我が中里家の蝶子さんはともかく、久喜さんの家の人はどうだったのだろうか。

それと——この婚約で何か得をするようなこと、双方の家にあるのか？

長老なんて言葉が出てくるあたりさりげなく久喜さんのところ是由緒ありそうなので、もしそうならばうちの家は得することになるかもしれないが、しかし逆に中里家には何もない。

「実のところ、君と同じく私も自分に婚約者が存在するとは思ってもしなかった。つまり、京吾と君との婚約については知らされていたが、あれの死後にそういうことになっていたとは全く把握していなかったということだが」

驚いた。それじゃあ何か、当事者ふたりとも完全無視の蚊帳の外で話まとめられていたわけ？

「まあ私については、事前に教えてしまえばその時点で話が壊れると危惧されたのかもしれない。見合い話は釣書も見ずに片端から断るばかりの上に、赤の他人と同居など真つ平なので結婚する気は全くないと常日頃から公言していたから」

ああ、たとえお見合いの席に引き出されたところで、そんなこと言い放つたらそれだけで話終わっちゃいそうだし。見合い話は断って正解かもしれない、この人の場合。会って即断されるだけの相手の人が可哀想だから。

「でも結局は知ったんですよ。ご家族の誰かがうつかり口を滑らせたとか？」

「先日たまたま親族を訪ねることがあったのだが、玄関先で突然、今度結婚するそうじゃないかおめでとうと言われた」

「はあ」

「何を言っているんだと返したら、そっちこそ何をとぼけていると

式の招待状を見せられた」

「……一応確認させてください。なんの式ですか」

「この話の流れで他にあるか。結婚式の招待状だ。君とわたしの」

「へえ、結婚式……」

「………なんだって？」

「式は九月一日だそう。その日が丁度君の二十歳の誕生日らしいな。思うに、前々から今年の九月一日、君の誕生日に合わせて結婚させようという計画になっていたのだろう。もっともその相手は京吾から私に変更を余儀なくされたわけだが。……しかし何も伴侶にこだわらなくてもいいだろうに」

久喜さんの言葉の半分も、呆然としているわたしの耳には届いていなかった。

結婚式って、結婚式って……いきなり知らされた上に残り日数二ヶ月とちよつとしかないって、そんな急な。結婚なるものを自分が当事者になるのを前提として真面目に考えたことなど、今まで一度もないというのに。

しかも相手が数時間前に初めて会ったばかりのこの人？ いや、久喜さんがわたしに会いに来なければ、式の前日や当日に初顔合わせになっていたのかもしれないのだから、それに比べたらまだましなのか？ ってそもそも婚約だの結婚だのを受け入れるつもりは断じてないぞ、わたしは。

なんで当人を見事に置き去りにしてここまで話が進んでいるのだろう。どう考えてもおかしい。あり得ない。ああ、頭の中で結婚の二文字がぐるぐると回っている。

煩悶するわたしをどこか興味深そうに眺めている——どうせ百面相が面白かったとかだろう——久喜さんに気づき、わたしは声を上げた。

「あの！ 当然撤回するんですよ、その式の招待状。でなきゃ困りますからわたし。久喜さんだって困りますよね？ それに出ませんからね、そんな式。どうしても花嫁役が要るならそのへんの熊のぬいぐるみでも使ってください。九月の初めは友達と旅行する予定だってあるんです」

実のところまだ本決まりではないのだが、高校生以下の夏休みが終わり大学の夏休みが明けるにはまだある九月初旬を狙えば、有名な観光地も空いているんじゃないか、という話は前から出ていたのだ。

「そう、そうなんですよ。わたしは九月一日には旅行に行っています。留守です。関東には、いいえ、本州にはいません。なので結婚式には出られません」

日程も行き先もほぼ白紙なのは言わなければいけない。なのでわたしはそう強弁した。

「それもひとつの手ではあるが」

久喜さんは顎に手をやった。

「私も、いざとなれば半年ほど行方をくらませるつもりで航空券を手配済みだ」

さらりと言ったけど、国外逃亡するつもりかこの人。

そういえば久喜さんの職業はまだ聞いていなかった。結婚させられそうなんで半年ぐらい行方不明になってきます、が可能ならば、サラリーマンではなさそうだ。それとも元々辞めるつもりだったとか、タイミングよく辞めたばかりで次の職はまだ決まっていなかったか。しかし格好からして普通の勤め人には見えないんだよねあ、久喜さんは。なんといっても黒男である。勤務先には普通のスーツを着て通っているのかもしれないが、わたしにとっては第一印象が黒い色だったため想像し難い。

「しかし、当日新郎新婦が揃って不在であつても、そのまま婚姻が成立したということにされてしまうという懸念がないわけではないので、やはりきちんと婚約そのものを……」

「ちょ、ちよつと待って下さい！」

わたしは思わず久喜さんの言葉を遮った。

「それ、なんかおかしいですって。普通当事者がどちらも厭だつて言つてたら結婚なんて成立しないでしょう。だいたい役所にどう届けるんですか。届けようがないですよ。ていうか届けたら偽造です、

偽造」

「——ああ、そのあたりも説明する必要があるのか」

久喜さんは眉間に皺を寄せて面倒だなと独りごちる。

どういう説明がされても納得できそうにないのだが、と思いながらわたしは待つ。

何やらえらく真剣に考え込んでいた久喜さんが再び口を開いたのは、ゆうに五分は経ってからだった。

「しつこいようだが中里さん、君は今まで久喜という名前を聞いたことはない、これは間違いないんだな」

「そうですけど」

本当にしつこいなあと思いながら答える。

「なら、伊斗という名の人物に心当たりもないな？」

「いとさん、ですか？ 知りませんけど……女性ですか？」

「ああ。今は久喜伊斗という」

だから、久喜とつく人に会ったのは、覚えている限りではあなたが初めてなんです。

「彼女は昔、私が生まれるよりずっと前に久喜に嫁入りしてきた人だ。今では長老格のひとりだ」

察するに久喜家の中では偉い部類に入る人らしい。

で、その伊斗さんがなんだというのだろう。

「彼女には兄だか弟だか、とにかく男きょうだいひとりいた。その兄弟が、君の何代か前の先祖になる」

わたしは目を瞬かせた。新たに与えられた情報を頭の中で整理する。

「——久喜さんとわたしは元々親戚？」

少なくとも伊斗さんという人は確実にわたしの親族なわけだ。親以外の身内というと高校生の頃に相次いで他界した父方の祖父母と蝶子さんしか知らなかったので、親類が増えるのはちょっと嬉しい。「私と君とでは遠すぎるが、まあ姻戚関係を辿っていけば無関係ではない」

つまり親の従兄弟の妻の兄の岳父の——みたいな細い繋がりということだろうか。

「それじゃあ、わたしと久喜さんに結婚しろっていうのは、その伊斗さんの希望だったりするんですか？」

自分の実家から新たに嫁を迎え入れて発言力増大計画？ などと漠然と考える。でも、わたしにとっては伊斗さんという人物も全く知らない人なんだよなあ。伊斗さんにとってのわたしも同じく。元から親しくしているのならわかるのだけど。

結局のところ久喜家の人々が何を考えているのか、理解できない。……うちの父親と蝶子さんもだけど。

「たしかに彼女の存在も大きいが」

「それじゃ、一度会ってみたいです、伊斗さんって方に。それで直接、わたしは久喜さんとは結婚できませんって言ってみたらどうでしょう。あ、念のため言っておきますけど、久喜さんだから厭だとかじゃないですよ。今まで存在すら知らなかった人と準備期間二ヶ月ちよつとで結婚なんてできるか、ってことです。そのあたりをじっくりと説明したらわかってくれないでしょうか」

「まあ、君が会いたがっていると伝えれば、あの人は喜ぶだろうな。そう言いながらも久喜さんはどこか渋い顔だ。

「わたしの何代も前の人の姉妹なら、結構お年を召された方なんですよね。お幾つなんですか？」

昨今、百歳近くになってもまだまだぴんしゃんしているお年寄りが多いが、伊斗さんはどうなのだろう。そう思って訊ねただけで、これは何も突飛な質問などではない。

しかし久喜さんは何故かそこで言い淀み、唐突に話題を変えてきた。それも、明後日の方向に。

「ところで君はオカルトなどは信じているほうだろうか」と。

「オカルト、ですか」

「いったい何を言い出すんだ、と首を傾げる。さらに言えば失礼ながら頭がおかしいんじゃないかとすら思った。

「魔術とか占いとかのオカルト？」

「そうだが、もっと広い範囲の——その、悪魔だとか妖精、妖怪、UMAなどの」

「……スカイフィッシュとか」

UMAで真つ先に思い出したのが、それだ。

「それよりも、人狼だの吸血鬼だのといった」

「チュパカブラ？」

先程のUMAという言葉と吸血というキーワードからの連想だが、久喜さんは何やら変な顔をした。

「君、少し知識が偏っていないか？」

「そうなのだろうか。」

普段の生活の中で伝説上の生物やUMAについて誰かと語り合う機会は皆無なのでよくわからないが、仮にそうだとしたら父親のせいだろう。わたしの中にあるその類の知識は幼い頃、子守歌代わりに父が語って聞かせてくれたものなのだ。わたしとしては全く興味が無い分野なので、それ以上の情報は仕入れていない。

「久喜さんはそういうの好きなんですか？ チュパカブラとかネッシーとかイエティとか」

「いいや、全く」

「じゃあなんでそんな話をするのだろう。わたしは疑問をありありと顔に浮かべ、久喜さんを見つめた。

「私は基本的に、自分で見たものか、信用するに足る相応の根拠を示されたものしか信じないことにしている」

それはまあ、知識情報に対する一般的な対応だろう。

「自分が直接見たこともなく、実在の根拠を示されたこともないので、私は悪魔も妖精も人狼も稲荷狐も化け猫も、その存在を信じていない。UMAも同じくだ」

「はあ」

そりゃあ大概の日本人がそうだろう。いちいち宣言するようなことでもないと思ったから、自然おざなりな返事になってしまっ

あと稲荷狐はちょっとカテゴリ違うくないか？

「だが」

久喜さんは続けた。

「吸血鬼は別だ」

そうですか、別ですか。別って何がどう別なんだろう。

「私は吸血鬼が実在すると信じている。正確には存在することを知っている。何故なら、私も吸血鬼と呼ばれるもののひとりだからだ」
久喜さんはそう言いきって、カップを口に運ぶ。堂々とした態度、
というには目が泳いでいて居心地悪そうな様子だ。

対するわたしはといえば、ぼかんとした表情で停止していた。

なんかさっきからおかしなこと言うと思ってたら、ついには自分が吸血鬼だなんて言い出した。これはあれか、世の中のどこかに生息するというなりきり吸血鬼か。黒一色の服装は役作りか。それとももつと深刻な状態でお医者様の出番なのだろうか。

そんなわたしの思考を読んだように久喜さんは、

「冗談で言っているのではないし、妄想でもない」

と釘を刺してきた。

「ですけど、妄想に取り憑かれている人って、自分の認識が妄想だ
っていつでも自覚しているものでしょうか……？」

「というかこの際、妄想に振り回されている頭のおかしい人間だと思っ
ていてもいい。この場で証明することが難しいが、これを前提
にしてもらわなければ話が進まん。とにかく私は吸血鬼だとい
うことと話を進める。異存はないな？」

「はあ……。それじゃ、久喜さんは吸血鬼ってことで」

相手の妄想を頭から否定してはいけません。

「だいたい、君の親族がちゃんとしていれば私がこんな面倒を引き受ける必要もなかったのだから……」

よくわからないが、久喜さんにとっても吸血鬼カミングアウトは本意らしい。ひょっとして場所の問題だろうか。客は疎らな深夜のファミリーストランだが、誰かが聞き耳を立てているのではない心配だとか。自分は日本人です、自分は菜食主義者です、などとはひと味もふた味も違うからなあ、自分は吸血鬼です宣言。

吸血鬼というからには人間の血が主食なのだろうか。そういえばどこかに自称吸血鬼の殺人鬼がいなかったつけ。それとも小説かなんかのフィクションだったかな――。

吸血鬼は人間に害を与える化け物として伝えられているモンスターだ。なのだから、目の前の男が真面目な顔をして自分は吸血鬼だと言えば、危機感を覚えるべきなのかもしれない。

しかし、だ。この時のわたしの中には、危機感のきの字もなかった。別の意味での危機感なら多少あったが。つまり、妄想が高じていきなり暴れ出しでもしたらどう逃げよう、という。

とにかく、現実感がない、このひと言に尽きる。

「吸血鬼って、満月の夜になると頭と首と内臓だけで飛び回るのがいましたよね、たしか」

「……そうなのか？」

「なんか可愛い感じの名前で。ぽ……ポンティアナ？」

「どこかの地名じゃなかったか、それは。いや、私はあまり伝承などには詳しくないのであれだが、とりあえず空を飛ぶ同族がいるという話は聞いたことがない。飛べたとしても何が嬉しくて内臓むき出しで飛ばねばならん。第一その場合、神経や血管はどうなるんだ。あれは全身繋がっているだろうに」

名称うる覚えの架空の生き物につっこまれても困るが、首と胴体を切り離せるのなら、神経も血管も脊椎も適当なところで切り離し可能になっているのではないかと思う。多分。どこが適当なところ

なのかはさっぱりわからないが、わたしが考えた生き物じゃないし。
「そういうものではなく、もっとう、オーソドックスな吸血鬼を
考えてもらえないか」

「オーソドックス……棺桶の中で眠って十字架とにんく日光が
弱点でお呼ばれしないと家の中には入れない」

よく知られている吸血鬼の特徴を列挙したつもりだが、奇妙に歪
んだ顔からして久喜さんのお気には召さなかったようだ。

「オーソドックスな吸血鬼って、そういうのですよね？」

思わず確認してしまう。

「たしかにそうだが……。いや、今は私が悪かったのか。すまな
いが一般的に考えられている吸血鬼の特徴は忘れてほしい。我々は
棺桶で眠らない。十字架にもにんくにも日光にも、特別弱いとい
うことはない。その必要がないというだけの話なのだから趣味で棺
桶を寝床にしている者がいないとは言いきれないし、個人の信仰信
条によって十字架に特別な反応を示す者がいてもおかしくはない、
といっても私はどちらも見たことがないが。中には極度のにんく
嫌いもいるだろうし、日光は——たしか北米や欧州にはアルビノの
同族が何人かいる。日本には今のところいないが。あとは、目の色
素が薄いので強い日光は苦手だとか、美容のために日の照っている
場所には出たくないとか、そのレベルだ。要するにどれも個性であ
って、種としての性質ではない。ちなみに呼ばれなければ家の中に
入らないのは単なるマナーだろう。やろうと思えば通りがかった家
に押し込み強盗に入れる。法と倫理に触れるのでやらないが」

久喜さんの言うことを聞いていると、ならばどこが吸血鬼なのか
と訊ねたくなる。それは普通の人間とどこが違うのだ。

ああでも吸血鬼というぐらいなのだから、

「それじゃあ人の生き血を吸わないといけない？」

「そういうわけでもない」

即答。ふたりの間に沈黙が落ちた。

「ええとですね、だったら普通の人はどのへんが違うんですか」

「そうだな……。何も知らない相手に自己の証明をすることがこれほど厄介だとは思わなかった」
久喜さんは苦い声で認めた。

「とりあえずそのへんは措いといていいんじゃないですか。さつき久喜さんが自分で言ったんですよ、妄想の世界に住んでる変な人扱いでもいいって。妄想なんだから証明とか難しいことはなしということに」

わたしは助け船を出してみた。悩む久喜さんを眺めていてもつまらないし、さつさと話を進めてくれないと帰れない。吸血鬼の証明は閑な時にでもひとりでゆっくり心行く許りどうぞ、などと思いつから。

「それで、久喜さんが吸血鬼なのとわたし達が結婚させられそうになっているのと、どこがどう繋がるんですか」

訊ねながらも、やはり現実感さはさっぱりない。なんだか相手に合わせてひたすら会話を続けるゲームをしているような気分だった。

「それは密接に関わり合っている」

微かな音は久喜さんが爪でカップを弾いたものらしい。

「結局のところ最初から話すのが手つとり早い。——君は昔、インフルエンザに罹って重篤な状態に陥ったことがあるだろう」

わたしは軽く目を瞠った。

あまりに幼い頃のこととてその時の記憶があるわけではないが、父親や蝶子さんからは何度も聞かされたことだ。

「よくご存じですね。ていうか婚約の相手なら病歴なんかも全部筒抜けるものなんでしょうか」

しかしわたしの疑問は無視されてしまった。

「ご両親は慌てて君を病院に担ぎ込んだが、病状はすんなり改善とはいかなかった。というより肺炎も併発して悪化の一途を辿った。生命が危ういという事態になり、入院の翌々日、君のご両親は賭けに出ることにした」

賭け？ 娘の命が危ない時に出る賭けというのは――。

「何故か君は全くの無知のまま育ったようだが、君のご両親はそれぞれが吸血鬼と呼ばれる存在と関わってきた家の出身で、そのため、そういう場合にとれる普通ではない手段について心当たりがあった」
久喜さんはただ滔々と語る。その目は伏せ気味でわたしを見てはいない。

「我々は、吸血鬼という種は、互いの血を介してその性質を分かち合うことができる。なんでもかんでもというわけにはいかないが、たとえば病に対する免疫ならば、血が合いさえすればほぼ確実に相手に与えることが可能だ。そしてこれは吸血鬼同士に限定したものではなく、吸血鬼が人間に己の血を与えた場合、同様のことが起こる」

なんだろう、厭な方向に話が進んでいる気がする。この先を聞きたいような、聞かないほうがいいような。

「確実な方法では決していないが、原因が病であれ怪我であれ、瀕死の人間に吸血鬼の血を投与すれば、上手くいけば劇的な効果が得られる。あくまでも上手くいけばの話だ。命が助かったとしても重い後遺症が予想される患者が全くの健康体にまで回復するケースもある。反面、リスクは多大だ。血が合わなければ、つまり与えられた血に対して拒絶反応が起これば、最悪では即死の上に全身爛れて見るも無惨な遺体の出来上がりだ。そうでなくても激しく体力を消耗することになるので、ただでさえ生死の境をさまよっている患者では救命も難しくなるだろう。極軽度の反応であれば保たせられようが」

そして、と久喜さんは抑えた声音で続けた。

「一度吸血鬼の血を与えられ、血が合おうが合まいが、拒絶反応で苦しんだ者も拒絶反応なしに血を受け入れた者も、生き延びた者は等しく、既に人間とは異なる存在になっている。例外はなく」

久喜さんの指がずっとわたしをさす。

「君も、そうだ。半吸血鬼とでも呼べばいいのか？　そういうものに変化しているんだ、もうずっと以前に。君の場合、多少の安心要

因があつた。それは人間として生を受け、吸血鬼の血を与えられることで吸血鬼と化した伊斗様の存在だ。吸血鬼同士であれ吸血鬼から人間へであれ、血を与えたときに起こる拒絶反応の有無は予測ができない。血液型で起こるものでもないし、実験室のシャーレの中では問題がなさそうに見えても実際に生身の人間に投与したら駄目だったというケースもあるらしい。だが、ある吸血鬼の血で子に反応が起きなければ、親や祖父母にもその吸血鬼の血が合うことが多い。子のきょうだいやさらにその子、孫もだ。その吸血鬼の血族である他の吸血鬼の血でも、やはり拒絶反応が起きないか軽微で済む可能性が高くなる。法則が解明されているわけではないので経験則に過ぎないが、君のご両親はそれに一縷の望みを見出し、久喜家に、というか伊斗様に泣きついた。他の家の吸血鬼の血を貰うよりも久喜家の者の血のほうが合いやすい筈だと考えたからだ。さらに言えば伊斗様自身の血が最もリスクが低いと思われたが、まあそれは実現しなかった。久喜の一族で、丁度君が運び込まれた病院からそう遠くはない土地に住んでいて、その年に猛威を奮ったインフルエンザには既に罹患して完治済みだった久喜京吾というのがいて、とにかく時間的猶予がなかったので、これに血を提供させるのがよろうということになったのだ。こちらとしても色々と思惑もあり、その上伊斗様の身内のことでもあるから、京吾はすぐに駆けつけ、今まさに死にかけている幼児のために己の血を分け与えたというわけだ」

わたしは、息を詰めて久喜さんを見つめていた。凝視していた。妄想男の戯れ言にしてはえらく手の込んだ作り話じゃないか？

「ただし、成功したとしても我が子を人ならざるものに変化させるということに他ならない。ご両親、とりわけ母君にはかなりの葛藤があつたらしい。血の投与はぎりぎりまで先延ばしにしたそうだ。

——君の心臓が一度停まるまで」

何を言うのだ。わたしの心臓が停まった？　なんだそれ。じゃあ今ここでびんしゃんしているわたしは何者だ。

いや、一旦心臓が停止するまでいっても、処置が早ければ回復することもあるのだっけ。わたしもそうだったんだろうか。

そうなのだろう。的確な処置を受けてわたしは息を吹き返した。わたしが生きているのは医療のおかげだ。間違っても――吸血鬼の血なんてものを与えられたためじゃあない。断じて違う。認めない、そんなことは。その上、この黒男の言によればわたしは半分吸血鬼になり果てているんですと。そんなこと――、

「嘘です」

口を衝いて言葉が零れる。

「でたらめです。妄想です。作り話です。そんなのわたしは信じません」

「信じないと言われても困る。誰が認めようと否定しようと事實は事実でしかない」

「じゃあなんですか、わたしは十七年前から人間やめてましたって？ どこにそんな証拠があるんです」

「この場で用意することはできなくとも、その証明ならば可能だ。医療機関に行き血液でもそれ以外の組織でも調べればいいだけだから。騒動になることは避ける必要があるので、我々の馴染みの病院で、ということになるが」

そんなこと言って、出てきた検査結果が信用できるものだという保証は誰がしてくれるのだ。馴染みの病院なら、たとえば何か上手いこと頼んで滅茶苦茶な結果をわざと出してもらうとか――って、そんなこと言ってたら世の中の何ものも信用できなくなってしまうけど。

「そうだ、そのことで忠告しておく必要があった。君、事故には重々気をつけるように。急病もだ。一般の病院に搬送されるとややこしいことになりかねない。それから間違っても献血などしようとは――」

「わたし、帰りますから」

ぴしゃりと話を遮り、わたしは立ち上がった。

財布から五百円玉を取り出して伝票の上に置く。

「なんか色々興味深いお話を長々ありがとうございました。今聞いたことはここを出たら即忘れようと思います。あと、できればこの先二度とお目にかかることがないようにお祈りでもすることになります。それじゃあ、わたしはこれで」

早口で言つてバッグを手に席を離れようとして——それができなかった。

「……そういえば、これがあつたな。ついすっかり忘れていた」

呟く久喜さんに顔を向けようとして、向けられない。目だけを動かすことすら、叶わない。

どうしたというのだろう、身体が全く動かないのだ。

何が起こったのかは、わからない。わからないが――。

わたしは、視界の端に辛うじて見える久喜さんの靴を睨んだ。といても目玉も動かせず力を入れることもできないので、あくまで気持ちだけ。

よくわからないが、この黒男のせいに決まっている。

まるで身体の周囲を一瞬のうちに樹脂で固められたかのように、指先を僅かに動かすことすらできないという異様な状態だった。

瞼は規則的に瞬きを繰り返すし、ちゃんと呼吸だつて続いている。だが自分でやろうとして瞼を閉じることとはできず、内心では大混乱であるのに呼吸は乱れず平静そのものだ。

自分の身体が全く自分の思うようには動かせないという、奇妙で気色悪い現象。

不意に視界が揺れる。わたしの身体は再び元の席に座り直す。荷物を隣に置き、足は揃えて両手を膝の上というお行儀のいい姿勢になる。わたしの意思とはなんら関係なしに。

気色悪いなんてものじゃない。

背筋が粟立つ思いだが、顔面は瞬きする以外ぴくりとも動かないまま。人形のように座つて、正面の久喜さんを見ているだけだ。

「失念していたが、我々吸血鬼の中にはささやかな異能を持つ者もいる。近くにいる人間を一時的に操るだとか、短時間の記憶をあやふやなものにするといったものだが。前者は今君自身に体験してもらっている。これで私の話を信じる気に、少しはなってもらえたらどうか」

失念していたなら最後まで失念したままでいてほしかった。

さつきから必死になって手や足をどうにかしようと足掻いているのだが、笑いたくなるほどどうにもできない。でも笑うことすらで

きない。

わたしは心の中で久喜さんを罵倒しまくった。この真つ黒変態自称吸血鬼男、能力だか手品だかを誇示したいのはわかったけど、それならもう目的は果たしたでしょう、さっさとわたしを元に戻せ。

「それで話の続きだが」

わたしはもうあなたの話なんか聞きたくないのに。なんで耳というのは常に周囲の音を拾うようにできているのだろう。それは周囲の音から危険を一秒でも早く察知するためだよ、うん。わかつてはいるが今は一時的に耳を閉ざしたい。

「君は現在、吸血鬼でないが人間でもないという状態だ。生きていくのに支障があるわけではない。人間に比べると多少傷の治りが早いだとか、一部の病気に罹り難いという違いはあるだろうが、疑念を呼ぶ程度の差はない筈だ。寿命も常人並み。もし子供を産むことがあっても、相手の男が吸血鬼か半吸血鬼でなければ子供は人間だ」
ああそうですか。

それよりいつまでわたしは身体のコントロールを奪われたままではないなければならないんだろうか。思う動作が何ひとつできないのつて、これすぐストレスが溜まるのだが。

「先程も言ったが、検査ひとつで露顕する危険はある。といっても先例もないので具体的にどういふ騒ぎになるのかは予想できんが。とにかく病院へ行くなら我々の息のかかったところを選ぶように。どうせこれも知らないのだから、いずれ一覧表を郵送してやる」

小さい頃から大学入学までお世話になっていた実家のご近所にある総合病院は、実は吸血鬼の御用達病院だったのだろうか、とふと思った。わたしがインフルエンザで入院したのもそこだ。

しかしリストにするぐらいあるのか、吸血鬼立ち寄り病院もしくは診療所。

「それで、ここからが肝心なところだが、君は今は吸血鬼でもなく人間でもない中途半端な状態だが、完全な人間に戻ることは不可能でも、完全な吸血鬼に変わることはできる」

さらりと人間には戻れないと宣告されてしまった。変化は不可逆ということらしい。

「久喜家が望んでいるのは、君が吸血鬼となり久喜家の一員に加わることだ。我々は数が少ない生き物なので、機会があれば同族を増やそうとする。もつとも、機会自体が減多にないので、昨今は減る一方だ。君は京吾の血を与えられた時、拒絶反応を起こさなかった。仮にあつたとしても医者や看護師が気づかない程度、ないも同然ということだ。半吸血鬼から吸血鬼に至るためには、さらに何度か吸血鬼の血を与えられる必要がある。通常は同じ吸血鬼の血を受けるもので、君の場合それは京吾だ。京吾の血なら拒絶反応がないことも判明しているのだから、無用のリスクを負う必要もない」

今となつては故人ですけどね、京吾さん。

あれ、ひょつとしてわたしと京吾さんの婚約つて……。

「そう、君は二十歳になつたら完全な吸血鬼へと変わつて、京吾の伴侶として久喜家の一員となる予定だった」

ああ、やっぱり結婚と吸血鬼化がセットだったのか。吸血鬼云々とかまだ完全には信じていないけれど。

「京吾は既に亡いが、私なら一卵性双生児なので京吾の血とはかなり近い筈だ。故に私の血でも君に合う可能性は高い。久喜家としては君に是非とも嫁に入ってもらいたいと考えているのだろ。幸いなことに君の親族も積極的なことだし」

当人置き去りに親族同士で盛り上がっていたところで、それがどうしたと言つてやりたい。

わたしはまだ当分結婚なんかするつもりないし、久喜さんもそれは同じなわけで。

——ところでわたしの身体はいつになったら自由になるのでしょうか。いい加減に解放してほしいのだけ。

「私個人としては結婚など願ひ下げだ。君が吸血鬼になることを望むなら必要なだけの血を提供するつもりではあるが、だからといって君を伴侶だの養子だのにする気はない」

そこは心配しなくてもいいです、とわたしは心の中で答える。わたしには久喜さんの伴侶になる気も養子になる気も、さらには吸血鬼になる気も、これっぽっちもないのだから。

謎の身体が自由に動かない現象は、ファミリーレストランを出てマンションの前で久喜さんと別れ、自分の部屋に入るまで続いた。

玄関から一歩上がったところで、突然身体を操っていた何かが消え去り、それがあまりにも急だったので対応できずにバランスを崩し、わたしは無様に倒れ込んでしまった。

こういうのを系の切れた操り人形状態と言うのだろうか、とわたしはどうでもいいことを考え少し笑った。

三時限目の終了後、学舎の廊下を歩きながらわたしは携帯の電源を入れる。

表示によれば新着メールが一件。

それは知らないアドレスからのものだったが、送り主の見当はすぐについた。——件名が「久喜兵吾」だったので。

内容はただ一文、

「先程の場所です。」

それだけだった。

莫迦正直に言われたとおり行く必要ないんじゃないかとも思った。その場合は噴水広場で久喜さんが待ちぼうけをくらうわけだが、他人の身体をいきなり操り人形状態にしてくれたむかつく自称吸血鬼の黒男など、深夜まで無為に時間を浪費した揚げ句に警備員に不審者扱いされたところで溜飲が下がるだけというものだ。

ただ、相手はわたしの住んでいるところを知っていて、わたしの叔母とは知り合いで、そして昨日の時点では知らなかった筈のわたしの携帯のメールアドレスを何故か今日はしっかり入手しているのだ。

待ち合わせと言うのもあれだが、久喜さんご指定の噴水広場に向かわずすっぱかしたところで、明日の朝にはマンションのわたしの部屋の前で待ち構えているかもしれない。

それを考えると、まあ顔ぐらいは見せておこうかなという結論に達し、わたしは噴水広場に足を向けた。幸いこの後は講義もない。

久喜さんの長身は、広場に入つてすぐに見つかった。

六月も終わりがけのこの季節に黒ずくめの格好、しかもジャケットは長袖。さすがに素材はこの季節に合わせたものだろうが、とりあえず見た目が暑苦しい。

広場にいるのは大半が学生だが、三十代四十代の聴講生は珍しくもないし、図書館などの施設を利用しに来る社会人も構内ではよく見かけるので、三十代に見える久喜さんも年齢で浮くことだけは無いのが多少の救いだ。

彼は何が面白いのだから、あの奇怪なモニUMENTを熱心に眺めている。

そしてやはり腕組みした立ち姿が無駄に威圧感を放っていた。思うに、無意識に腕を組むのは久喜さんの癖なのだろう。

「久喜さん、お待たせしました」

勝手に来て勝手に待っていた相手にお待たせしましたもないだろうが、だからといって来てあげましたというのもなんなので、ここは無難なほうをチョイスする。

久喜さんは軽く頷いて、

「昨日は遅くまで付き合わせてしまい、すまなかった」

まいったくだ。ついでに他にも謝罪を求めたいことはあるのだけだ。

しかし久喜さんの視線がわたしを捉えていたのは僅かな間で、すぐに例の時計像に戻ってしまった。

「君、この学生ならこれがなんなのか知っているか？」

「……時計ですけど」

期待されている答えではないだろうなと思いながら、わたしは返答する。案の定、

「そうではなくて、時計盤が嵌まっているこの像だ。さつきから色々と考えているのだが、どうもわからん」

真剣に観察していると思えば、そんなくだらないことに頭を悩ませていたらしい。

「さあ……わたしに訊かれても。そもそも知ってる人、これのデザインした人以外にいないんじゃないかな。ちなみに希望の灯火ってベタな名前だそうです。大学のウェブサイトにもそう書かれてました」
それを聞いた久喜さんはぼかんとした顔になった。

「どこがだ」

「いや、これ照明も兼ねてるんですよ、常夜灯。こことかこことか、この丸い部分がこう、ぼんやりと……。ほら、灯火」

「灯火はそれで納得するとして、どこが希望だこれの。というか、その明かりの点いた状態を想像しようとしても、不気味なものしか思い浮かぶんだが」

そりゃあ、真昼の太陽の下で見ても不気味なものが、夜間だけ如何にも希望の二文字を体現した神々しい像に化ける筈もなし。昼間見て不気味なら夜に見てもやっぱり不気味なのだ。もっと構内の隅

の寂れた場所に飾られていたならば絶好の肝試しポイントになっただろうに、と惜しまれているほどだ。

希望の灯火なる名称にしても、せめて名前ぐらいは学校に相応しいものをという苦肉の策ではないかと思われる。希望とか灯火とかついていれば、それだけでなんだかいものだという気にならなくもない。実物はこれだけだ。

なおもしげしげとモニメントを眺めている久喜さんだが、まさかこれが何をモチーフにした像なのかを訊ねるただけにわたしを呼び出したわけでもないだろう。そう思いたい。ちよつと疑ってしまふほど時計像にご執心のようなが。

「それで久喜さん、まだわたしに用があるんですか？　でなければさっさと帰りたいんですけど」

誰かさんのせいで睡眠不足だし、とは声に出さず心の中だけで呟く。

久喜さんは当然だと言った。

「用がなければこんな時間には出歩かないし、大学などにも来ない。第一いつもならこの時間は寝ているんだ、私は」

はあ、そうですね。なら寝ていればいいのに。生活のリズムを崩さざるを得ないほどの大事でもあったのだろうか。

「ところで君、子供の相手は得意なほうだろうか。いや、女性なら多くは男性よりも向いているのだろうか、どうしても向き不向きはあるだろうからな」

「……なんで子供？」

わたしは首を傾げた。ちなみに父方の親戚は少なく、母方は祖母母すら会ったことがないわたしには、親戚の小さい子と遊んだなんという経験もない。経験がないのだから、得意か不得意かもわからない。

「別に子供嫌いではないと思いますけど、小学校の時の、上級生と下級生ペアでのオリエンテーション以来、年下の子の相手したことないですよ」

「ああ、嫌いでなければとりあえず問題ない。ならこれから一緒に来てもらえるか」
なんでそうなる。

「悪いんですけど、わたしまだこの後も講義とってるんで」

というのは真つ赤な嘘だが、同行を断る理由としては尤もらしいものだと思う。

しかし久喜さんはわたしのささやかな抵抗を「嘘をつけ」と一蹴した。

「金曜日は三時限目までで終わりだとここには書いてある」

そう言つて久喜さんが取り出したのは、折りたたまれた紙だった。

「なんですかそれは」

「君の履修状況及び単位取得状況」

次の瞬間、わたしは久喜さんからその紙を強引に奪い取っていた。広げてみればたしかにそれは、履修登録後に学生に渡される、本年度の履修状況と昨年度までの単位取得状況を知らせるものである。なんで久喜さんがこれを、と問い詰めかけて、しかしわたしは押し黙った。脳裏を過ぎるのは蝶子さんである、またしても。学生に渡されるのと同じのものが保護者宛に郵送されることになっていた筈だ。おそらくはそれだろう。

あの人はどうしてこう、プライベートなものをほいほいと他人に渡しているのだろう。そもそもわたしの保護者はあくまで父親であり、その父親宛のものが当たり前のように蝶子さんの手に渡っていること自体が首を傾げたくなるところだが、あの父親であの叔母なのでそこは目を瞑るとして。

「……そんな必死の形相で隠さねばならんほど素晴らしい成績でもないように思うが」

空になった手をひらひら振りながら呆れたように言う久喜さんを、わたしはぎろりと睨めつけた。

ええ、ええ、自慢じゃないが成績は結構優秀なほうですとも。というかそれなりに時間を割いて日々地道に努力しているのだから、

それで評価スタボロでは自分が可哀想すぎる。実のところわたしは費やした時間に見合ったレベルを維持するのがせいぜいで、それ以上には決して行けないタイプなのだ。

「これも蝶子さんが渡したんですか」

答えはわかりきっているが、いちいち訊ねるのは念の為、確認のためだ。わたしは奪い取った紙をバッグの奥にしまい込んだ。

「君の住所と一緒に。訪問するにも相手のスケジュールがわからなければ無駄足になるかもしれないからと」

サークル活動までは考慮に入れていなかったため、結果的には何時間も無駄にしまったわけだ。

「それじゃ携帯のアドレスは？」

「それは今日。数時間前に電話をかけたのだが、その際に教えられた。君と会ったが電話番号もメールアドレスも交換していないと、うっかり口を滑らせたというか聞き出されてしまったというか。それで押しつけられたわけだが、まあ役には立ったな、一応」

事情を聞いただけでどっと疲れてきた。

個人情報筒抜けですか。完全無関係の本当に他人でしかない人にまでばら撒くんではなければ、まあいいけど——いや、本当は全然よくないけど。

「疑問が解消したならそろそろ行くぞ」

踵を返してさっさと歩き出した久喜さんを、わたしは慌てて追った。久喜さんは最後に一度振り返って件のコミュニケーションを一瞥したが、そんなに気に入ったのだろうか、不気味な時計像。

それはともかく。

「ちょっと待って下さい！」

現在ただいま最大の疑問が全く解消されていない。

「いったいどこに行くんですか。あと、子供がどうこうっていうのはなんなんですか」

久喜さんは歩みを止めることなくわたしの質問に答えた。

「昼前、うちに親族のひとりが押し掛けてきて居座っている」

「はあ。それで？」

「単独ならまだしも、奴が子と孫まで連れてきたおかげで、やかましくてかなわん」

「……だから？」

「おまけに結婚相手に会わせるとしつこいし。例の招待状は奴も受け取っているからな、否定しても全く信じようとしな。仕方がないのでとりあえず君を連れて行って奴に会わせ、ついでに子供の相手でもしてもらおうかと」

「はあ？」

わたしは思わず耳を疑った。なんだその勝手な言い分は。呆れてものも言えないとはこのことだ。

立ち止まったわたしに気づいて、久喜さんは怪訝そうな顔で振り向く。

「どうかしたのか」

どうかしたのか、じゃないだろう、この黒男。なんでそんな理由でわたしが振り回されなければいけないのだ。しかもさっきの久喜さんの台詞によれば、行き先は久喜さんの自宅ではないのか。

「なんで昨日会ったばかりの人の家に行って知らない人の子供の相手しなきゃならないんですか」

納得のいく理由を示してみるとばかり、久喜さんを見返す。

「別にうちに来る必要はない。むしろ三人まとめてどこかへ連れ出してほしいほどだ」

そういうことじゃない。

だいたい自分の親戚なんだから、諦めて受け入れるか自力で追出す方法を模索するかしたらどうなのだよと言いたい。子と孫まで連れて遊びに来るぐらいならそこそ親しい相手なのだろうし、考えてみれば今だって自宅にその人達だけ残してきているわけで、相手との信頼関係がなければそれは無理だろう。そりゃ孫までいるようなお年寄り相手ではきついことも言えないのかもしれないけど。

わたしが素直に応じそうにないと悟ったのだろう、久喜さんは目

を眇めて、

「なんなら君の意思とは関係なく強制的に同行ということでもいいのだが。君の身体を操って」

「なっ……」

わたしは言葉を失った。

脅迫めいたことまで言い出すほど子供嫌いなのだろうか、この男は。あるいは親戚の人が余程苦手なのかもしれない。

なんにせよ、わたしに拒否権をくれるつもりはないようだ。

諦めて、わたしは両手を肩のあたりまで挙げて見せた。ホールドアップ。降参。

「わかりました。行きます。行けばいいんでしょう」

「そうか。素直に従ってくれるならそれに越したことはない。あれは疲れるし」

……やっぱり気力の続く限り抵抗を試みるべきだったかも、と少し後悔しながら、再び歩き出した久喜さんを追った。

幸いなことに、知っている顔にばったり出会すこともなく構内を出た。友人にでも見つかつてしまったら久喜さんについてどう説明したものかと密かに心配していたので、わたしはほっと胸を撫で下ろす。

久喜さんがコインパーキングに停めた車を取りに行っている間に、わたしはコンビニで遅い昼食を調達することにした。時間が悪いためか陳列棚には選べるほど商品が残っておらず、わたしが手に取ったのはおにぎり二個とペットボトルの緑茶だった。

少し考えて、ペットボトルをもう一本追加する。昨夜のファミリーストランで頼んだアイスマルクティーの代金は、結局久喜さんが支払ってくれた。なのでこれで貸し借りなしということにしてしまおうというわけだ。ペットボトル飲料とファミリーストランのドリンクでは値段に倍以上の差があるが、そこはそれ、相手のほうが年長者だからということ。それに久喜さんがわたしを訪ねて来なければ深夜のファミリーストランに入ることなかったのだから。

久喜さんの車は派手ではない色味の青いものだった。やはり黒好きは衣類限定なのだろうか。

詳しくないので車種はさっぱりだが、軽自動車でないことだけはわたしにもわかった。

助手席に乗り込むと、わたしはペットボトルの片方を久喜さんに差し出した。

「ファミレスで奢ってくれたお礼です、一応」

「それはどうも」

久喜さんの手に渡ったペットボトルはそのままドリンクホルダー行きになったが、腐るものではないので別にいいだろう。

「それは昼食か？」

わたしの持つコンビニ袋に目を留めて久喜さんは訊いてきた。わたしは頷く。

「色々と事情があつてお昼は食べ損ねたんで主たる原因はこの男だが。」

「だからといって米だけはないだろう。君、栄養バランスを考えて食べているのか？」

顰めっ面でそう言われてしまった。どうも普段から適当な食生活なのではと疑われているらしい。実際のところ少々いい加減なのも事実なので、下手に反論するのは避けて、食べることに専念するふりで誤魔化した。

お腹にものを入れて人心地がついたところで、ようやく周囲に気が向く。

車はどうやら都心方面に向かっているようだ。

「久喜さんはどこに住んでいるんですか？」

短い返答はわたしのおぼろ気な記憶によれば都心に程近い地名で、いいところに住んでいるのだと素直に感心してしまう。色々と便利そうで羨ましい。

それにしても、車内でふたり、会話はほとんどなしというのは居心地が悪い。こういう場合は運転者に気を遣つて、助手席に座っているだけの人間が話題を見つけて話を振るべきなのだろうか。しかし久喜さんとの共通の話題なんか見当もつかない。

婚約云々は蒸し返したくないし、双方とも結婚の意思なしということである意味終了した話題だ。

いつそラジオが音楽をつけてくれたらと思うのだが、それをわたしがい出すのも躊躇われる。

というか久喜さんは空気が重いか思わないのだろうか、と運転席を横目で盗み見るが、横顔からその内心を量るなどという高等技術は持ち合わせていないのだった。

まあこの人の場合は沈黙が苦にならないタイプなのかもしれないが。

結局、何か会話の取っかかりになりそうなネタは、などと心の中でうだうだ考えているうちに車は目的地に到着した。所要時間は大体四十分というところ。

車が停まったのは高層マンションの地下駐車場だった。駐車場に入る前に仰ぎ見た外観は、そのまま広告に使えるそうなザ・高級マンションと言わんばかりのものだったし、この人、本当にいいところに住んでいる。

不躰だとは思いついながらも、ついつい口に出してしまった。

「家賃がお高そうなところですね」

「いや、ここは全戸分譲だ」

そう言うからには本来の持ち主に家賃を払って住んでいるというわけではなく、ちゃんと久喜さんの名義なのだろう。

車を降りてエレベーターホールに向かう。ちなみにわたしが久喜さんに渡したペットボトルの緑茶は、気の毒なことにドリンクホルダーに置きっぱなしにされていた。

この駐車場は完全に住人用のようで、鍵を挿して暗証番号を入力しないとエレベーターは動かないようになっていているらしい。操作をしている久喜さんを眺めながら、わたしはふと思ったことを訊ねてみた。

「今更なんですけど、久喜さんはなんのお仕事をされているんですか？」

昨夜も疑問に思っただけはいたのだ。服装からするとなんとなく勤め人ではなさそうな感じだし、本人が普段は昼間寝ていると言っていたから仕事をするのは夜間や早朝なのだろうと思われる。親から受け継いだ資産があるので定職には就かず暮らしています、というのもありかもしれないが――。

「副業はデイトレーダーだ」

久喜さんは何故か副業を先に答えた。

やって来たエレベーターに乗り込みながら、「じゃあ本業は？」
と言うと、

「絵描き。ただし過去十年ほど、それで収入を得てはいない」ということらしい。

何も律儀に売れていないなんて白状しなくても、とか、こういう場合ちゃんと収入があるデイトレーダーのほうが本業ということになるんじゃないあ、とか思うことはあるのだが、そのあたりは久喜さんなりのこだわりなのだろう、ということにしておく。

「油絵ですか？」

「ああ。風景画を。もっとも他人には風景画だとひとめで理解されたことはないが。金になるわけでもないし、今となっては単なる趣味だな」

久喜さんは淡々と言う。特に悔しげでも残念そうでもなく、その逆に楽しげというわけでもなく。それがとても好きだから絵を描ければ他はどうでもいい、というほどの強い思い入れがあるようでもなく。

よくわからない人だと思う。

わからないといえば、もうひとつ。風景画というとわたしは写実的なものを思い浮かべるのだが、ひとめ見て風景画とわからない風景画というのはどういったものなのだろう。風景画には見えないなら、じゃあ何に見えるというのか。ていうかいくら作者が風景画だと主張しても、他の人が見て風景画だとわからなければ駄目なんじゃないだろうか。それとも芸術なのだからそういう変わったものもありなのか？

わたしは首を傾げた。

久喜さんの自宅があるのは、エレベーターが故障したときのことを考えると気が遠くなりそうな三十四階だった。

各戸のドアの脇には花台が置かれていて、そのどれもにフラワーアレンジメントが飾られている。久喜さん宅のものは大きな葉をつけた木の枝——名前は知らない、見慣れない植物だ——を中心に緑だらけで花のない籐籠入りのアレンジメントで、一瞬造り物かと疑ったがそつと触れてみたら間違いなく生の葉っぱだった。こういうのもいちいち専門の業者が入るのだろうか。月々の料金がすごそう

だ。
久喜さんがドアを開けると、途端に中から赤ん坊の泣き声が響いてきた。それと重なるように、小さな子供の甲高いしゃぎ声も。

ため息をついた久喜さんは顔中でうんざりだと主張する苦々しい表情になっている。

子供が苦手なのか騒々しいのが厭なのかはわからないが、たしかに予告なしの訪問でこれでは同情の余地はある。だからといってわたしをここまで引つ張ってきたことを許す気はないが。わたしのほうこそため息をつきたい。

子供の声と一緒にカレーの匂いも漂ってきて、子供の好きそうなメニューだからなあ、などと考えているうちに、久喜さんはさつさと中に上がり、「三郎太！」と誰かの名を呼びながら奥に向かいかけていた。しかし途中で立ち止まり、すたすた戻ってくると物入れからスリッパをひと揃い出してわたしの前に置いてくれた。そしてそのことに礼を言うより早く、再び奥に行ってしまう。わたしが小声で「お邪魔します」と言いながら部屋に上がる頃には、彼の姿はわたしの視界から完全に消えていた。

久喜さんを追って足を踏み入れたところはただっ広いリビングで、そこには久喜さん以外に三人の人物がいた。

わたしより少し歳が上に見える茶髪の男性と、彼が抱いてあやしている乳児、それからパンダのぬいぐるみとイルカのぬいぐるみをそれぞれ片手で掴んで、「ごっつんこ！」とぶつけて遊んでいる四、五歳ほどの女の子。

茶髪の人が子供ふたりの父親なのだろうか。久喜さんによれば遊びにきたのは親戚の人とその子及び孫ということだが、リビングにいるのは三人だけで、子供達の祖父ないし祖母の姿は見えない。

男の人がわたしに気づいてにこりと笑いかけてきた。

「君が兵吾のお嫁さんかあ」

「違います」

開口一番それが。久喜家の皆さんには、わたしイコール久喜兵吾さんともうすぐ結婚する人間と認識されていることは一応理解しているが、挨拶も抜きでそれが。

茶髪の人は不思議そうな顔で久喜さんに「喧嘩？ 婚前破局？」

などと質問を投げかける。だが、声音からすると多分楽しんでいる。膝裏の少し下にぼすんと軽い衝撃を受けて見下ろすと、こちらをじつと見上げている女の子と目が合った。さっきのぼすんは彼女のパンダかイルカによるものだったらしい。

「お嫁さん！ ドレス着た？ ふわふわの」

……いや、そんなきらきらした目で見つめられても。

まだお嫁さんにはなっていないし、当分はなるつもりもないし、ついでにふわふわひらひらしたウェディングドレスは着ないんじゃないかと思う。単純にわたしの趣味ではないのだ、ああいうロマンティック系のは。

——ということ、どうすれば幼児にわかりやすく伝えられるのか。難問である。

しかしわたしが頭を捻る間もなく、

「じゃあ狐さんの服だ！」

「き、狐？」

なんでいきなり狐が出てくるんだ。狐ってキタキツネとかホツキ

ヨクギツネの狐でいいんだよね。狐さんの服って何。毛皮？襟巻き？はたまた着ぐるみなのか。それとも動物の狐じゃなくて、キツネという苗字の人のことだったりするのか。

すると茶髪の男性が笑いながら教えてくれた。

「こないだ読んだ絵本が狐のお嬢さんが宿敵狸一族の若頭に嫁入りするってやつでね、それで、出てくる動物がみんな着物姿だったんだよ。羽織袴とか振袖」

それでぴんときた。要するに白無垢のことを言いたかったらしい。

……どっちにしろ着てないし、着ないけど。

わたしにとってはラッキーなことに、女の子は絵本という言葉に耳にしたらそちらに興味を惹かれたらしく、「さぶちゃん、ご本読んで！」と茶髪さんに纏わりついている。

さつき久喜さんが呼んでいた三郎太というのが、この男性の名前であるようだ。

明るい茶色によく見ると金色の筋が入っている髪は全体的に長め、繁華街に屯する若者に混じっても違和感なさそうな服装、いかにも今風、やや軽めタイプといった容姿で名前が三郎太、愛称さぶちゃん。

ひと様が親御さんから貰った名前に対してなんなんだが、端的に言って似合っていない。

ぐずる赤ん坊を抱きながら、イルカの尾を掴んでばすばす肩を叩く女の子をあしらっている三郎太さんに、仏頂面の久喜さんは苦言を呈した。

「何度も言うが、私は結婚する気はないし、婚約は解消させるつもりだ。これについて中里さんも同意見で」

「ええ？ いいじゃない、結婚。せつかくお膳立てしてもらったんだしさあ、一度やってみなよ、意地張ってないで」

「冗談だろう。だいたい元は京吾の婚約者だ」

「あれ、こたわってるのはそこ？ 別によくないかな、相手が了承済みなら」

その相手というのはわたしなわけですが、全然了承済みじゃありません。というか一番何も知らされないままで、意思表示の機会を与えられてないのがわたしだと思う。

久喜さんが独身主義を返上するのは自由だが、とりあえずお相手はわたし以外の誰かにしてくれないと困る、本当に。

わたしは険悪な形相の久喜さんとにんまり顔の三郎太さんの間に割って入った。

「お話し中のところすみません。とりあえず自己紹介しておきたいのですが。わたしは中里香苗といいます。現在大学の二回生で卒業後は就職希望。なお、こちらの久喜兵吾さんと結婚する意思是欠片もありません」

「へえ、そうなの？」

「そうなんです」

そういえば結婚式の招待状が既にばら撒かれ済みなのだった。ひよつとして一軒一軒久喜家の親類縁者巡りをして否定して回る破目に――いや、それは久喜さんがどうにかしてくれるだろう。というかが何かなんでもどうにかしてもらわないと。

「なんだ、つまらないなあ。それじゃあさ、一年間お試し結婚なんてどう？」

そこまでして結婚させたいのだろうか。せめて花嫁を、わたしではなくもつと協力的な人間にすぐ替えないと無理なのは。

こちらが全く乗り気でないと見てとるや、三郎太さんは肩を竦め、「まあいいんだけどねえ、僕はどっちでも。渋々結婚しちゃった直後に理想のダーリンが現れた！　なんてことになるかもしれないし？　それはそれで面白そうだけど」

面白ければなんでもいいのか、この人は。

「それで、自己紹介だっけ？　僕は久喜三郎太といいます。初めまして、どうぞよろしく。その兵吾とはかなり遠い親戚という関係です。でも家系図の上で遠いってだけで、昔から散々世話をしてやってるし、住んでる土地も近いんだけどね」

立ち上がると、三郎太さんの目線はわたしより少し下だった。推定、百六十五から八センチの間。

三郎太さんは背伸びでわたしと目線を合わせ、「最近の子って、女の子でも高いよねえ、身長」と笑った。その彼だって最近の子に分類される年代なのに。

「それでねえ、この子は僕の長男で善明」

三郎太さんは腕の中の赤ん坊をそう紹介し、次いで女の子に目を向けた。

「で、こっちは僕の初孫。名前はみずの、苗字は久喜じゃなくて三嶋。歳は四歳。よろしくね」

「よろしくね！」

三嶋みずのちゃんは大きな声で三郎太さんの言葉を真似て、にっこりと笑った。

孫っていったいなんだっけ、なんて一瞬本気で考えてしまった。

孫は孫だ、本人を基準にしたら子供の子供、二親等離れた直系卑属。久喜さん曰く、親族が子供と孫を連れてきた。

三郎太さんによれば、彼の子供が赤ん坊の久喜善明君、孫にあたるのは三嶋みずのちゃん。

つまり三郎太さん、善明君、みずのちゃんの三人で、親族、その子供、孫、が揃っている。

子供と孫と聞いたので、ならそのふたりも親子関係にあるのかとすっかり早合点したのだが、それが実は親子ではなく、姪っ子とそれより年下の叔父さんという関係だっただけのことだ。世の中、甥姪より若い叔父さん叔母さんだっていくらでもいるのだから、それはいい。

問題は、善明君の父親でみずのちゃんの祖父であるところの三郎太さんが、その外見からはどう考えても二十代半ばより上には思えないところなのだ。

見た目のままなら二十三か四、実年齢より若く見られるタイプだと仮定しても三十が限界。

男性の結婚可能年齢は十八歳以上という法律のことは忘れて、すごく早い時期に子供を産ませたのならどうかとも考えてみたが、孫が現在四歳なのだから、三郎太さんが十三歳で親になって、その子もやはり十三歳でみずのちゃんの親になったとすればぎりぎり……って我ながら無理がありすぎる。却下。

残る可能性の中で現実味があるのは、歳の近い人と養子縁組したら孫ができた、とか。他にありそうなのは……。

「初孫と言うが、連れ子の子だろう、たしか」

久喜さんが間接的に答を教えてくれた。しかし小さい子の前でそういう言い方は、デリカシーに欠けてる気が。

とにかくみずのちゃんは三郎太さんの奥さんの子供の子供で、三郎太さんとは血の繋がりはないらしい。そういうことなら奥さんの年齢がずっと上だとすればおかしくはない、か？

「何言うかなあ、兵吾は。連れ子っていつてもちゃあんと僕の血をあげた子だよ？ 実の娘も同然でしょうが」
血。

——そういえばこの人達、吸血鬼なのだった。

正直に言えば半信半疑というか、三信七疑、いや、二信八疑ぐらいの勢いで信じていないのだが、ていうかわたしの精神的平穩のためには久喜さんが妄想世界の住人でしたというオチであってほしいのだが、さて、久喜家の人々のうち兵吾さん三郎太さんの二名が揃って同じ妄想を抱くという可能性はあるものだろうか。

「すみません、ちょっと質問です。三郎太さんは吸血鬼、なんですか？」

「そうだけど？」

当たり前のことをなんでわざわざ訊くんだろうこの子、みたいな顔で返されてしまった。

三郎太さんの足に蟬のようにしがみついているみずのちゃんが、
「あのね、みずのも吸血鬼！ でもねえ、幼稚園の先生には言ったらめっなの！」

と駄目押ししてくれた。

ええと、幼稚園のお友達に言うのはいいのだろうか。どうでもいいけど声の大きい子だなあ、みずのちゃん。元気があり余っている感じだ。

「三郎太さんとみずのちゃんが吸血鬼なら、当然善明君も、ですか？」

「うん。今吸血鬼になりかかっている最中。家族でひとりだけ仲間外れにしても意味ないしねえ。でもなんでそんなこと訊くの？」

「いえ、なんでいいいますか……」

「彼女は吸血鬼の実在について疑いを持っているんだ」

久喜さんが呆れた声で言う。

「異能まで披露したというのに、大概疑り深いな、君」

異能というのはあれですか、本人が途中まですっかり忘れてたという、他人の身体を操るやつですか。

「それについてはまだ世間に知られてない新技術とかなんとか、そういう方向でたね明かしがされないかなあと期待しているんですけど」

「そのようなたねはないので君の期待には応えられない」

まあ、さすがにそれは都合がよすぎるか。しかしほいほい信じてしまうのにも抵抗があるというか、なんというか。

「ちよつと兵吾、君のお嫁さんどうなってるの？」

「だから結婚する気はないと……」

うつん、三郎太さんの言いようだと、まるでわたしが無知でおかしな人のようだ。実際に知らなかったことだらけなのは事実だが、文句があるなら必要な情報を娘に伝えることを怠ったうちの父親に言ってほしい。というかわたしがまず文句を言いたい。

あと、お嫁さんっていうの、やめてくれないかなあ。

わたしは無知状態を改善すべく、気になったことを訊ねた。別に吸血鬼の生態なんて知らないままでも日常生活に支障はないが、うつかり知り合いになってしまったので、一応。

「吸血鬼になりかけてことは、善明君は今はまだ吸血鬼じゃないんですか？　吸血鬼の三郎太さんの息子さんのに」

「僕の息子だから、この子は生まれながらの吸血鬼ってことになるよ、このまま育てたら」

「すみません、よくわからないんですけど、育て方を変えたら普通の人間になったりするんでしょうか」

「いや、それは無理。だって僕も奥さんも吸血鬼だよ？」

ますますよくわからない。それじゃあ現時点の善明君はいつたい何。

と、久喜さんがわたしの腕を引いて部屋の隅に誘導した。

「親が吸血鬼でも生まれる子はそのままでは完全な吸血鬼ではないんだ。しかし、両親ともに吸血鬼、片親が吸血鬼でもう片方は半吸血鬼、あるいは吸血鬼と人間、どの組み合わせでも、とにかく片親だけでも吸血鬼なら、子は生まれながらの吸血鬼になり得る」

なり得る、ということとは、そうでない時期が存在する、すなわち生まれながらという表現は矛盾することになるのではないのか。

「つまりだな、生まれながらの吸血鬼とされる者にしても、厳密には生まれたその時点では吸血鬼ではない。一種の半吸血鬼だ。乳児期の育て方によっては半吸血鬼のままで吸血鬼にはならない。いつまで経っても経年変化が止まることなく、人間並みの年齢で一生を終える」

……あれ？

「あの、ちよつと話はずれるのですが、吸血鬼の人は人間とは寿命が違う、なんてふうに聞こえたんですけど」

久喜さんはあつさり首肯した。

「そうだが。——そういえば昨日は説明し損ねたな」

ああ、やつぱり。聞き間違いや勘違いではなかった。

「我々は人間の何倍も生きることができる。病や怪我で早死にしなければ、の話だが。年齢を重ねることによる外見の変化の仕方ともとは異なる。最初は人間と変わらない。しかし多くの場合二十代のうちに、成長と言いか老化とするか迷うところだが、経年による外見の変化が一旦止まる。皺ができるの白髪が増えるのという変化が再び現れるのは、その者が寿命を迎える四、五十年前あたりで、そこから先は人間とそう変わらない。今の説明で理解したか？」

一応、理解はできた、と思う。

「それじゃ久喜さんは？ 三十代に入ってるように見えますけど」
「私は単に成長の止まるのが遅かった。大多数は二十代だが、十代後半に入っすぐや、三十代になってからの者もたまにいる。時期が早いほうはどれだけ早くても十六、七だが、遅いほうは四十代や五十代の記録もある。こうなると生来の吸血鬼なのか元人間なのか、

見た目では区別がつかんな」

親が吸血鬼な人と普通の人間から吸血鬼になった人とは何かが違うらしい。

「……たとえば、ですけど、わたしがこの先吸血鬼になったとして、その場合の歳のとり方はまた違うんですか？」

久喜さんが語ったのは、生まれながらの吸血鬼の場合の筈だ。

「君の場合、今後数度吸血鬼の血を与えられれば完全な吸血鬼に変わるが、その時点で外見の変化は止まる。再度経年変化が始まれば四、五十年後に寿命を迎えるのは同じだ。三十代四十代で外見の変化が止まっている者は、生まれながらの吸血鬼なら平均よりかなり遅れて変化が止まった者、さもなければやたら老けて見える者。どちらでもなければその年齢で吸血鬼になった者ということだ」

「……ひょっとして、双子なのに京吾さんと身長で差がついた、っていうのは」

「私は遅かったが、あれは逆に十八あたりで止まった口だ。私は二十四までは身長が伸びていたし、肩幅なども二十歳を過ぎてからの変化が大きかった」

ああ、そういうことなのか。背丈以前に肉体の年齢からして違ってから、結果的に似てない一卵性双生児になってしまったわけだ。

わたし達の様子を窺っていた三郎太さんが、

「内緒話はもうおしまい？」

と声をかけてきた。

少し距離をとっただけで所詮は同じ部屋の中、意識して声量を落としていたわけでもないの、こちらの会話は三郎太さんにもばかり届いていた筈なのだ。内緒話も何も無い。

「三郎太さんはお幾つなんですか、歳」

「僕？ ええつとねえ——……兵吾、僕って今何歳だっけ」
「知るか」

他人に訊かなきゃわからないぐらいなら、見た目と実年齢との差は思いの外大きいのもしれない。

「それじゃあ久喜さんは？」

こちらは即答だった。

「五十一。年末には五十二になる」

わたしの倍以上生きているのか、久喜さん。見た目年齢でも十数歳は離れてそうだとは思っていたけど。

「三郎太は私の倍近いんじゃないか？」

見た目が年上で、かつ態度偉そうな久喜さんは、実際に生きてる年数では三郎太さんの半分、と。ややこしいことだ。

ならば久喜さんは年長者にため口きく失礼な人ということになるが、彼らの中の上下関係が何を基準に設定されるものかは不明なので、これは単なるわたしの感想。

三郎太さんはそうすると、孫どころか曾孫がいても全く不思議ではない年齢なわけだ。しかしいくら実年齢で考えればおかしくないといっても、やはり見た目を基準にすると違和感しかない。みずのちゃんは幼稚園に通っているようだが、よその家族と自分の家族とを比べて疑問を覚える日がそのうち来るんじゃないか、と少し心配

になつてしまふ。

「それでねえ、お嫁さんの疑問に対する答の補足なんだけど」

「あ、はい」

お嫁さんと呼ばれたのに、うつかり返事してしまった。

「親の少なくとも片方が吸血鬼のときと、親ふたりが揃つて半吸血鬼のとき、生まれる子はどちらの場合でも、人間とも吸血鬼とも違う半吸血鬼なんだよね。あ、ちなみに半吸血鬼と人間の子は必ず人間なんだけど。それでねえ、ひと口に半吸血鬼なんて呼んじゃつてるけど、厳密には違うわけ。半吸血鬼同士でくっついて生まれた子供を吸血鬼にしようとしたら、人間を吸血鬼にするときと同じ手順を踏まないといけない。元から吸血鬼に近い分、血を与える回数は少なくて済むかなつてだけ」

つまり、人生の最初から半吸血鬼だという一点を除けば、わたしのような元は人間だったのに吸血鬼の血のせいで変わってしまった存在と同じということが。

しかし血を与えるだの貰うだのと当たり前のように口にしてるけど、具体的にどういう方法でやるのだろう。全く覚えていないとはいえ一度は吸血鬼の血を貰った経験があるらしい身としては、普通に献血輸血方式なのだと思いたいところである。

「で、この子達みたいに関が吸血鬼の子供は、半吸血鬼の中でもちよつと違うんだよね。どう違うかっていうと、乳児期、生まれた直後から離乳食に切り替えるまでの間に吸血鬼の血を与えることで、ちゃんとした吸血鬼になるわけ。そうやって赤ん坊のうちに吸血鬼に変わったのが、いわゆる生まれながらの吸血鬼。半吸血鬼の両親から生まれた子だと同じことをしてもこうはならないんだ。たとえば吸血鬼の血を貰っても、起こる現象は人間が吸血鬼の血を与えられたときと同じ。当然結果も同じだから、何十年も何百年も成長しない赤ん坊になつちゃう」

ま、うつかり二、三回吸血鬼の血飲ませちゃった程度なら、吸血鬼になつちゃうまではいかないだろうけど。三郎太さんはそう付け

加えてこちらを安心させるような笑みを浮かべたが、背筋がぞつとする話だ、赤ん坊のままで長い時を過ごす子供なんて。

わたしは三郎太さんの腕の中でおとなしく眠っている善明君に目を向けた。さつきまできやあきやあはしゃいでいたみずのちゃんはいつと、こちらも窓ガラスにもたれてうつらうつらしている。

「もし、ですけど、もしこの先善明君に血をあげなかったら？」

「それはちよつと難しい問題」

三郎太さんは眉を寄せた。

「この子、今三ヶ月なんだよね。で、親、つまり僕と奥さんなんだけど、親はこまめに血を飲ませてるし、娘夫婦もちよくちよく協力してくれてるわけ」

吸血鬼というだけあって、やはり血は基本的に飲むものらしい。

「そろそろ量は足りてもおかしくはないんだよ。だから、既に必要だけ摂っていれば今後は血をあげなくてもこの子は吸血鬼だし、万が一足りてなければ半吸血鬼ということに」

「満一歳になる頃には、吸血鬼になっているか否かを検査ではつきりさせられる。しかしそれより前の時期では、判定がほとんど不可能らしい」

一日あたりどれくらい、一ヶ月で計これだけの血を飲ませればちやんと吸血鬼になりますよ、という目安を周知させればいいだけでは、と思ったのだが、久喜さんによればそれは無理なのだそうだ。

「個体差が非常に大きい上に、誰が血を与えるかに左右される可能性が高いともされている。父親の血なら毎日数滴を五ヶ月継続する必要があるが、母親の血なら週に一度の数滴を三ヶ月で足りるかもしれない」

たしかにそれでは目安など作りようがない、というか混乱の元にならんないかも。わたしがぱつと思いつくようなこと、とつくの昔に誰かが検討の結果没にしていって当然だった。

「子供を絶対に吸血鬼にしたいなら、生後半年間は可能な限りまめに血をあげときましょうってこと」

三郎太さんがそう締め括る。

「でも、思っただんですけど、半吸血鬼のまま成長することになったとしても、ある程度歳をとったところで改めて血をあげて吸血鬼にすれば、結果は同じってことになりませんか？」

「——お嫁さん、頭いいねえ」

三郎太さんはいかにも感心したふうに言うのだが、何故だか誉められた気はさっぱりしない。そしてわたしの呼び名がお嫁さんで固まりつつあるのだが、どうしようこれ。

「そうそう。赤ん坊の時にせつせと血をあげて吸血鬼にするのでも、ある程度育ってから吸血鬼に変えても、実は差がないっちゃあ、ないんだけどね。でも大きなデメリットがあるといえはあるというか」

三郎太さんはわたしの目を覗き込むようにして、にんまり笑う。
突然、わたしの右腕がひとりでに持ち上がった。

驚いて声を上げかけ、それができないことを知る。

これは、覚えがある。とってもある。昨日、久喜さんからやられたばかりのあれだ。

わたしの身体はその場でくるりと一回転して、一礼。他人の身体で遊ぶな、と文句を言うことも今はできない。

「三郎太」

久喜さんが窘めるが、そういう自分だって同じことをやったくせに。いや、でも今はとにかくなんとかしてほしい。

「——吸血鬼の中にはこういう芸を持つてるのがちらほらいるわけだけだ」

と、三郎太さん。この人といい久喜さんといい、せめてやる前にひと言かけるくらいのことはできないのか。そりゃあ久喜さんの時は、事前に言われたところで信じなかっただろうが。

わたしの身体はくるくる回る。回りながら弧を描き、リビングの中を移動する。広さに対して家具が最低限しかない中、でたらめな動きを遮るものはない。

「こつという能力、小さい頃から使ってるほうが伸びるんだよねえ、

ぶつちやけ。親が能力強ければ子供もそうなりやすいんだけど、でも半吸血鬼のうちは駄目なんだよ。いくら資質がある筈の者でも、力が現れない。だから能力の高い吸血鬼の子供は、赤ん坊の時に充
分血を与えてちゃんと吸血鬼にして、小さい頃からしっかり力の使
い方を学ばせて、それで存分に能力を伸ばしてもらおうね、っての
が基本方針。久喜に限らず、どこの家でもね」

何度めか覚えてもない回転の拍子に、わたしの腕からバッグが
落ちる。

いつまでこの状態でほっとくつもりだ。くるくる回りすぎていい
加減気分が悪くなりそう。

バッグが落ちたところからさらに数歩分の距離を移動し、わたし
は、わたしの意思とは関係なく、そこに突っ立っていた久喜さんに
正面から抱き着く格好になった。

「——っ、三郎太！」

久喜さんが怒鳴る。

わたしは焦る。焦りまくっている。なのにとどうしても自由を取り
戻せないのだ、腹立たしいことに。

引きはがそうとした久喜さんの手をするりと避けて、わたしは彼
の側面に回る。口角を上げる。爪先立つ。両手を伸ばし久喜さんの
顔を捉える。そのまま引き寄せて——。

「——やめろ！」

叫んだのは、わたしと久喜さんと、同時だった。

あ、声が出た、と喜ぶ閑もない。

その時わたしは、身体が自由にならないなりに、なんとか久喜さんから離れようともがいていたのだ、気分だけは。その最中、いきなり三郎太さんの支配から解放されたわけで、あ、と思った時には視界に天井。

意思と動作が再び一致した途端、渾身の力で久喜さんを押し退けようとした反動で、わたしはバランスを崩して後ろ向きに倒れようとしていた。

このままでは後頭部強打コースかも、などと妙に冷静なことを思ったのは、右腕に衝撃を感じた前か、後か。

久喜さんが寸でのところでわたしの腕を掴んで引き寄せ、後頭部強打から救ってくれたのだ。……代わりに鼻の頭を久喜さんの胸板に思いつきりぶつけたけど。あと、右肩も痛むけど。引っ張られた時にぐきつと音が聞こえた気もする。

「ちよつと、危ないなあ。何やってんだか」

三郎太さんの暢気な声が聞こえるが、そもそもこれはあなたのせいだろう。そう文句を言おうとしたのだが、三郎太さんのいる方へ向き直ろうとしたわたしは、よろけて今度は背後から久喜さんにぶつかる破目になった。そのままずると床にへたり込む。

「大丈夫か、中里さん」

わたしはなんとか「大丈夫です」と返事をした。

「ちよつと目が、目が、回ってるだけで……」

あれだけくるくる回転していれば——正確にはさせられたのだが——当たり前なこと、わたしはすっかり平衡感覚を失っていた。頭がぐらぐら揺れていて、気持ち悪い。

「三郎太、貴様やりすぎだ。何を考えて——」

「あ、やっぱり？ 僕もちよつとふざけすぎたかなあとは思ってた

りして」

「じゃあしゃあと」

言い争うふたりの声を聞き流しながら、目を閉じて床に懐く。初めてお邪魔したお宅でするようなことではないが、今は立ってられないし座ってるだけでも辛い。

すると、わたしの上に何かがどかと降ってきた。思わずぐえつと変な声を出してしまう。

わたしの上の何かの正体は、うたた寝から覚めたみずのちゃんだった。男ふたりが大きな声でやり合っているれば、そりゃあ目も覚めるだろう。

「お嫁さん、おねんね？」

「……おねんねというか、まあそうなんだけど。ちょっと休憩、お休み」

うつむ、この子の中でもわたしの呼び方がお嫁さんになっている。

「パンダさんもお嫁さんとおねんね！」

そう言いながらパンダのぬいぐるみを添い寝させようとするみずのちゃんには申し訳ないが、わたしは身を起こした。

「あのね、みずのちゃん。わたしの名前は香苗っていうの。お嫁さんじゃなくて、香苗。ね？」

みずのちゃんの目を見て、ゆっくり言い聞かせる。まだ視界が揺れていて目の焦点も合っているんだかないんだかという状態だが、そこは気合いで頑張った。頑張ったのだが成果が現れたかどうかは定かではない。

「お嫁さんのナエちゃん！」

とりあえず言い聞かせの効果は現れなかった。どうしてもお嫁さんがつくのか。そして名前は変な略し方された。

何がどう気に入ったのだから、みずのちゃんは「お嫁さんのナエちゃん。ナエちゃんのお嫁さん」とメロディーまでつけて繰り返し返している。どうでもいいけど前者と後者では意味が全然違う。

「いや、わたしは香苗っていうの。ナエじゃなくて、カナエ」

「そうそう。このお姉ちゃんはねえ、兵吾たんのお嫁さんの香苗ちゃん。わかった？」

……余計なこと言わないでほしいんだけどな、三郎太さん。

「兵吾たんのお嫁さんの、ナエちゃん！」

ほら、みずのちゃん真面目な顔して復唱してるし。しかもわたしの名前ナエちゃんのままで。おまけに兵吾たんって、何だその似合わない呼び方。思わず久喜さんを見上げれば、案の定苦虫を噛み潰している真つ最中みたいな顔になっていた。

ふと、久喜さんのシャツについた白っぽい汚れにわたしは気がついた。この部屋に入る前までは確実になかったその原因には心当たりがある。さっき久喜さんとぶつかった時に、ファンデーションが擦れて移ってしまったのだろう。大したことはない汚れだが、何しろシャツが黒色なので目立っている。

軽く頭を振って目眩が治まっているのを確認すると、わたしは立ち上がり久喜さんに声をかけた。

「すみません、久喜さん。さっきぶつかった時だと思うんですけど、シャツの胸のそこ、汚しちゃったみたいです。多分、ファンデー」

口紅やグロスがべったり、に比べればましだろうと普段なら思うところだが、ものが黒シャツではそちらのほうが目立ち難そうだ。ぶつかったのは不可抗力ということで勘弁してほしい。そもそも原因はそっちの親族の三郎太さんだ。

そういえば、と思い出して右肩を回してみる。幸い妙な痛みが走ることもなく、普通に動いた。腕の掴まれたあたりがまだ少し痛い、これは放っておいてもそのうち治まるだろう。

久喜さんは「着替えてくる」と言い置いて部屋を出ていき、わたしは三郎太さん達とそれを見送った。

「それでさあ、中里香苗ちゃん」

「なんです」

さっきの今である。わたしは露骨に警戒していますという態度で三郎太さんから距離をとった。みずのちゃんがくっついてきて、わ

たしの足に纏わりついてくる。

「香苗ちゃんも兵吾と結婚する気、全然ないわけ？ あの人、割方優良物件だと思うけど」

「あのですね、実はわたし、婚約だの結婚だのなんて話が進められていること、昨日初めて知ったんです。もう、それだけでもあり得ないでしょう」

三郎太さんは首を傾げてじっとわたしを見つめてきた。

「それってさあ、話が急なのが気に入らない、とか、仲間外れにされててむかつく、とか？」

わたしは曖昧に頷く。仲間外れ云々はちょっと違う気もするが、話が急だと憤りを覚えたのはたしかだ。

「結婚するなら早くても二十代後半だろうなあと思ってましたし、それが二十歳になったら即結婚式とか、無理ですって。頭がついてかないです」

「ああ、就職するんだっけ」

「そうですね。それで目立たないけど縁の下の力持ちっぽいポジションを確保して、寿退職の暁には上司に君がいないと事務仕事が滞りがちで困るよなんて惜しまれる、って感じの存在になるのが目標なんです」

力説すると、三郎太さんは目を瞬かせた。

「ええ？ 何その地味なんだか壮大なんだかよくわかんない微妙な目標。若者はさあ、もっとこう、きらきらな夢持とうよ」

どんな夢を抱こうが勝手ではないか。わたしは盛大にむくれた。

「それじゃあさ、香苗ちゃん。もし三十歳くらいで彼氏もいなくてそんな時に見合い話が持ち込まれたとしましょう。それで出会うのが兵吾なわけ。それならありだった？」

言われて、わたしは考える。

丁度、着替え終えた久喜さんが戻ってきた。着替える前同様、今着ているのも黒いシャツだ。さっき着ていたものとの違いがわからない。もしかしくなくても同じデザインではなからうか。

——たとえば、だ。わたしがお見合いをする。お相手は久喜兵吾、別名黒男。

お見合いといえは事前に釣書と写真が寄越されるものだ。で、その写真を見たらそこには全身黒ずくめの男の姿が。

見合い写真は撮影時のみ普通のスーツを着て凌いだとする。次の段階では直接対面するわけで、その席に現れる全身黒ずくめの男。

いやいや、初顔合わせもなんとか凌いだとしましょう。今度改めてふたりで会いませんかということになり、当日待ち合わせ場所にやって来た相手を見れば上から下まで黒一色。

うん……、無理かもしれない。

はて、わたしはなんでこんなことをしているのだろう。ふと我に返ってそんなことを思ったのは、久喜さん宅に来てから三時間ほど経過した頃のこと。

この三時間でわたしが何をしていたかといえば、三郎太さん達の昼食——デリバリーのピザとレトルトカレー——の後片付け、三郎太さんが持ち込みのホットケーキミックスを押しつけてきたのでそれでみずのちゃんにホットケーキを作り、それ以外の時間は絵本を読んだりぬいぐるみでばすばす叩かれたりと、ひたすらみずのちゃんの遊び相手だ。不覚にも久喜さんの希望に沿った行動をしていると気づいて愕然としてしまった。

その久喜さんかというと、何度か欠伸を噛み殺す素振りを見せていたのがついに限界にきたらしく、リビングのソファで仮眠中。

久喜さんの睡眠を妨害した主犯たる三郎太さんは、善明君をおんぶして出たり入ったりを繰り返している。市販のおんぶ用紐ではなく、着物を着るのに使うようなただの帯で赤ん坊をおんぶする人を、わたしは初めて見た。

息子を背負った三郎太さんはマンションの付近を散歩していたようで、何度目かに戻ってきた時、「公園で会った若奥様に貰っちゃった」と猫じゃらしを手に使っていた。大きな羽根を束ねたもので、タグには可愛らしい猫ちゃんのイラスト入り。紛う方なき猫じゃらしである、ペットショップに並んでいるような。

人間——ではないらしいけれど、厳密には——の赤ん坊用の玩具ではないのだが、善明君はいたく気に入っているらしい。みずのちゃんが顔の前でぱたぱた動かす猫じゃらしに、一生懸命両手を伸ばしている。

その横で三郎太さんは、「ああ疲れた、肩凝った」とフローリングに直に寝転び大の字になっていた。

聞けば、常日頃から三郎太さんが育児を全面的に引き受けているわけではなく、善明君のお母さん、三郎太さんの奥さんが、みずのちゃんのお母さんにあたる娘さんともども風邪で寝込んでいるのだとか。さらにみずのちゃんのお父さんは現在仕事で出張中らしい。それで親族の久喜さんを頼りに押しかけてきたのだろうか。子供の相手を頼むには不向きな人に思えるが、猫の手も借りたい心境だったのかもしれない。……ということはわたしは猫の手二号か。

「そうだ、お嫁さん。君も今日ここに泊まるんだよね」

根気強く教えた結果、ついにみずのちゃんにお嫁さんでもナエチやんでもなく香苗ちゃんと呼ばれるようになったのだが、彼女の祖父のほうは相変わらずだ。というか久喜さんがいる場所ではわざとお嫁さんと呼んでいる節がある。

呼び方については少々諦め気味のわたしだが、それはそれとして三郎太さんに言われたことに驚いた。

「泊まるって、そんなの聞いてませんけど」

なんでそれが確定事項のように言うのだろうか。大学から直接ここに連れてこられたので泊まりの用意なんかさっぱりだし、そもそも知り合って間もない人、性別男性宅にほいほい泊まれるわけがない。

「僕はそのつもりだったんだけど？ 兵吾、駄目じゃん、ちゃんと言っとかなきゃさあ」

ソファに横になっっている久喜さんは、寝ているんだか起きているんだか、三郎太さんの声を無視した。

三郎太さんがそのつもりだったとしても、それに合わせる義務はわたしにはないと思うのだけど。

「いや、泊まりませんから。明日は学校一コマ目からあるし」

「明日って土曜だよ」

「うちの大学、週休一日制なんです」

わたしは受講していないが、各種資格試験受験者向けの単位外講座にいたっては基本的に日曜開講だったりする。

「まあそれならそれで、一日ぐらいさぼってみんなで遊びに行かない？ 遊園地とかさあ。水族館もいいよね」

「……学生にさぼりを奨めるな」

寝起きの不機嫌そうな声で久喜さんが咎めるが、まるで気にした様子もなく、三郎太さんはみずのちゃんに、

「ねえ、みずのも遊びに行きたいでしょ、兵吾ちゃんと香苗ちゃんと一緒に。遊園地と水族館と動物園、どこがいい？」

「みずの、水族館行く！」

小さい子を利用するとは卑怯な。ところで兵吾たんというのはやめてあげてほしい。聞いていて微妙な気分になるし、これが定着するとさすがに久喜さんが気の毒なので。

「明日はわたし無理ですって。朝から夕方まで五コマきっちり詰まっていますから」

「それさあ、絶対に出席しなきゃ駄目なの？」

「試験前なんです、前期末試験の。レポートのテーマも発表されるし」

ここはわたしとしては譲れない。

「うっん——それじゃあ水族館は明後日ってことで。それならいいでしょ、お嫁さん」

何かなんでも遊びに行きたいらしい。

「兵吾もいいよねえ、どうせ用事なんかないんだし」

「勝手に決めるな」

「そうですね。せめてこっちの予定訊くぐらいのことは……」

三郎太さんには文句を言いたいのだが、みずのちゃんの期待いっぱい顔を見ると、思わず怯んでしまう。

結局、わたしは渋々ではあるが頷いた。

「いいですよ、明後日は水族館に一緒にいきます」

なおも不満そうな久喜さんもそれ以上は何も言わず、日曜日の予定は決定してしまった。

「それじゃ、そろそろ買い出しに行こっか。あのねえお嫁さん、こ

こ、客用の布団とか何もないんだよ。信じられないでしょ」

わたしが見た範囲では家具も調理器具も必要最低限ぎりぎりだったので、それはまあ不思議でもないような。こんなにスペースあるのに家具これだけ？ と吃驚するような物の少ない空間である。

「……わたしは泊まりませんよ？」

「我が儘言わない、お嫁さん」

だからお嫁さんじゃないし、これは断じて我が儘ではないと思う。「今はねえ、親戚はできるだけ集まって仲良く過ごしましょうね週間なの。だから君もちゃんとここに泊まろうね。ついでに兵吾と親交でも深めてみたらいいんじゃないかな。はい、決定」

なんだその週間。わたしの戸惑いをよそに、三郎太さんは有無を言わせぬ笑顔で押しきったのだった。

久喜さん宅には現在使われていない部屋が洋室、和室各一室ずつある。お客さんが来たときのために客間として空けてある、というわけではない。何しろ空き部屋はどちらもカーテンなし、見上げれば照明器具取付用金具があるだけで照明はなし、家具調度品一切なし、何もない中で唯一の例外である空気清浄機が寂しく働いている。こまめに掃除はされているらしく埃はないし窓ガラスも綺麗なものだが、これだけさっぱりした部屋なら掃除機かけるのも楽だろう。

フローリングや畳が傷みやすくなるからせめてカーテンは用意すればいいのに。そう久喜さんに言ったところ「北向きなのでそれほど心配する必要はないだろう」、さらには「どうせ使わない部屋だから気にならん。見苦しいまでに傷んできたら取り替えればいいだけだ」と返ってきた。

どうして使い道のない部屋が複数発生するようなマンションを購入するのだ、という疑問に対する答は、「貯め込むだけでなくたまには金を使えと言われた直後に広告を見たから」というものだった。そんな単純な理由でこういう大きい買い物をしていいのか。そしてその理由ならもう少し奮発して調度品の類も全室分揃えればよかったものを。

そういうわけで、久喜さん宅に快適に泊まるためには不足しているものが多かった。最低でも寝具の購入は必須だ。

三郎太さんは善明君用の粉ミルクや布団、着替えは持ち込んでいたが、確認してみたらみずのちゃんのは服の着替えはあっても下着と靴下がない。この季節なら靴下はなくても問題ないだろうけど、みずのちゃん自身が靴下がないのは厭だと主張したので靴下も必須。三郎太さん本人の分は何もなしという有様だ。そしてわたしも同じく。

着替えに寝間着、あと歯ブラシやタオル、照明のない空き部屋を

使うなら電気スタンドも欲しいかも。あとカーテン的なものも何かと、要りそうなものをリストアップして、わたし達——わたしと三郎太さん、みずのちゃん、善明君の四人——は三郎太さんの車でデパートに向かう。三郎太さんの車はファミリータイプのワゴンだった。

「なんかさあ、普通に家族に見えそうだよねえ僕達。ちゃらい夫とまだ若い妻と子供ふたり」

そんなことを口にして三郎太さんが笑うが、見えてどうする、この既婚者孫持ち。そりゃまあ、言われてみれば傍目にはそうとしか見えないかも、とは思ってしまったが。

デパートに着いてからはふた手に別れた。わたしはみずのちゃんを連れて、自分達の分の着替えとタオルなどの日用品類、それから明日の朝食用の食料品を買いに回る。夕食についてはデリバリーで済ませてしまおうということになっている。三郎太さんは三郎太さんで自分用の着替えを調達し、その後は寝具と照明器具を探しに、という手筈だ。

さつさと担当分の買い物を済ませて、わたしはみずのちゃんと、待ち合わせ場所に決めていた駐車場に隣接する自動販売機コーナーにやって来る。三郎太さんと善明君の姿はまだなかった。

みずのちゃんにせがまれてパック入りの林檎ジュースを買い与え、それからわたしはコーナーの端に寄って携帯電話を取り出した。

アドレス帳から目当ての名を見つけ、発信ボタンを押す。三十秒ほど待たされてからようやく聞こえてきた声は、しかしわたしが電話した相手のものではなかった。

「香苗ちゃん？」

だが、よく知っている人の声だ。

「え、蝶子さん？　なんで蝶子さんが出るの」

わたしがかけた番号は父親の携帯のものだった筈だ。

「お父さんは？」

「あら、兄さんに用だったの？　兄さんねえ、今いないのよ」

いないって携帯を置いて？ 外出しているのではなく、少し席を外しているという意味なのか。

「撮影旅行に出てるの」

「違った。旅行するのに携帯電話を忘れたまま行ってしまったらしい。」

「それ、行き先どこ。いつから行ってるの？」

「あのね、昨日の朝にね、いきなり砂漠の写真が撮りたくなったんですって。それでお昼には出発したのよ。慌ただしいったらないわよねえ」

——逃げた。わたしは直感した。それ、絶対に撮影目的じゃないだろう。いや、出てったからには実際に砂漠があるどこかに行って写真を撮りもするのだろうが、第一目的はわたしから逃げることで間違いなく。タイミングからして久喜さんがわたしに連絡をとろうと蝶子さんに接触した直後ではないか。携帯電話を置いていったのもわざとだ、きっと。

「……そんなら蝶子さんでもいいや。あのさ、蝶子さん。久喜兵吾って人がいきなりわたしに会いに来ただけだ」

「ああ、そのこと？ 兵吾君、いい男でしょう。香苗ちゃんも気に入ったでしょ？」

途端に華やいだ声になる蝶子さんに、わたしは脱力した。

「いや、気に入る気に入らなくて問題じゃないし。わたし、婚約者がいるとか初耳だったんだけど」

「だってねえ、先に教えてたら香苗ちゃん驚かないでしょ？ 一生に一度のことなんだから、香苗ちゃんを吃驚させようと思って。ね、吃驚したでしょ？ サプライズ」

……サプライズって、蝶子さん。そりゃあ驚きましたとも。驚かずにいられよう筈がない。しかし自分の結婚に関してこんな驚きは要らない。サプライズは誕生日パーティーあたりに留めておくべきだと思う。

「お式の準備はね、叔母さん達が責任持ってちゃんと進めておくか

ら香苗ちゃんは気にしなくて大丈夫よ。ああ、でも夏休みに入ったら早めに戻ってきてくれなきゃ困るわね。ほら、ドレスのことがあるから」

その責任は投げ出してくれて一向に構いません。

「それにねえ、叔母さん思っただけど、お料理教室に通ってみない？ お嫁に行くならお料理のレパトリーは少しでも多いほうがいいでしょう。でもお式まではあんまり時間がないから――」

「ちよつ、ちよつと待って、ストップ。あのね蝶子さん、その、久喜さんなだけど」

わたしは素早く周囲を確認する。みずのちゃん以外に人影はない。それでも念の為に声を潜めて続けた。

「久喜さん、自分のことを吸血鬼だとか言っただけど」

「そうなのよ。兵吾君は強いから香苗ちゃんのこと守ってくれるわよ」

事もなげに言ってくれる。

「あの、お父さんも蝶子さんもそれは知ってて……？」

「勿論よ。兵吾君はねえ、歳が叔母さんのひとつ下でしょう。だから小さい頃はよく一緒に遊んだのよ」

それは初めて知った。この人達、幼馴染みみたいな関係だったのか。

「お父さん達とほとんど歳の違わない人をわたしの結婚相手に薦めるのってどうかと思う！」

「あらあ、今は歳の差があっても、二百年もすればそんなのなくなっちゃうわよ」

いや、年齢の差は何百年経っても縮まらないし。言わんとするところはなんとなくわからなくもないけれど。

「兄さんと三人で探検ごっこなんてしたわねえ。懐かしいわあ。子供だけで山に入って迷子になりかけたり」

既に招待状が発送済みだという結婚式を極力穏便な形で白紙にするためには、お互いの親族を説得するのが一番だと思う。というか

それ以外になさそうだ。しかし、わたしには蝶子さんを説得できる自信がない。少しはあったような気もするが、だとしても今さつきなくなった。

蝶子さんは幼い日々の思い出を喋りたいだけ喋り、「それじゃあ兵吾君と仲良くね」という言葉を最後に一方的に電話をきってしまった。

携帯片手に呆然としている自分をいつの間にか傍に来ていた三郎太さんが訝しげに眺めているのにも、わたしはしばらく気づけなかった。

明日の朝食用にとパンや惣菜を色々と買っていたのに、三分の一ほどはその日のうちに消費されることとなった。

夕食はデリバリーの中華を頼んだのだが、人数に比して多めに注文したつもりが、蓋を開けてみれば全然足りなかったためである。男性ふたりが思いの外よく食べる人達だったのが敗因だ。最後には冷蔵庫にあったキャベツ半玉を刻んで、ドレッシングが見当たらなかったたので塩と胡椒を振っただけで出したのだが、それも十分後にはきれいになくなっていた。

食後、お茶かコーヒーはないかとキッチンの戸棚を漁っていたら、三郎太さんが空になった哺乳瓶を片手に現れた。

「香苗ちゃん、僕にも何か貰える？　ちなみに紅茶希望」

リクエストされたものの、緑茶とコーヒーは複数の銘柄が用意されているのに、残念ながら紅茶は試供品のティーバッグがあるだけだ。

それでもいいと言うのでカップにティーバッグを入れてお湯を注いだが、その瞬間立ち上った香りに三郎太さんは顔を顰めた。

「何これ」

「……フレーバードティー、じゃないですか？　ほら、ちゃんと紅茶って書いてあるし」

ティーバッグの入っていた袋には、商品番号は印字されているがそれ以外の情報がなく、なんの香りをつけた紅茶なのかはわからない。シナモンの香りがするような、バニラエッセンスっぽい気がするような。

「これ、変な味とかしないよね」

「大丈夫だと思いますけど。一応これもいい香りのうちと言えなくもないですよ」

自分で飲むうとは全く思えない、不自然なまでに甘ったるい匂い

だが。

「……やっぱり緑茶にします？」

「いや、いいよこれで。別に飲めりやなんでもいいし」

そうは言いながらも渋い顔でカップの中身を啜る三郎太さんの指先に、一センチほどの傷があるのにわたしは気づいた。

「指、どうしたんですか？」

「え？——ああ、これ。これはねえ、善明に血を飲ませたばつから」

……本当に飲ませるんだ、血。

「実はちよつと切りすぎちゃってさあ。さつくりやつちゃった。まあ、このくらいなら朝には治ってるけど」

三郎太さんが言うには、彼は吸血鬼の中でも外傷の治りが比較的早いほうらしい。

「血つて、どのくらい飲ませるんですか？」

好奇心に駆られて、わたしはそう訊ねてみた。

「赤ん坊に飲ませるのは一日に一滴二滴つてとこ。針で指を突いて出す程度でいいんだよ、本当は。今日は針の代わりにカッター使つて失敗しちゃった」

カップを載せたトレイを持ってリビングに入ると、久喜さんが立ったままで何かの雑誌を読んでいた。その背中にみずのちゃんがいかがみつき、よじ登ろうとしている。

久喜さんはわたしの顔を見るや、無言でみずのちゃんを引き剥がしてわたしの方に押し寄せた。どうやらかなり鬱陶しく思っていたらしい。それでも邪険に扱わないあたりは立派だと言ふべきなのか。

「コーヒー淹れたんでよかったです。というか勝手にキッチンにあったの使いました」

久喜さんにコーヒー入りのカップをひとつ押しつけ、みずのちゃんには温く作ったカフェオレ——ミルクがかなり多めの——のマグカップを渡した。

これもキッチンから持ってきたスティックシュガーの入った瓶を差し出すと、久喜さんはそこから二本取り出す。やはりコーヒーには砂糖二本なのか。単に甘いのが好きなのか、そうしないと飲めないのか、どちらだろう。豆も粉もあれだけ色々と揃っているのだから、コーヒー好きなのは間違いないのだろうけれど、とわたしはキッチンで見た戸棚の中身を思い出して考える。

そういえば。

「久喜さん達って、血は飲まないんですか？」

唐突な質問に久喜さんは面食らったようだった。

「何？」

「ほら、吸血鬼なんでしょう。赤ちゃんの時には他の吸血鬼の血を飲ませるんだっていうのはわかりましたけど、そうじゃなくて人間の血を飲むことはないんですか」

久喜さんは目を眇めた。

「ひょっとして自分が襲われるのではないかと、心配でもしているのか？」

それもないわけではない。よくよく考えてみれば、ここにいる五人のうち吸血鬼でないのはわたしだけなのだ。厳密には赤ん坊の善明君も、今はまだ完全には吸血鬼ではないらしいけど。

「どっちかという好奇心、かな？」

首を傾げるわたしに、久喜さんはため息をついて苦言を呈す。

「そう警戒心が薄いのもどうかと思うのだが」

そんなこと言われても。

「じゃあ、やっぱり襲われて生き血飲まれる可能性があるんですか。わたし、今からでも帰るべき？」

「それはやめる。もう遅いし、そもそも襲わないから」

遅いといってもまだ九時前、電車もバスも動いているのだから帰ろうと思えばすぐ帰れる時間だ。

「我々にとって、他者の血を得ることは、重要ではあるが必要不可欠の行為ではない。乳児は除いてだが。一種の嗜好品として考える

向きもある」

「……嗜好品。煙草みたいな？」

「いや、アルコール。血は酩酊状態をもたらす。作用はアルコールとほとんど同じだ。だから好んで血を飲む者も、まあいいわけではない。だが生きずりの人間を襲ったり、拒否している相手から血を奪うことはまずしない」

「そうなんですか」

吸血鬼といえば、待ちで見かけた美女を暗がりには誘い出して――みたいなイメージがあるのだが、ぶっちゃけ。

「人間の血を吸血鬼が飲んでも酔うだけだが、それが吸血鬼や半吸血鬼のものであれば、血が合わずに命に関わる可能性もゼロではない。そして見ただけでは同族かどうかは判別できない。だから、よく知りもしない相手の血は、まともな思考能力が備わっていれば飲まない」

それに、と久喜さんは続けた。

「君は畑の大根だの白菜だのをそのまま食べることができるか？」

洗いもせず、その畑にどれだけの量の農薬がいつ散布されたのかも確認せずに」

子供の頃、祖父母宅の裏に生えていたグミの実を、そのまま口にしていた記憶がある。それから小学校の三年だったか、授業の一環として学校の菜園でプチトマトを育てたが、あれも洗わず食べたよ。うな。グミの実実は毎年酸っぱいだけだったし、プチトマトは驚くほど味がなくて絞り汁をさらに水で薄めたようだった。

そんな思い出はともかく、

「無理ですね。虫がついてたら厭ですし」

昔はそうでもなかったが、今のわたしは大の虫嫌いなのだ。

「そうだろう。それと同じだ。安全が確認できないから、よく知らない者の血は飲まない。好んで血を飲む輩も、多くは身内から調達する。夫婦や恋人同士で互いに与え合うことが多い」

そついうものなのか。

「それじゃあ、血を飲む時ってどうやるんですか？　牙でぐさり？」

「……私に牙があるように見えるか？」

「見えない。見えないが、猫の爪のように収納式なのかも、とは思っていた。」

「牙などない。血を得るために、昔は主に刃物を使ってたというし、最近では注射器が人気らしい」

「わたしの中の吸血鬼像は、昨日今日でかなりの修正を求められている。」

——夜中にふと、目が覚めた。

空き部屋になつていた八畳の和室を、わたしとみずのちゃんとふたりで使っている。窓には取り付け便利な突っ張り棒式ロールスクリーン、明かりは久喜さんの書斎から拝借してきたデスクライト、布団を二枚並べて敷いて出来上がり。

照明については三郎太さんがちゃんとしたシーリングライトを購入入していて、それが明日には配送されてくるのでデスクライトの活躍はひと晩だけの予定だ。

そのライトも消して真っ暗な中、わたしは手探りで携帯電話を手に取り、画面表示で時刻を確認した。深夜の二時半過ぎである。

こんな時間にわたしの目を覚ませたのは、部屋の外から聞こえる話し声だった。男性の声、つまり、久喜さんと三郎太さんの。

夜間に仕事をするという久喜さんが起きているのは当然として、三郎太さんはわたしと同様、日付が変わる前には就寝した筈なのだが、何事かあったのだろうか。声を潜め気味に話しているようで、会話の内容までは聞き取れない。

和室の中、横になつたまま聞き耳を立てていると、ぼそぼそとした話し声と足音が近づき、そして遠くなっていく。ふたりは玄関に向かっているようだ。

わたしは身を起こし、手櫛で簡単に髪を整えて廊下に出した。久喜さんと三郎太さんの背中が見える。三郎太さんは携帯片手にどうやら電話の向こうの相手と遣り取りしているらしい。ふたりとも、今から外出しようとしているようだ。

わたしが一步廊下に出ると、久喜さんが気づいて振り返った。数拍遅れて、電話中の三郎太さんも。

「中里さん。すまない、うるさくして」

「いえ、それは別にいいんですけど。——何かあったんですか？」

夜中に慌てて出かけるなど、緊急事の行動だ。

「いや……」

「ちよつとね。僕ら、二、三時間くらい出てくるから」

言い淀む久喜さんの背後から三郎太さんが声を上げる。眠っているみずのちゃんや善明君に配慮しているのだろ、随分と小声だ。

「とりあえずお嫁さんは気にしないでいいから。あ、善明はぐつすり寝てるし、おむつも替えたばっかだから多分大丈夫だと思うけど、もし目を覚ますことがあったらよろしく」

よろしくと言われても、わたしには赤ん坊の世話なんて何もできないのだが。余程途方に暮れた顔をしてしまっていたのだろ、三郎太さんはわたしにこりと笑いかけ、

「そんな心配そうな顔しなくても。ほんと、すぐ戻るし」

はあ、そうですか、と言うしかない。

「まあ気にせず休んでればいいよ」

それじゃあ行ってくる、と玄関を出ていくふたりを見送り、わたしは和室に戻った。善明君のことは、彼が実際に目を覚ましたら考えることにして。

ところが、それから十分もしないうちに、再び玄関から物音がした。

足音が近づいてきて、和室の外から声かけられる。久喜さんだった。

「中里さん、悪いがすぐに着替えて私達と一緒に来てもらいたい」

「え、なんですか」

「ごめんねえ、香苗ちゃん。念の為っていうか、やつぱ子供だけでお留守番させとくのってどうよ、っていうか。あ、みずのは起こさなくていいよ、そのまま車に乗せちゃうから」

事情がわからないまま、わたしは急いで着替え、部屋の扉を開けた。

三郎太さんは既に善明君を抱いて待っていた。みずのちゃんはタオルケットごと久喜さんが抱えて運び出す。熟睡していて起きる気

配はない。

わたし達は三郎太さんのワゴンに乗り込んだ。運転席には久喜さんが座り、三郎太さんは助手席におさまる。

「なんなんですか、こないきなり。夜逃げでもするんですか？」

わたしはつい毒づいた。三郎太さんが「夜逃げはいいなあ、そんな感じだよねえ、ほんと」と笑う。

「——で、本当のところはなんなんですか。わたしにもちゃんと教えて下さい」

「そんなに知りたい？」

「当たり前じゃないですか。夜中に起こされてどこかに連れてかれるんだから、行き先と目的を教えてもらう権利は充分あると思うんですけど」

「そこまで知りたいの？ それじゃあ教えてあげる。あのねえ——」

三郎太さんはわざとらしく声を落として手招きした。わたしは助手席側に上半身を傾け、耳を寄せる。

「——これから死体泥棒しに某病院に行くんだよ」

「は？」

今、すごく物騒な単語が聞こえた。死体とか泥棒とか。

目を白黒させるわたしを見て、三郎太さんはやにやしている。

これはつまり、からかわれたのだろうか。

「勝手に殺すな、阿呆」

久喜さんが咎めるように言う。

「事故で運ばれた同族がいるので、それを回収しに行くだけだ。遺体になりかねないような酷い状態では全くないということなので、遺体泥棒になる心配はない。自主的な退院を手助けするだけだ」

要するに、不慮の事故で入院した知り合い——備考、吸血鬼——がいるのでお迎えに、という話らしい。しかし、それにわたしやみずのちゃん、善明君を同行させる必要がどこにあるのだろうか、とわたしは不思議に思う。すると、

「念の為だ」

「一応、用心ってことで」
久喜さんと三郎太さんの声が重なった。

三郎太さんは携帯電話で頻繁に誰かと連絡を取りながら、要所要所で久喜さんに道順を指示する。

やがてわたし達の乗ったワゴンは、人影も見えない、通行車両も僅かな街に入った。道路沿いに並ぶのは低層のオフィスビルが主で、その間に個人商店が点在している。

「あれだよ」

三郎太さんの声につられ、わたしは進行方向に目を向けた。

その建物は、ぼんやりしていたらただのオフィスビルだろうと見逃してしまいそうなぐらいに周囲にとけ込んだ外観の、その実は病院だった。正面入口のすぐ脇にある外来受付時間や診療科目を記したプレートが、ここは病院であるのだと道行く人々に知らせる役割を担っている。

事故に遭った人が運ばれたというのだから救急搬送の受け入れもしているのだろうが、正面の入口の明かりは落とされ、さらにはシヤッターが降りていた。

車は路地に入り、病院の裏手に回る。こちらにはあまり広くはない駐車場と、夜間出入口があった。

そこには複数の人影が見えた。久喜さんがワゴンを駐車場に入れると、何人かは合図のように手を挙げる。彼らは久喜さんの仲間とすることなのだろう。車が停まると数人が駆け寄ってきた。その中のひとり、わたしとそれほど歳が変わらなそうなボブカットの女性が、わたしをわたしをまじまじと見つめているのに気がついた。車の窓越しに目が合うと、彼女は嬉しそうに手を振るのだ、わたしに向かつて。

ついこちらも手を振り返しながら、あれは誰だっけとわたしは必死に考えた。困ったことに、全然知らない人だとは言いきれない。むしろどこかで見かけた筈の顔だと思う。何かがわたしの心に引つ

かかり、刺激する。

久喜さんと三郎太さんが「君はここでおとなしくしているように」と言い残して車を降り、元から駐車場にいた人達と合流する。おとなしくしていると言われればそうするが、本当になんでわたしはここに連れてこられたのだろうか。

先程のボブカットの女性は、車内からだとは背中しか見えない。正面から、でなければせめて横顔をじっくり観察できれば、彼女が誰か、どこで出会った人なのか思い出せるかもしれないのに。

残念に思いながら、わたしは広くもない駐車場を見回す。時間の割に停まっている車は多いが、うち何台かはここに集まっている人達のものだろう。ざっと数えてみると九人、久喜さんと三郎太さんを足して十一人だ。彼らはすぐには夜間出入口に向かわず、何かを話し合っている様子だった。

さすがに、何かがおかしいと、わたしにもわかる。いや、おかしいというのなら最初から、こんな時間入院患者を迎えに病院へ、ということからしておかしいのだが。

夜間出入口から誰かが出てきた。人数はふたり、格好からするとこの警備員だ。真夜中に病院の敷地内で集会している怪しい連中に注意をするために出てきたのだろうか。そう思ったのだが、彼らがとった行動はわたしを啞然とさせた。

警備員のふたりは大きな布——おそらくシートだ——を持っていた。その布の端をそれぞれが手にして広げ、腕をめいっぱい伸ばして頭上にかざす。昼日中に人工の日影を求めてやるのならまだ納得できるが、今は夜中だ。濡れたシートを広げて乾かしましようといのでもあるまいし、その行動にどんな意味があるのかわからない。首を捻りながらわたしは警備員達を眺めていたのだが——不意にわかってしまった。多分、間違っていないと思う。防犯カメラだ。出入口の上部に仕掛けてあるのではないだろうか。それを布で目隠しして一時的に意味のないものになっている。

吸血鬼の中には特殊な能力を持つ者がいて、その能力には他人を

意のままに操るといふものもある。わたしも身をもって体験した。警備員の行動は、ここにいる吸血鬼の誰かが操ってやらせているのだろう。……これ、よく考えてみればいくらでも悪用ができてしまうのだ、と今になってわたしはようやく思い至った。ぱっと思いつくあたりではたとえば、自分の手は汚さず赤の他人に強盗をやらせるとか。久喜さんや三郎太さんを見ていれば、倫理感が世間一般のそれと乖離しているわけでもなさそうなので、心配しすぎる必要はなさそうだが。

久喜さん達が動きだした。ひとりは夜間出入口の前に留まり、残りは全員が病院の中に入っていく。これから、防犯カメラに姿を捉えられてはまずいことをやるのか。院内にもカメラは設置されていると思うのだが、そちらも同様のやり方でどうにかしてしまうのか。そういえば、血液などの検査で人間との違いが明らかになる恐れがあるので、病院にかかるときは注意するように、と久喜さんが言っていた。救急搬送で吸血鬼がどうの半吸血鬼がどうのという事情を把握していない病院に運ばれると面倒だとかも。あれはこういうことだったのか？

久喜さん達が戻ってきたら問い詰めて白状させてやろう。そう心に誓い、わたしはワゴンの中でじつと彼らが戻るのを待っていた。幸いなことに、みずのちゃんも善明君もぐっすりと眠っている。特に善明君が目覚まして泣きだしでもしたら、わたしには対処不可能だ。熟睡していてくれてありがたい。

別に何かを感じたとかでは決してなく、久喜さん達早く戻らないかなあなどと考えながらただ無意味に視線をさまよわせた時、わたしはその人影に気づいた。駐車場の外ね道路から病院を窺っている若い男性がひとりいたのだ。

暗いのと離れているのとで顔はわからない。服装はラフなものだ。手に構えているのは携帯電話のように見え、もしかして写真か動画を撮影しているのでは、と考えた瞬間、わたしはぎくりとなった。もし本当にあの男が久喜さん達のことを撮影していたとしたら、

そうでなくても一部始終を目撃していたなら、まずいのではないだろうか。それとも、彼も吸血鬼なのだろうか。うっかり集合に遅れたので、ああして見守っているとか。それならいいのだけれど――。

あまりにも凝視し続けていたため感づかれたのだろうか、不意に男が顔を巡らせ、その目がわたしを捉えた、ように感じた。

じろじろ眺めていたことに文句を言われるとか、何かあるのではないかとわたしは内心身構えた。しかし男はさっと顔を背け、足早に、というよりほとんど駆け足で立ち去ってしまった。わたしには、その後ろ姿を見送ることしかできなかった。

病院に入っていた人達は、それからすぐに戻ってきた。真つ先に出てきた集団は男性ばかり六人がかりで何か荷物を運んでいる。よくよく見れば荷物の正体はマットレスで、その上に一名、横たわっている人がいた。それが事故に遭ったという運の悪い吸血鬼なのだろう。マットレスを担架代わりに運ばなければならないなら、自力での移動は無理なぐらいの重傷なのかもしれない。

ところで、病院からおそらく無断で持ち出されてきたマットレスは、この後誰かが返却するのだろうか。そもそもここは病院なのだから、マットレスなんぞを使わなくても、探せばちゃんとした担架やストレッチャーが存在するのではなからうか。それなのに何故マットレスで患者を運び出すのだろうか、あれ持ちにくそうなのに。

マットレス運搬組から遅れて、あのボブカットの女性が姿を現した。続いて久喜さん達だ。

何かあったのだろうか、久喜さんの様子が明らかにおかしい。顔を俯けてぐったりとしている久喜さんを、三郎太さんともうひとりが両脇から抱え、半ば引きずるように歩かせている。というか抱えている人達と抱えられている人との身長差が大きいため、本当に足が引きずられている。

ボブカットの女性がわたしのいる車に走り寄ってきて、手振りと言葉で「開けて」と伝えてきた。すぐにワゴンの後部ドアを開ける。わたしは奥側の座席に移動し、それまでいた席には三郎太さん達が苦勞しながら久喜さんを座らせた。久喜さんは目を閉じていてなされるがままだ。本当に体調が悪いように見える。病院に入る前は別になんともなく普通に歩いていたのに、こんな短時間でまるきり病人だ。

「ちよつと、いったいどうしたんですか久喜さん」

わたしが誰にともなく訊ねたのと、ワゴン車に身を持ち入れてき

たボブカットの女性がわたしの左手首を掴んだのと、それがほぼ同時だった。

え、とわたしは目を瞬かせる。彼女はわたしにににこと笑いかけ、

「痛くないからね、少しちくつとするだけですよ」

何そのお医者さんが注射する時に幼児に言うような台詞、と思つたその時、脳裏に閃くものがあつた。

そして、目の前でも閃くものが。

「痛つ……！」

わたしは思わず小さな悲鳴を上げた。女性に掴まれた手の、人差し指の先から血が出ている。私の指に傷をつけたのは、彼女の持つナイフだった。先程眼前で閃いたのはこれだ。

「何するんですか、園部先生！」

園部某というのが、わたしの知る彼女の名だ。さっきの、幼児に対する医師のようなと思つた台詞からの連想で思い出した。先生とつけたのは、彼女が医師だから。わたしの実家近くにある総合病院に勤務する、たしか外科医だった。ただしそれは、わたしが小学校に入った頃から、中学校を出た頃までの話である。

わたし自身は外科のお世話になるような怪我を負つたことはない。それでどうして外科医と顔見知りになつたのかといえば、うちの父親や蝶子さんが家の近所で彼女と立ち話をしているのを度々見かけることがあつたからだ。わたしにとってはせいぜいひと言ふた言言葉を交わす程度の相手だったが、子供心に思つていた、何年経つても容姿のあまり変わらない人だなあ、と。今も当時のままの、大学生で充分通りそうな外見だ。

……そうか、この人も吸血鬼でしたというおちか。気をつけよう、あなたの隣に吸血鬼。実は結構生息数多くないか、吸血鬼。

「あらま、園部って懐かしい名前だわねえ、久しぶりに呼ばれたわ」
園部先生は笑い、

「本当は白峰っていうのよ、白峰柚子。で、表向きは津田良子、二

十二歳。薬学部の学生やってます」

さらりと偽名使用を白状した。しかも常習犯。おまけに年齢大幅に誤魔化して大学に潜り込んでいるらしい。ちよつと待て、病院で外科医していた時の医師免許は氏名のところどうなっていたんだ。

わたしの左手首は園部先生、じゃなくて薬学生の津田良子さんと本名白峰柚子さんに握られたままだ。さっくり傷をつけられた人差し指は、流れ出た血で赤く染まっている。切られた直後は突然のことに呆然としていたのもあつてそれほどではなかったが、じんじんとした痛みが徐々に増してきている。

「ほら、若様。口開けて」

言いながら、久喜さんが自主的に動くのを待たず、白峰さんは彼の口を空いているほうの手でこじ開けた。そんなことをされているのに、久喜さんはびくりとも動かない。

「あの、先生？」

今は医者先生ではないらしいが、わたしはついそう呼びかける。それににこりとお医者さんスマイルを返し、彼女はわたしの手をぐいと引く。血の滴が久喜さんの服に落ちた。わたしはそれを目で追う。相も変わらずの黒一色なので目立ちはないが、早めに洗わないと染みが落ちなくなってしまう――。

不意に、白峰さんに掴まれていた手をさらに別の手に掴まれ、わたしは息を呑んだ。

見れば、目を閉じてぐったりしていた久喜さんが、今は薄く目を開けて、わたしの左手を包み込むように握っている。白峰さんの手が離れた。

久喜さんはそのままわたしの手を引き寄せ、そして――。

「――っ！」

べろり、と。

血を流していたわたしの指を、久喜さんの舌が這った。付け根から、指先まで。それだけに留まらず、この男はわたしの人差し指と、ついでに中指もその口に含み、さらに丹念に舐る。

わたしはあまりのことに硬直していた。

そのまま数十秒ほどが経過しただろうか、ようやくわたしの指先から久喜さんの唇が離れていく。どこかぼんやりとしていた彼の瞳が焦点を結ぶ。そして、

「――あ」

しまった、と、久喜さんが小さく呟くのを、わたしはたしかにこの耳で聞いた。

すぐにわたしの手を解放し、

「すまない、つい、うっかり」

次の瞬間、硬直が解けたわたしは奇声を上げて飛び退こうとして、車の天井に思いきり頭を打ちつけた。

「ちよつと、何やってんのよ香苗ちゃん」

呆れたように言う白峰さんに、わたしは左手を突きつけて必死に訴えた。

「せ、先生っ！ さつき、さつきわたし、指、指、指、舐められ……！」

濡れた指先にはまた新しい血が滲んでいる。利き手でないだけましだが、数日は洗い物をする時などに染みそうだ。

「大げさねえ。いいじゃない別に。旦那様なんだから」

白峰さんの発言に、わたしは目が点になった。

婚約の件はこの人にも知られていたのか。ていうか違うし。旦那様じゃないし。よしんば本当に恋人だの婚約者だの夫婦だのという親密な関係にあったとしても、普通こういうことするか？ するかもしれないけど、少なくとも他人の目がある場ではやらないだろう、バカップルの場合は知らないけど。いや、問題はそこじゃなくて、なんでわたしにひと言断ってからにしないのだ。吸血鬼には事前に相手にひと言かけるといふ文化がないのか。

「あのねえ、ユズちゃん。その人達、あれだから。なんて言っただけ、プラトニック？」

外からこちらの様子を見守っていた三郎太さんが口を挟んでくるが、その言葉が当てはまるのは既に恋愛関係にある場合だ。

ウェットティッシュの容器が転がっていたのを見つけ、わたしは二、三枚まとめて引き出し、久喜さんに舐められた指先をごしごしぬぐった。生温い感触がまだ残っている気がする。思い出しただけで鳥肌が立ちそうだ。

「うつ……気色悪い」

「すまない、本当に。無意識で」

「まあまあ。兵吾、口の中爛れたりしてないよねえ。血、ちゃんと合ったみたいでよかったじゃない。香苗ちゃんもさ、そんな汚物に触っちゃった、みたいな反応しなくても」

三郎太さんは半分笑い混じりだ。

「慣れなきや駄目よ、香苗ちゃん。あなたの旦那様になるんですよ、この若様」

こちらも笑いながら、忠告めいたことを言うのは白峰さん。

「いいえ！ なりませんから」

「だって結婚するでしょ？ じゃあ旦那様じゃない」

「いや……」

言いかけた久喜さんを遮り、わたしはほとんど怒鳴るように言うてしまった。

「結婚なんてしませんってば！ 誰がこんな人の嫁になんかなるか！」

つい、すっかり、失念していたのだが、この時周囲には白峰さんや三郎太さん以外の吸血鬼の皆さんもいて、つまりわたしの結婚拒否宣言は彼ら全員にばっちり聞かれていた。

小声で「振られた?」「振られた……」などと囁き交わすのを聞いて、あ、やつちゃった、と思っても後の祭りだ。ですよ、やっぱりそう解釈しますよね。一瞬にして久喜さんに、複数の証人がいる場で婚約者に振られた男、というレッテルをべたりと貼ってしまった、かもしれない。実際には振るの振られるのという関係ではないけれど。せめて「こんな人」呼ばわりはやめておくのだった。

フロアー入れるべきか? でも何をどう言えばフロアーになるのだろうか、この場合。結婚する気がないのは事実だし。

本気で悩みだしたわたしに呆れたのか、久喜さんが大きなため息をついた。

「先に結婚式の招待状がいったと思うが、こういうわけなので直前で流れても気にするな」

目を覚ましはしても体調が悪いのは変わらないらしく、声を出すのも億劫だと言いたげな顔で適当なことを言い放った。

気にするなとか言っても無理だろうそれ。それにここにいる人達は、わたしにとってはもう二度と会わない可能性が高い相手だが、久喜さんにとっては同族のお仲間で、この先も長く付き合っていくであろう人達なわけで、その皆さんの前でそんな投げ遣りでいいのか、この人。

「あの、久喜さん? いいんですか、今のだとなんか結婚式直前に大喧嘩して別れる人騒がせなカップルっぽくなっちゃってますけど。しかも久喜さんが振られ男ということに」

わたしとしては吸血鬼達に悪印象を与えようと、それで結婚話がなくなるならまあそれもありかなというところだが、久喜さんはそ

れでは立場がなくなるのではないか。

「丁度いい。結婚直前の破局がショックで、とでも言えば、この先数年は縁談を躲せる」

本当に結婚する気がないんだなあ、久喜さん。しかし理由としてそれはどうだろう。久喜さんの近親者なら、わたし達がつい最近まで完全に赤の他人だったことも把握しているだろうし、それで振られたのがショックで立ち直れません、は通用しなさそうな気が。

ていうか今の久喜さん、体調不良で頭が回ってないんじゃない。目は開けていてもだるそうに背もたれに身を預けたままだし、息も浅い。色んな意味で心配になってきたが、三郎太さんが暢気な声で、

「うちの若が無事に婚姻成立に漕ぎ着けられるか、はたまたこのまま破局へ一直線か。ひと口一万でどう？」

などとお仲間に声をかけているのを見て、結婚に関しては真面目に心配することもないように思えてきた。最後の手段は式直前の大喧嘩からそのままさようなコース、手っとり早いし説明不要だし、ありじゃないかな、うん。

それにしても賭金高い、などと考えていると、さっきわたしが使ったウェットティッシュの容器を久喜さんが無言で取り上げ、三郎太さんの背中に投げつけた。賭けの対象にされたことが気に入らなかったらしい。

久喜さんの体調不良の原因は、異能を行使しまくったことによる消耗なのだという。

なんでも、今回のように病院に運び込まれた吸血鬼を回収する場合、近隣の異能持ちに召集をかけて協力し合うのだとか。要するに多数で寄って集って善良——かどうかはわからないが、居合わせた人間を片っ端から操り排除していくわけだ。

ただ相手を操るだけではその場は凌げて也大騒動になること必至なので、それとセットで眠らせてみたり、操られている間の記憶をあやふやにしてみたりということもするらしい。

……なんか、つくづく強盗向きの能力だと思う、これ。

それはそれとして久喜さんだ。この人、他人を操るだけではなく、吸血鬼が持つ異能の中でも珍しい、短時間分の記憶を消去する能力に長けているのだという。過去五、六時間分程度なら完全に消してしまえるそうだ。

病院で、入院患者はいいとして、スタッフがみんな揃って数時間分の記憶がありませんなんてことになったら大問題に発展するのではないかと思うのだが、この夜は事故に遭った吸血鬼の他に救急搬送されてきた人はなく、緊急手術をしているわけでもなく、ならいいんじゃないかな、ということになってしまったのだとか。

他の吸血鬼が病院スタッフを片っ端から操り、久喜さんが彼らの記憶を消していき、その合間に防犯カメラの映像や例の吸血鬼に関する記録類を処分していく。個人のメモなど漏れはあっても、ちゃんとした記録もなければ記憶もない状態なら何かの間違いで片づけられるだろう、そうなってほしいな、というわけだ。

手順としてはいつもと同じだったが、今回は相手の人数が病院の規模から推測していたよりも多かったのと、吸血鬼が運び込まれた時点まで遡るなら消去する記憶は六時間分近く、これが久喜さんにとっては可能であるぎりぎりのところだった。というわけで、なんとかやり遂げはしたものの本人はダウンしてしまったのだ。

今頃、病院の中は大騒動になっていることだろう。患者ひとりを最初からいなかったことにするのはわかるけど、業務に支障が出るのではないのか。あと、防犯カメラの無力化を担当させられた警備員のふたり、あれで仕事くびになったりしないか、かなり本気で心配だ。防犯カメラの映像も消去したとは言うが、もしネットを経由してリアルタイムでどこかへ送られていたらあの人達完全にアウトだし。三郎太さんは「病院内の全員が一斉におかしくなってるんだから、大丈夫じゃない？」と言うが、今まで大きな問題にはならなかったという以外に根拠はないと力強く断言してくれた。

ちなみに、消耗した久喜さんにわたしの血を飲ませたのは、要す

るに手軽で効果の高い栄養補給ということらしい。栄養ドリンク代わりか、わたしの血は。

久喜さんは血を飲む必要はないとわたしに語った。それもたしかに事実ではあるものの、異能持ちの吸血鬼の場合はわかりやすく、能力の強度や使用時の疲れやすさという形で如実に影響が出るそう
だ。吸血鬼はやはり血を飲む生き物ということか。

日下明というのが、三郎太さんの運転免許証に記された名だった。年齢は二十六歳。これが彼の、今現在の表向きの身分である。

「その写真、よく撮れてるでしょ。ろくに仕事もせずに兄夫婦のお世話になって日がなごろごろしている駄目青年って感じ」

たしかに写真も実物も見た目から受ける印象はそんなふうなのだが、自分で言わなくても。

「お兄さんがいるんですか」

「いないいない。名前は三郎太でも僕ひとりっ子」

三郎太さんが言うには、娘さんの旦那さんは元人間の吸血鬼で、外見五十歳、実年齢もほぼ同じなのとか。娘さんは外見三十代前半、奥さんは三十前後で、四人の中では三郎太さんが一番若く見える。そのせいか、ご近所ではいつの間にか、お兄さん夫婦を頼ってやって来て同居している無職青年という評価が定着してしまったらしい。

「実際、みずのが生まれた頃からあんまり働いてないしねえ。貯蓄はあるし、奥さんは育休中だけど娘と婿は普通に働いてるから、金銭で困ることは当分なさそうなんだけど」

わたし達がこの会話をしているのは、病院から帰る途中の車内である。久喜さんが車を運転できるような状態ではなく、わたしはというと運転免許を取っていないため、「夜間の運転ってあんま好きじゃないんだけどなあ」とぶつぶつ言いながら三郎太さんがハンドルを握ることになった。

久喜さんはわたしの隣の席で眠ったままだし、善明君も熟睡しているようだ。みずのちゃんは一度目を覚ましたが、何やらごにごによ言っていたかと思うとまたすぐに寝入ってしまった。

「この日下明って名前、どうやって手に入れたんですか。まさか戸籍の売買で、とか言いませんよね？」

「言わない言わない。僕は極力犯罪行為は避けることにしてるしほら、うっかり捕まったら指紋の登録なんてされて面倒じゃん」

さっきやったことは立派な犯罪行為じゃないのか。わたしは心の中であつこみを入れた。

「ええとね、社会的な大混乱があつた時期に、それに乗じて存在しない人間の記録を作っちゃったわけ。機会があればそういうことをやりつつ、存在しない人間同士で結婚させたり子供が生まれたことにしちゃったりでちまちま数を増やしていつて」

つまり戦後の混乱期あたりに不正をやらかして実体のない戸籍を大量に作ってしまったということだろうか。

「それ、立派な犯罪者集団じゃないですか」

「ええ？ でもさあ、ちゃんと税金も年金も納めてるんだよ。適當年齢で婚姻届け、高齢になつたら死亡届け、維持管理も結構手間かけてるんだから。だいたい百五十とか二百なんて歳の連中も多いんだから。誤魔化すにはこれが一番でしょ」

まあ、他人から戸籍を買い取るよりはまし……なのだろうか。

「それじゃあ久喜さんはなんて名前使ってるんですか」

わたしは免許証を三郎太さんに返しながら訊ねた。

「長瀬総一郎。でもこの人はもう四十歳越えてることになってるから、そろそろ別のに乗り換えるんじゃない？ 兵吾は四十以上には見えないしねえ」

言い張れば通らなくもないかな、というところだ。

「みずのちゃんと善明君は？」

「みずのはそんまんまだよ、三嶋みずの。うちの婿はちょっと前まで人間だったから、今のところ戸籍はそのまま本来のものを使ってるの。三嶋はそっちの苗字ね。善明も、名前はそのまま。僕の息子っていう部分も一致してるから日下善明。あ、善明の明と日下明の明はただの偶然だから。僕の奥さんが明子さんで、明の出所はそっち」

あの白峰柚子さんは、園部と名乗っていた時に医師免許を取得し、

書類上の歳と外見年齢の差が大きくなり誤魔化するのが困難になったところで、今度は津田良子という身分を得て薬学部で学んでいるわけか。

吸血鬼として生きていくのも色々大変そうだな。見た目が変わらないなら同じ土地に長い間住み続けることも、特に人口が少なく人の流入があまりないところでは難しいだろうし、都市圏であつても近所付き合いは要注意だ。

そういう面倒事の多い人達の一員にされることに、勝手に決定されていたのか、わたしは。そういえば、自覚はなかったが、既に一般の病院は避けたほうがいい身体になっているらしいし。どうするんだ、これ。この先一生事故に遭わず事件に巻き込まれず急病で搬送されもしない、なんて自信はちよつとない。

「……ひよつとして、わたしが事故に遭つたりして病院に運び込まれたら、今日みたいに回収されるわけですか？」

「それは勿論。まあ軽傷ですぐに出てこられるようなら別だけど。あと搬送されて即手術、そのまま集中治療室行きたとどうにもできないから様子見かな。下手したら死なせちゃうし。あと、最近はどこも警備が厳重だから難易度がっちゃってさあ。遺体になつてる場合は何かなんでも回収する必要があるから、多少の無茶もやるけど」

「遺体……って、解剖されるとまずいから？」

「いや、それもあるにはあるんだけど。——あのね、吸血鬼は太陽の光を浴びると灰になる、とか聞いたことない？」

わたしは目を瞬かせた。

「え。なるんですか、灰」

「灰っていうか、砂だね。砂の塊。太陽は全然関係ないけど。早い奴だと死亡の一時間後には砂だよ。しかも大量の。全部集めて計つたら、大人の場合は体重マイナス五キロぐらいが平均なんだってさ。路上でぽっくり逝つた場合ならそのまま砂になつても誰かが悪戯で撒いたんじゃない？ でいけるかもしれないけど、病院内なんかで

砂になっちゃった日にはどう誤魔化せばいいの、って感じでしょ」

「でも、それって、わたしでも砂になっちゃうんですか」

「可能性はあるよ、一度でも吸血鬼の血を体内に入れたなら、誰でも。確率は低いと思うけど、そうなったって記録は結構あるから、油断できるほどの稀少ケースってこともないんじゃない？ 逆に吸血鬼でも砂にならないのもいるんだけどねえ」

わたしは自分の手をまじまじと見つめた。へえ、死んだら砂になるかもしれないのか。うわあ、吃驚。

どうしよう、ちょっと頭抱えたくなってきた。

「ところでさあ、香苗ちゃん」

「……………なんですか」

「その傷なんだけど」

傷と言われて、わたしは左手の人差し指に目を向けた。あの後で白峰さんに消毒してもらい、今は絆創膏を貼っている。

「兵吾に血を貰ったらそんなのすぐ治ると思うんだけど、どう？」

「いりません」

吸血鬼に血を貰えば、それだけ自分も吸血鬼に一步近くなるということではないか。この程度の傷でいちいち血を貰っていたら、半年もしないうちに吸血鬼になってしまいかねない。

「なんなら僕の血をあげてもいいけど？」

「結構です。間に合ってます」

「まあ兵吾の血のほうがいいとは思っけどね。でも欲しかったらいつでも言ってくれていいよ」

「いや、欲しくありませんから」

吸血鬼の血を飲ませようとする三郎太さんと断固拒否するわたしの言い合いは、車が久喜さんのマンションに到着するまで延々と続いたのだった。

土曜日、わたしは大学に行き損ねた。ええ、思いつきりさぼってしまいました。目が覚めた時には既に十五時過ぎだったというのが理由だが、実はわたしには久喜さん宅に帰ってからもう一度布団に戻った覚えがない。というか玄関を入ったところを最後に記憶が途切れている。吸血鬼の異能には他人を強制的に眠らせてしまうものもある、という情報を得たばかりだ。これ絶対なんかやっただろう、と三郎太さんを疑いの目で見たわたしが――自力で歩くのがやっとという様子だったので久喜さんは除外した――、へらへらと上手いこと躲されて言質を取るには至れなかった。

過ぎた時間は戻せない。仕方なく友人達に片っ端から電話をかけて、ノートを見せて貰う約束を取り付け、発表された試験範囲とレポートのテーマを教えてもらった。

翌、日曜日。予定通り、全員で水族館に遊びに行った。ただし、久喜さんは「眠い」のひと言で車の中に居残った。体調は戻っているように見えたので、おそらく本当にただ眠かっただけなのだろう。あとはみずのちゃんにあちこち引つ張り回されるのを避けたかったのかもしれない。昼食時もひとり眠ったままだったため、久喜さんは帰りの運転を担当するただけに同行したようなものだった。

ところで、夜の病院で目撃した若い男だが、それを久喜さんや三郎太さんに話すことをわたしはすっかり忘れていた。それはもうきれいさっぱりと。……いや、あの後起きた出来事の衝撃で。

あの男の存在を忘れていたことに気がつくのは、数日後のことだ。

月曜日。

わたしは久喜さん宅から、普段は使わない電車に乗って大学へ向かった。教科書などを取りに行く必要があるので、先に自分のマンションに寄ったけれど。帰る先もやはり久喜さんのマンションだ。

その前に着替えたのなんだの要るものを取りに自分のマンションに戻る予定だが。朝は電車を使ったが、帰りは久喜さんが迎えに来てくれるらしい。

三郎太さんが言うところの親戚はできるだけ集まって仲良く過ごしましょう週間とやらは、何故かわたしを巻き込んだまま続行中だった。本当になんでわたしがそのなんたら週間に付き合わねばならないのか、誰か教えてほしい。いい加減考えるのも面倒になってきたのでとりあえず従っておくことにはしたのだが。……相手は他人の身体を好き勝手に操ってしまえる生き物なので、従わざるを得ないとも言っ。

大学へ行くとみさ子が浮かっていた。周囲の人間がちよつと引いてしまうほど浮かれていた。どうしたのかと訊ねると「彼氏ができた！」と言うので、へえ、おめでたいと思っていたら、他の友達がこそつと教えてくれた。なんでもみさ子は土曜日の講義中、すぐ後ろの席に座った男子学生にノートを書させてくれないかと頼まれたそう。講義が終わってからふたりでコピーコーナーに行き、ノートのコピーを済ませた後でその男子学生は、お礼にとみさ子を食事に誘った、と、ここまでが周囲の知る事実で、そこから一気に彼氏つてどれだけ急展開なんだか。

できたばかりの彼氏のことを詳しく聞かせようとするみさ子をいなし——会って一日二日の相手なのに、よくもそれほど語ることがあるものだと感心してしまう——、わたしは友達から借りた土曜日のノートを移す作業に集中していた。

みさ子はみさ子で気にせずひとり喋り続けていたが、その内容のほとんどを聞き流していたのは秘密だ。それでも彼女のできたばかりの彼氏が二十七歳というのだけは耳に留まった。一度就職してお金を貯めてから大学に入学する人も、他大学、他学部を卒業した後でまた大学に入る人も、いくらでもいる。なので二十七歳の学部生も珍しいわけではないが、そういう人達のほとんどは熱心に講義を聴いているものだ。実のところ、不真面目が崇めて留年を重ね、そ

れでもなお不真面目であり続けているどうしようもない人なんじゃ、と考えてしまった。他の子達も似たような考えに至っていたようだが、みさ子本人はそのあたりあまり気にしていなかったらしい。

大学を出たのは十六時過ぎだった。久喜さんは十六時半頃にわたしのマンションまで迎えに来ることになっていたので、早足で帰路を辿る。

マンションのエントランスを抜け、階段を上がり、自分の部屋のドア前に立ったところで、わたしは眉を顰めた。

ドアの隙間に、ふたつに折られた紙が挟まれている。隣も、その隣の部屋も、どこもドアにそんなものは挟まれていない。わたしの部屋だけだ。

いったいなんだろう、と訝りながらその紙を広げて、わたしはしばし言葉を失った。

A4サイズの紙の、真ん中から少しずれたあたりにちまちまと、読みにくいまでに小さな文字が印刷されている。

わたしが絶句したのは、紙の無駄遣いに驚いたからでは勿論ない。問題はその内容だ。

久喜家には関わるな。この警告に従わねば貴様に不幸が訪れるだろう。

それは古式ゆかしい脅迫状だった。

久喜さんと三郎太さんに脅迫状を見せたところ、ふたりとも眉根を寄せて難しい顔をした。しかし、脅迫もされていることだし久喜家とこれ以上関わらないために久喜さんのマンションを出ていくというわたしの案はすっぱり却下され、それどころか、ひとり暮らしでは不安だからしばらく実家に帰るか、さもなければ久喜さん宅に本格的に引っ越してはどうか、などと提案され、こちらはわたしが即却下した。ちなみに前案は久喜さんのものだが、後案を言い出したのは三郎太さんである。この脅迫状、そういう話に持っていくためにこの人がこっそり仕込んだのではないかと、一時は半ば本気で疑った。

久喜家と関わるな、などとあるからには脅迫状の主はそちらの関係者だろうと思うのだが、久喜さん達には具体的な心当たりはないらしい。

「久喜と折り合いの悪い家もあるにはあるが、こんな厭がらせの域を出ないようなまどろっこしい手段を選ぶとも思えん。一触即発とまではいかないにしろ、このところ関係は悪化しているからな。やるならむしろ直接本人を襲うだろう」

正確には、心当たりがなくもないが手段が温すぎるの違うと思われる、だった。

脅迫状めいたものが一枚寄越されただけで、部屋の中に侵入された形跡があるわけでもないのに、わたしもこの時点では危険があるとはあまり考えていなかった。

火曜日、大学帰りにマンションに寄ると、また脅迫状がドアに挟まっていた。文面もちまちました文字サイズも昨日と全く同じだったが、紙の大きさはA4からA5サイズになっていた。この調子で毎日サイズダウンしていつて名刺大にまでなれば文字の小ささと丁度釣り合うのではなからうか。そんなふうに思いもしたが、残

念ながらそれは実現しなかった。

水曜日、部屋の外からは異常が認められなかったため、謎の脅迫犯は早くもこれに飽きたのかとわたしは肩の力を抜いた。が、安心するのは早かった。

ドアを開けた途端、嗅ぎ慣れない臭いが鼻をつく。換気と、念の為にともドアを開けたまま部屋に入ると、部屋の壁にでかでかと、赤い、おそらくはペンキで書かれた文字が踊っていた。部屋に籠もった臭いはペンキに含まれるシンナーのものなのだろう。

久喜家には関わるな。さもなければ貴様を不幸にする。

小さな文字で紙にプリントアウトから壁にでかく手書きにと変化しただけで、脅迫は続いていた。文面は少し変化している。「不幸が訪れるだろう」から「不幸にする」だ。さらに相手には部屋の中に入る手段があるのも明らかになった。

しかしそれと並んで大きな問題がひとつ。これ、マンションの管理会社にどう言えばいいのだろうか。

壁紙張り替えということになるのだろうか、この場合はやはり代金出すのはこちらか。犯人がわかればそちらに請求できるだろうが、今のところ不明だ。鍵の交換も、多分こちら持ち。それに、何があったのかと訊かれたらどう答えればいいのだ。パーティーやってたら酔った友達が悪戯して、と言い張れば通るだろうか。でもそれは鍵まで換える理由にはならない。いつそ管理会社には内緒にしたまま、自分でこっそり業者に頼むか？ どちらにしても思わぬ大出費の予感がひしひしとしてきた。

この日もマンションまで迎えに来てくれた久喜さんに事情を話すと、貴重品だけでも全部持つてくるようにと勧められた。元から保険証やキャッシュカードなどは持ち歩いているので、他には貴重品というほどもないのだが、デスクトップPCだけは持ち出すことにした。

久喜さんがドアの鍵穴を確認してくれたが、変な傷がついたりしていないらしい。つまり相手はピッキングの腕がとても優れている。

るか、或いはわたしの部屋の合鍵を入手しているか、ということになつてしまふのだろうか。考えるのも厭になつてくる。

「本当に心当たりないんですか……？　これ、どう考えても久喜さん関係の人がやってるじゃないですか」

と訊ねる声もつい、恨みがましいものになつてしまふ。

「そう言われてもな。君自身は何も知らなかったようだが、中里家はそもそも伊斗様の実家ということもあつて中元歳暮季節の挨拶は欠かさない関係だったし、十数年前からは京吾の血を与えられた君もいる。端からうちの身内として数えられているも同然だ。それを今になつて久喜に関わるなも何もないだろう」

と久喜さんも首を捻るばかりだ。

この日は必要な教科書と当面は充分足りるだけの服も久喜さん宅に運んだので、しばらくは自分の部屋に戻らなくても問題はなくなつた。

戻る必要はなくなつたのだが、木曜日、大学の近くで久喜さんと落ち合つてから、わたしはマンションに車を向けてもらった。

なんで毎日毎日わざわざ迎えに来てくれるのかはよくわからないが——久喜さんから申し出てくれたことではあるし、久喜さん達の勝手な都合で久喜さん宅に留められているため通学が面倒になつたのだとはいえ、少々気が引ける——、部屋に侵入された後ではさすがに危機感を覚えるので、自分ひとりではなく年上で見た目からの威圧感もある男性が一緒なのは心強い。

この日は最初から久喜さんを伴い部屋に向かった。そしてわたし達は、丁度わたしの部屋からドアを開けて出てきた男と見事に鉢合わせしたのだった。

こちらも驚いたが、相手の見舞われた驚愕はそれ以上だったようだ。言葉もなく立ち竦む。

侵入者は非常に特徴的な格好をしていて、正直なところわたしは彼の装いにも驚いた。ジャージの上下で野球帽を目深に被り、大きなマスクと濃いサングラスで顔を隠している。小学校の近くにあった「知らない人にはついていけないこと」と注意を促すポスターや、高校の近くに乱立していた「痴漢出没注意！」の立て看板にあったイラストの不審者を彷彿とさせる。あれはまさにこういう感じだった。絵に描いたような、とはこのことか。しかし実際にこんな人の目を惹く姿で不法行為に及ぶ人間がいるとは思わなかった。

その侵入者のスニーカーやジャージの裾に、色とりどりの汚れがついていることにわたしは気づいた。昨日も嗅いだシンナー臭にも途端、厭な予感に支配される。

「あなた、まさか——」

「なんでもう帰ってくるんだよ！」

わたしの言葉を遮り、男が悲鳴じみた叫び声を上げた。身を翻し、部屋に戻ろうとする。

「なんでって、四コマ目が休講になったから……」

すっかり質問に正直に答えてしまったわたしを置いて、久喜さんが動く。ドアを閉めようとする侵入者とそれを阻もうとする久喜さんとの攻防はほとんど一瞬で方がつき、敗北した侵入者はさらに部屋の奥に逃げようとする。それを久喜さんが背後から思いきり蹴り倒した。顔から床にダイブした男の背中に久喜さんは片足を乗せて、それ以上の逃亡を防ぐ。

「あの……土足……」

「この状態でそれを気にするか。今更だろう」

久喜さんが言うのも尤もで、部屋の中は惨憺たる有様だった。倒

れた侵入者が久喜さんに踏みつけられているのは流し台の前だが、壁も床もコンロも流しも、冷蔵庫や電子レンジまでペンキだらけだ。それどころか床にはペンキ溜まりまでできている。まだ乾いていないらしく、久喜さんの靴も跳ねたペンキで汚れてしまっていた。昨日は赤だけだったが、今日は何色も使用されている。使用されて、といっても今日のこれは単にぶち撒けられているだけだ。

充滿したシンナーの臭いに頭がくらくらしそうになる。とにかく窓を開けて換気をしなくては。わたしはドアを大きく開けたまま、床のペンキを避けながら奥に行こうと試みたのだが、至る所ペンキだらけで早々に諦めざるを得なかった。物入れから古いスリッパを出してミュールから履き換え、部屋の中に入った。

まずは真っ直ぐ窓に向かったのだが、カーテンも窓ガラスもべったりとペンキがかけられていて、それに触れないように窓を開けるのもひと苦労だ。

それから改めて部屋の様子を見回し、わたしは卒倒しそうになった。

壁も床もペンキ、ペンキ、ペンキ。赤、青、黄、白、緑、ピンクとカラフルに仕上がっている。机も本棚も鏡台、姿見、ベッド、さらにはクローゼットの中身も全滅だ。わたしにとっては高い買い物だったコートも、勿体なくてあまり使っていなかったお気に入りのバッグも、どれもこれも全部ペンキの洗礼を受けている。空になった大量のペンキ缶がクローゼットの中に放り込まれているのがまた腹立たしい。

当面必要なものは運び出しておいた後でよかったね、などと思えよう筈がない。

部屋の中をこんなにしてしまつては、マンションを追い出されるのは当然のこと、同じところが管理している物件は今後借りようとしても断られたりするのではないだろうか。あと原状回復費はいったい幾らになるのか。泣きたくなってきた。

未だ背中を片足で踏みつけたまま、久喜さんは侵入者の髪を掴ん

で顔を上げさせた。ペンキ溜まりに倒れ込んだせいで酷いことになっているが、同情する気には到底なれない。

「念の為に訊くが、これは君の知っている男か？」

帽子とサングラスはどこかにいつてしまっているが、マスクは着けたままでオプションとしてペンキによる斑模様。そんな状態なので確信は持てないが、とりあえず声は聞き覚えのないものだったと思う。一瞬だったので断言できるほどの自信はないが。

わたしは慎重な足取りで久喜さんの傍に戻った。スリッパの裏にペンキがべったりくっついて、歩きにくいことこの上ない。ここでこけたら悲惨なことになるのはわかりきっているので、わたしは恐る恐る足を運んだ。

至近距離からじっくり見ても、やはり知っている顔ではない気がする。体格や髪型、髪の色からも、該当する知人は思い浮かばない。ペンキの模様が邪魔で素の顔がいまいち想像できないというのはあるのだが、それでも間違いないだろう。

「知らない人です」

「はああ？ お前アホか、バカか、てめえの目玉は飾りものかよ！ こないだ顔見てただろうが、頭ん中身腐ってんじゃねえのか？ それとも最初から空っぽなのかもな！」

それなりに自信を持って答えたのに、当の侵入者本人から抗議を受けてしまった。おまけに抗議ついでに思いつきり貶され、わたしは侵入者に対する新たな怒りを募らせるよりも先に、わけがわからずきよんとした。

久喜さんは足を軽く浮かせてから再度、侵入者を踏みつけた。念入りに踏みにじる。そうやって黙らせておいて、わたしに問うた。

「本当に知らない顔か？」

「ほんとに見覚えがないんですけど」

少々自信はなくなってきた。しかしいくら記憶を浚ってもこの侵入者に該当しそうな人間が思い浮かばないのも事実だ。年齢はわたしより上、二十代半ばから後半あたりだろうか。見た目だけなら三郎太さんと同じか少し上くらいだが、そうなると小中高での同級生という線はなくなる。小中高時代の先輩だったとか同じ大学に在籍しているとか、可能性は色々考えられるが、わたしがちゃんと認識しているような間柄ではない。というかこれはもしや、相手から一方的に知られているだけではないのか。わざわざペンキ缶を大量に持ち込みまでして部屋を滅茶苦茶にしてくれたあたり、わたしに対して何か思うところがあるのは確かなのだろうか。

わたしは首を巡らせて侵入者の所業の成果を眺めた。何度見てもペンキまみれで人の住めない空間になり果てている。当面は久喜さんのところに泊まるとして、急いで引越し先を探す必要があるし家具も購入しなければならない。一万円札に羽が生えて飛び去っていく幻が見える。学費と生活費、マンションの家賃は祖父母がわたしに遺してくれたお金から出している。うちの父親が職業と本人の性格の合わせ技で収入面での安定を欠いているために不安を覚えたらしく、わざわざ遺言つきで用意してくれたものだが、額は大学卒業までならぎりぎり足りるのではないかということだ。残額とこれから必要になる金額を考えると、ここでの大出費は痛い。痛すぎる。夢なら覚めてほしい、お願いだから。

「久喜さん。ちょっとわたしの頬つぺた抓ってくださいませんか」

「何故？」

「いえ、もしかしたらこれって夢じゃないかななんて儚い希望を抱いてみたりして」

「抓りたいなら自分でやればいいだろう。そしてこれは現実だ。君には気の毒だが諦めて受け入れろ」

口ではそう言いながら、久喜さんはわたしの両頬をぎゅっと抓り引つ張った。――痛い。

「ひよ、ひよっ、いひゃい、いひゃいれす！」

頭をぶんぶん振って久喜さんの手から逃れ、わたしは涙目で非難した。

「酷いじゃないですか！ 普通あんなに思いつきり抓りますか、女の子相手に。しかも引つ張るし！」

「何を言うか。君が頼んだのだから。第一手加減は充分にしたが？」

「嘘だ、まだじんじん痛いです！」

腫れたらどうしよう、と頬をさすりながら嘆くわたしに、久喜さんはくだらないと言いたげに鼻を鳴らした。うわ、むかつく。

「お前ら、何ごちゃごちゃやってんだ、このバカ！ つうかてめえ足どける！ 重いだろうが、このボケナス！ 唐変木！」

久喜さんの足の下で侵入者が喚き、直後、久喜さんからさらに二度三度と踏みつけられた。自分が圧倒的に不利な状況で口汚く罵れる根性だけはすごいと思う。単なる考えなしなだけな気もするが。

「貴様は誰だ。彼女のほうは全く貴様を知らんらしいが、貴様はどこで彼女のことを知った。どの家に属している？」

「家？」

久喜さんの質問の中にひとつ変わった項目が入っていたのをわたしは聞き咎めた。

「これは同族だ。だが久喜の身内にはこんな男はいない」

久喜さんはあっさり言う。

「同族？ ってことはこの人も吸血鬼？ わかるんですか」

たしか吸血鬼同士でも見ただけでは同族かどうかは判断がつかない

いではなかったか。

「さつきから私や君を操ろうとしている。もつとも、まるでなっていないが。大方なりたての元人間だろう、これは」

へえ、そんなのでわかってしまうのか。わたしにはさっぱりだ。身体が操られる感じも全くない。

「操られてませんよね、わたし」

「慣れない輩では無理だろう、君には異能が影響しにくい。京吾の血を得たのも大きいだろうし、君の家の人間は元から耐性がある者が多いそうだ。私が実際に試したことがあるのは君と君の父君だけだが、確かにやりにくかった」

中里家にそんな秘密があったのか。しかし操りにくいといっても、久喜さんも三郎太さんもほいほい操ってくれたではないか。本当にそんな耐性があるのか、わたしは疑問に思う。

久喜さんは男の背に乗せた足にじわじわと体重をかけた。

「おい、コラ！ 何すんだ痛えだろこバカ！」

「やめてほしければさっさと吐け。貴様はこの誰だ」

「誰がべらべら話すかよ、バーカバーカバーカ！ 俺はこう見えても――」

男の台詞は途中で悲鳴になった。久喜さんが空いているほうの足で男の手を踏みつけ、踏みにじったせいだ。

ふと、わたしはドアの方に目を向け、ぎょつとした。全開のドアの向こうからこちらを窺っている人がある。言葉を交わしたことはないかよく知っている顔、隣の部屋の住人だ。

目が合うと、お隣さんは愛想笑いを浮かべ、そそくさと去っていく。数秒後、隣のドアが閉まる音がした。

まずい。色々と見られたし聞かれたかもしれない。

「すみません久喜さん、場所変更して下さい……」

願わくばお隣さんが他の学校の学生でありますように。仮に同じ大学だとしても、どうか違う学部でありますように。間違っても実は同じ学科の同期生でしたなどという偶然が起きませんように。わ

たしは思いつく全ての神様に本気で祈った。

ペンキまみれでシンナー臭の満ちた部屋の中、床に倒れた男の背中を喜々としてげしげし踏みつけている黒ずくめの男を目の当たりにしたお隣さんが警察に通報しないと言いきれない。というかわたしなら通報する。そのため、わたし達は急いでその場を後にした。まさかペンキがべつたりのままで車に乗せるわけにもいかず、シートを裏返しにして侵入者の身体に巻きつける。その格好で彼は自分の足で歩いて、久喜さんの車の後部座席の床におさまった。おとなしく従ったわけではなく、久喜さんの能力で操られていたためだ。そうでなければ罵声の嵐だったに違いない。それに男のシート巻きを担いで運び車に乗せる場面を目撃されでもしたら、拉致犯扱いは免れないだろう。

窓を全開にしてもなおしつこく漂うシンナーの臭いに久喜さんはかなりわかりやすく不愉快そうだったが、だからといって臭いの原因を途中で捨てたりはせず、ペンキにまみれた侵入犯は久喜さん宅に連れ込まれた。ここに至るまで男は頑として自らの名前を明かそうとしなかったので不確定名侵入者のままである。判明しているのは彼が吸血鬼であることだけだ。

侵入者をバスルームに放り込み、久喜さんはリビングで昼寝をしていた三郎太さんを蹴り起こした。手短に事情を説明する。

シャワーを浴び、ジャージの代わりにサイズの合っていない久喜さんの服を身に着けて出てきた侵入者をひと目見て、三郎太さんは吹き出した。

「これさあ、髪の毛もう駄目でしょ。丸刈りにでもしたらどう？」
お湯とボディースープの力だけでは顔や髪についたペンキをきれいに落とすには足りず、侵入者は未だ複数の色に彩られたままだったのだ。彼はわたしの部屋を出た時からずっと久喜さんの支配下にあるため、けらけら笑われても無反応だった。内心では罵りまくっ

ていることだろう。

侵入者は久喜さんのアトリエに移された。久喜さんがどんな絵を描くのか密かに興味があるのだが、描きかけの絵も壁を埋める棚も白い布に覆われているため、好奇心を満足させることはできなかった。

ある程度ペンキを落とし、マスクを外した状態で見ても、やはり侵入者のものと一致する顔はわたしの記憶の中には存在しない。

「やっぱ全然知らない人だと思うんですけど、あなた本当にわたしの知り合いですか？ ひょっとして整形手術でもしました？」

久喜さんに操られていて自由のない状態なのは承知の上で、わたしは訊ねる。

三郎太さんが服の上からガムテープでぐるぐる巻きにして床に転がし、ようやく侵入者は久喜さんの能力から解放された。その途端に喚きだす。

「クソ、このテープ取れよ、このボケ！ 俺は荷物じゃねえぞ、何してくれんだコラ！」

「……あのさあ兵吾、僕、ちょっとこいつの口と鼻と、ガムテープで塞いじやいたいんだけど」

三郎太さんの呟きに、侵入者はびくりと震えて口を閉ざす。

「やめろ。口を塞いだら尋問にならん」

それ以前の問題として、口と鼻の両方をガムテープで塞ぐのは殺人行為だ。

「そういえば、これは荷物らしいものは持っていなかったな」

久喜さんが独りごちる。たしかに、クローゼットのペンキ缶以外、見慣れない鞆などはわたしの部屋にはなかった。あれだけのペンキ缶を用意してきたのだから移動手段はまず間違いなく車だろうけれど。

「三郎太、これの着ていた服を検めろ」

「ん？ いいけど何を探せばいいわけ？」

「とりあえず鍵だな。あるいは鍵開けの道具。中里さんの部屋に侵

入した手段だ。それから携帯、あとは身分証。もし免許証を持ったまま不法侵入するような阿呆なら身元がわかる」

「そんな間抜け、いるかねえ」

首を傾げながらアトリエを出ていった三郎太さんは、すぐに戻ってきて手に持ったものをわたし達に見せた。

「こいつ間抜けだったわ。財布の中に保険証と運転免許証入ってたよ。携帯とデジカメも発見。あと、これ」

そう言って一本の鍵をわたしの前に差し出した。キーホルダーもキーケースも紐もない、裸のままの鍵だ。

「これ一本だけポケットの中にあっただよね、そのまんまで。ちなみに他の鍵はキーホルダーに通して、さらにファスナーつきのケースに入ってたんだけど。もしかしてそれが香苗ちゃんの部屋の鍵じゃない？」

足元で「何勝手に漁ってんだ泥棒！ プライバシーの侵害だ！

返せよおいコラ」などと己の所業を棚に上げて騒ぐ侵入者は無視して、わたしは三郎太さんからその鍵を受け取り、しげしげと眺めてみた。自分の鍵も取り出し、二本を重ねる。

「……同じです。これ、合鍵だ」

こじ開けたわけではなく合鍵を使ったのだったら、鍵穴に異常がないのも納得だ。しかしどうやって合鍵を手、または作ることができたのだろうか。マンションの入居時に鍵は二本渡されているが、一本はキーホルダーにつけて、もう一本は財布の中に入れて、いつも持ち歩いている。肌身離さずとまではいかないが、それに近い。一応確認したところ、財布の中の鍵はちゃんと無事だった。これをわたしに知られないようにこっそり持ち出し、再びこっそり戻しておくような機会がこの侵入者にあっただとも思えない。

「君さあ、この鍵どうやって手に入れたのか、ちょっと教えてくれないかなあ」

軽い口調で言いながら、三郎太さんは侵入者の左耳を無造作に掴んで引っ張り上げた。見ているだけでも痛そうだ。

「痛っ、痛えだろバカ野郎！　誰が言うかよボケ！　俺をなめんなよクソったれ！」

両目に涙を浮かべながらも、侵入者は口を割ろうとしない。しかしこの男は罵詈雑言で話すことができないのだろうか。アトリエには入れていなくてもひとつ屋根の下に小さな子供がふたりいるというのに、教育に悪い。

「言わないとこっちの耳も引っ張っちゃうよ？」

そして楽しそうに男を脅す三郎太さんの姿も、子供にはあまり見せたくない。

右耳に三郎太さんの手がかかったとき、ついに侵入者が根を上げた。あまり根性はなかったらしい。

「わかった！　言う、言えばいいんだろ、チクショウ！　それは人間使って持ってこさせたんだよ、あのマンション管理してるとこの従業員を俺が操って！　わかったか？　わかったらとっとと手え離せよコラ！」

それを聞いた久喜さんははっと短く笑った。

「嘘だな。貴様ごときの力では、そこいらの人間相手でもせいぜい数秒動きを止めるのがやっとだろう？」

あからさまに見下された侵入者は一瞬顔を歪めたが、しかし猛然と久喜さんに噛みついた。

「んなのやってみなきゃわかんねえだろ、このタコ！」

「やらんでもわかるわ、阿呆」

久喜さんは断言する。三郎太さんがわたしに向かって「対象の自由を奪うだけなら異能持ちの大半ができるんだよ、言ってみりゃ基本能力みたいな感じ。自由を奪って何歩か歩かせる、座らせる、立たせる程度なら、これもまあ割と初歩。だけどねえ、その延長にある相手を思い通りに動かすってのは、これ難易度高いわけ。高い資質があつて、さらに子供の頃から能力を伸ばせるように上手いことやらないと、なかなかそこまでの域には到達できないんだよね」と解説してくれた。解説ついでに自分は優秀なのだと自慢された気がする。とにかく、この侵入者は久喜さんによれば能力の使い方がなっていないそうなので、他人を操り特定の物を持ってきてもらうという高等技は不可能ということだ。

三郎太さんから渡された運転免許証を久喜さんは一瞥した。

「原洋介、歳は二十七か。貴様、人間をやめてまだ日が浅いだろう」
久喜さんの言うように元人間のなりたて吸血鬼だとすれば、実年齢と見た目から推測される年齢に開きがない今は、まさに吸血鬼に変化したばかりだと思われる。しかし免許証の記載をそのまま信じてもいいのだろうか。久喜さん達だって身分証記載の氏名は本名とは異なるのだ。

「貴様に血をやった者はえらく情のない輩のようだな。何を企んでいるのかは知らんが、無力なりたてに厭がらせの実行役を押しつけるとは。彼女、中里香苗の周囲に久喜の者がいるのは承知しているのだろう？ 見つければ最後、貴様程度では逃げきれるものでもなかるうに。つまりは捨て駒だな、憐れなものだ」

その言葉に侵入者、原洋介は気色ばんだ。

「んなことねえ！ 勝手な想像でごちゃごちゃ言ってるじゃねえよ、ボケ！ お嬢様はなあ、俺に色々よくしてくれんだよ。だから俺もお嬢様の役に立ちたくてだな、でなきゃあんな地味な厭がらせなんかすつかよ！ ペンキ臭えしよお」

原の背後に別の人物——多分こちらも吸血鬼——が存在することは彼の言葉で確定した。お嬢様と呼ぶからには若い女性だろうか、実年齢は別として。

しかし地味な厭がらせと実行犯本人は言うが、最初の脅迫状はその通りとしても、今日のあれは被害者、つまりわたしへの精神的及び金銭的ダメージがかなりのものだ。他人にそれだけのダメージを負わせておいて、シンナー臭ぐらいで文句を言わないでもらいたいペンキの使用を選択したのはそちらなのだから。

「——そうだ、犯人はわかったわけだから、損害賠償を要求します。あと、こういう場合って慰謝料は取れると思います？」

ふと思いついて言うと、原は目を剥いて怒鳴った。

「あ？ 俺から金取るってのか？ ふざけんなよ、このボケ女！」「ふざけてません、本気です。ていうか普通はそう思うと思いますけど。慰謝料はともかく、マンションの原状回復費とか使えなくなつたものの処分費とか、あと引越し先の敷金礼金、机とか新しく買い揃えなきゃいけないからその代金と、ええと、他には……」

「洋服とか本なんかもやられたんじゃないの？」

「あ、そうです。バッグや靴も」

こうやって列挙していくと改めてペンキ被害の大きさを実感させられ頭が痛くなる。しかし被害にあった分の弁償を犯人に要求しただけで、どうしてボケ女呼ばわりされなければならないのだ。そう思つて睨めつけければ、原も目を吊り上げて見返してきた。

「自慢じゃねえが俺は金なんか持つてねえんだよ、ドアホ！ 損害賠償だあ？ ない袖は振れんって言葉知らねえのかよ、取れるもんなら取ってみやがれてんだ、ザマアミロ！」

本当にこれっぽっちも自慢にならないことを堂々と言い放ちせ
ら笑う。仕事して稼いで少しずつ支払うという選択肢は、原の中
には存在しないらしい。

「貴様が文無しなら、そのお嬢様とやらに払わせればいい。さあ、
言え。それはどこの誰だ」

居丈高に問い質す久喜さんに、原は口を引き結び黙秘の構えをみ
せた。

「何故中里さんを狙ってあのような真似をした？ 鍵は貴様のお嬢
様が入手したとして、そもそもどうやって彼女の住所を知った」

それにも黙りを通す原の耳を、三郎太さんが再び引つ張った。今
度は両耳を思いきり。

「痛い！ 痛えだろバカ、ちぎれる、やめろ！ やめろって——あ
あチクシヨウ、そのボケ女がム力つくからだよ、文句あつか！」

またしてもボケ女と言われ、わたしはむっとした。この男、ボキ
ヤブラリーに問題があるのではないか。

「文句なんかあるに決まってるでしょう。なんで見ず知らずの人に
一方的にむかつかれなきゃならないんですか！」

理不尽にもほどがある。

「てめえはちよつと前に見た顔も覚えてられねえのかよ、ボケカス
ボケ女！」

「だから見た覚えがそもそもないし！ そこまで言うなら、それは
いつ、どこでのことですか」

「先週だつつの、ボケ！ 夜中に病院行った時、いただろうがて
めえ」

原の言い分は思いも寄らぬもので、わたしを困惑させるには充分
だった。

「え。ええ？ 病院？」

先週、夜中に病院というと、吸血鬼の自主退院というか病院脱走
を支援しに向かう久喜さん達に同行させられた、あの時しかない。

「あの日——こんな人いましたか？」

わたしは思わず久喜さんと三郎太さんに助けを求めた。

「いや、いないから。あの時集まったの、全員よく知ってる連中なの。第一こんなろくに能力も扱えないの、参加させないって」

「そもそも久喜にも庇護下の各家にもこのような男はいない筈だが。身内の者が人間に血を与えれば上に報告が来るから、数日内には把握できる。無論、報告を怠らなければ、だが」

「ですよね、やっぱいませんでしたよね、こんな人」

ふたりが否定するのならやはり記憶違いではない。そう考えてわたしはほっとしたのだが、

「違うっつの！ そっちの集団じゃねえよ！ こいつらが病院でなんかやってる最中、てめえ俺のことずっと見てただろうが！」

泡を飛ばす勢いで言われ、ようやく思い出した。そういえばあの日、道路から病院の様子を窺う妙な人物を目撃していたのだった。

携帯で撮影をしているようにも見えたので、念の為久喜さん達に伝えたほうがいだろうか、とその直後は考えていたのにすっかり忘れてしまっていた。ただ、あの時は暗かったし距離もあったので、相手の顔などさっぱり判別できなかったのだが。

「あれ、あなただったんですか」

「はあ？ 何ぬかしてんだ、てめえ。見りゃあわかんだろうが、ボケナス女！」

いや、わからないって。顔なんて見えていなかったから。あれが原なら、向こうからはこちらの顔が見えていたのだろうか。周囲が暗くて距離があるという条件は同じで、道路からワゴンの後部座席にいたわたしの顔が——ちゃんと見えるか？ そうは思えない。この男、適当なことを言っているのではないだろうか。あの場にいたのは事実だろうけれども。疑いを抱きつつ、わたしは久喜さんと三郎太さんにあの夜のことを説明した。

家宅侵入犯の分際でプライバシーがどうのこうのとうるさい原を黙殺して、わたし達は彼が所持していた携帯電話とデジタルカメラのデータを確認した。電話の発着信履歴やアドレス帳からお嬢様の正体が判るかもしれない。そんな期待もあったのだが、まずはここからと携帯電話の画像フォルダを開いてみたところ、それは特定の特定の人物ばかりを写した写真で埋め尽くされていた。被写体は長身で黒ずくめの成人男性、久喜さんだ。

中にはワゴンの後部シートで眠り込んでいる久喜さんの図、なんでもものもある。先日、水族館に行った時のものだろう。プロパティを見れば案の定、撮影日時は日曜日の午前十一時二十六分とあった。それ以外も、マンションを出入りする久喜さん、買い物をしている久喜さん、車に乗り込む久喜さん、と久喜さん尽くしで、たまに三郎太さんやわたしが同じ写真におさまっている。枚数はそれほど多いわけでもない。一番古い日付の写真がひと月ほど前のものなので、平均すれば一日あたり二枚というところだ。……やっぱり多いかも。

ただ、継続して毎日撮られているわけではなく、日付は飛び飛びになっている。

「そっちはどうですか？」

デジタルカメラをチェックしている三郎太さんの手元を覗き込む。三郎太さんは困惑混じりの曖昧な笑い顔になった。

「なんかねえ、写真も動画も兵吾ばかり。何これ、君って興信所の下働きでもやってんの？」

と、後半は原に向けて言う。

携帯電話には、あの夜の病院で撮られた写真はなかった。デジタルカメラのほうも同じく。しかしそれ以外の写真を見るに、あの場でわたしに気づかれたために撮影を断念しただけではないだろうか。

「こういうのって、なんて言うんだっけ。追っかけ？ ていうかストーリーカー？ よかったねえ兵吾、ここに君のファンがひとりいるみたいよ？」

「誰がなんいけ好かねえ野郎のファンだよ！ ストーカーでもねえからな、犯罪者呼ばわりすんな！ 俺はちよつと写真を撮ってただけなんだよタコ！」

本人はそう主張するが、ストーリーカーを名乗る資格要件は充分満たしているのではないかと思う。深夜の病院や水族館の駐車場にまで久喜さんを追って出没しているわけなのだし。ちなみにストーリーカーが否定されたとしても立派な犯罪者だ、不法侵入や器物損壊で。

「ひよつとして、わたしにむかつくとかなんとかってというのは、久喜さんの周りうちよろしてるから？」

久喜さんのほうがわたしの前に現れたのであつて、断じてわたしが自主的にうるちよろしているわけではないが。

「ああ、ライバル出現とか思っちゃった？」

額を小突く三郎太さんの指に噛みつこうとした原を、久喜さんが軽く蹴飛ばして妨害する。ガムテープでぐるぐる巻きの身のこと、邪魔が入らなくてもあれは無理だっただろう。齒軋りする原を三郎太さんが面白がつてまた小突く。

「ストーリーカー説が違うなら、やつぱ興信所？ でもさあ、兵吾のこゝと調べそうなのって誰かいるかな？ 結婚前の素行調査なら定番だけど、君達の場合、あんまり必要ないよねえ。香苗ちゃんの親戚でそういうことやりそうな人、いたりする？」

三郎太さんの言葉で、ああそういえば結婚なんて話があつたっけ、と思い出してしまった。今週に入ってから原がやらかしてくれたことに気をとられて忘れかけていたのだ。そのまま忘れていたかった。

それはさておき、素行調査ならこんなに写真を撮る必要はないだろう。屋内駐車場に停めた車内で寝こけているものなど、これで何を証明するというのだ。同行者が水族館で魚眺めている時にもひと

に残って昼寝してられる協調性のなさか。

原によって撮られた写真を撮影日時順に見ていつて思ったのだが、久喜さんは基本的に歩かない人らしい。原が久喜さんを撮りだしたのはひと月前からだ、当初は数日おきに二、三枚、食料品を買いに出たところを狙って撮られたと思われるものばかりが続いている。撮影枚数が急増したのはここ一週間で、それと同時に久喜さん以外の人物——つまりわたしや三郎太さんやみずのちゃん、善明君と一緒に写ったものが混じりだす。病院で撮られた写真はなくても、その前後、久喜さんと三郎太さんがふたりでマンションを出る場面、車を路上に停めたままマンションに戻っていく場面、わたし達を連れて再度出てきた場面、そこから少し時間が飛んで三郎太さんに肩を借りた久喜さんがマンションのエントランスに立っている場面、おまけでオートロックの操作をしているわたし、と揃っている。つまり原はマンション付近で張り込み、久喜さんが出てくれば写真におさめ、後を尾行して隙があれば写真を撮り、ということが続けていたらしい。ひと月の間それをひとりやっていたのだとしたら、ご苦労様と言うしかない。

それにしても久喜さんは全然気がついていなかったのか、身辺をうろつく不審者に。水族館で撮られた睡眠中のもの以外は距離を置いて撮影された写真ばかりなので、それも無理はないとは思うのだが、意外と迂闊な人だ。一緒に写っているわたしや三郎太さんも気づかなかったのは同じだけれど。

画像フォルダを閉じて携帯電話の発着信履歴を見ると、ずらり同じ名前で埋め尽くされていた。メールの履歴は、というところからも同様。

見事に並んだ名前を眺め、わたしはぽつり、呟いた。

「——お嬢様の名前、わかつちゃったかも」

三人の視線がわたしに集まる。しばらくおとなしかった原が全身を使って暴れだした。その姿はまるきり海老だ。

わたしは久喜さんと三郎太さんに、原の携帯電話の履歴を見せた。

「発信も着信もずっと同じ相手ばかりで、それにメールで久喜さんの写真を何度も送ってるんですけど、その宛先も同じです。だからお嬢様ってこの人じゃないかな。アドレス帳の登録名、エリザベス様」

多分このエリザベスというのは本名ではないだろうが、電話番号とメールアドレスが判明しただけでも大きく一歩前進だ。

その名前に久喜さんと三郎太さんは揃って反応を示した。それも明らかに厭なことを聞いたというふうな。あいつか、と三郎太さんが苦い声で呟く。

「知っている人なんですか？」

意外に思ってたわたしは訊ねた。まさか本名なのだろうか、エリザベス様。

「いや、うん……。すっごい心当たりあるわ、それ」

そう言う三郎太さんの顔が、心なしか引き攣って見える。

久喜さんがわたしの手から原の携帯電話を取り上げた。アドレス帳を開き、表示されたエリザベス様の電話番号とメールアドレスを手帳の余白に手早く控える。そして見ているわたしが思わずぞくりとする酷薄な表情を原に向けた。

「貴様のお嬢様というのは白峰トミ江か」

それは質問ではなく、単に事実を確認しているだけという口調だった。

白峰という姓は最近聞いたことがある。

「その人、園部……じゃなくて、ええと、柚子先生の親戚ですか？」
元外科医、現在は別の名前で学生をやっている白峰柚子さんを思い浮かべ、わたしは小声で三郎太さんに訊ねた。久喜さんに訊けなかつたのは少々怖かつたからだ、顔が。

「いや、別の家。なんでか知らないけど白峰って家はよつつもあるんだよね。久喜の分家がひとつと、血の繋がりはほとんどないけど久喜の庇護下に入ってるのがみつ。ユズちゃんの白峰は分家で、トミ江はそうじゃないほう」

「分家ではないが、トミ江の祖母は久喜の出だ」

久喜さんが補足する。聞いていて思ったのだが、久喜家は色々ややこしそうだ、親戚付き合いとかの方面で。分家はわかるけど庇

護下の家ってなんだそれ。わたしには関係ないことだし、つつこんで訊く気はないけど。

「それで、なんで白峰さんちのトミ江さんがエリザベス様なんですか」

「自称だ。三十年ほど前に本人が改名を希望したことがあったのだが、それがエリザベスだったので却下された。というかまずトミ江の親が猛反対したので、結局申し出そのものがなかったことになった。ただ、家系図に修正が加えられなかっただけで、本人はそれ以来エリザベスで通している」

「なんかねえ、凄いらしいよ。うっかりトミ江って呼んだらすんごい形相で睨まれるって話。僕は見たことないけど、若い子が結構被害に遭ってるみたい」

なんだか性格に難がある人らしい、エリザベス様は。

と、床から原が声を上げた。

「言つとくけどなあ、俺は知らねえからそんな名前！ お嬢様はエリザベス様だ、白峰なんとかなんかじゃねえ！」

「そりゃあ、噂に聞くトミ江の言動からして、自分から本名名乗らなさそうだしねえ」

三郎太さんが返す。

「君の飼い主がトミ江なら、香苗ちゃんが標的になったのもまあ納得」

「え、なんで？」

素っ頓狂な声が出た。白峰トミ江というのは、全く知らない人なのだが。

「ええとねえ、久喜の中でも上のほうに伊斗様って方がいるんだけど、この人が香苗ちゃんとかの中里さんちの出身なわけね」

それは前に久喜さんからも聞いた。わたしの何代か前の先祖の姉妹だという人だ。

「そんでまあ簡単に説明すると、十何年前だっけ？ 香苗ちゃんが京吾から血を貰うより少し前の筈だけど、正月に身内が集まって

る時にトミ江が揉め事起こしてねえ、そんで大勢の前で伊斗様に説教されたの。説教っていうか、いい歳して何やってんだ呆れてものも言えんわ、みたいな。親のほうは顔面蒼白で平謝りしてたけど、本人は莫迦にされたって思ったみたいよ？　そんで捨て台詞残してそのままどっか行っちゃったわけ。なんでもその後すんごい荒れて周りに当たり散らしてたって話。それ以外でも伊斗様にはちよくよく説教されてるみたいだけど、全然態度改めないしねえ」

「いい歳って、お幾つなんですか、その人」

「今は七十代前半じゃない？」

逆算するとエリザベスと名乗りだしたのが四十代、正月にトラブル起こしたのが五十代前半ということか。たしかにいい歳だ。

しかしそれがどうしてわたしへの厭がらせに結びつくのだろうか。疑問に思うわたしに、三郎太さんは気の毒そうに説明してくれた。

「伊斗様は偉い人なの。偉い人だから恥かかされた恨みがあっても直接どうこうは無理なの。せいぜい陰でこそそ悪口言うぐらい。で、長年に亘って蓄積された鬱憤が香苗ちゃんに向かったんじゃないかなあ、と」

「なんですか、そのしょうもない理由」

「あとねえ、あの子、昔は京吾狙い、今は兵吾狙いだから」

直接的な理由はこっちだろうねえ、と三郎太さんは言う。

わたしは目を何度か瞬かせた。この場合のなんたら狙いというのはあれか、あの人のハートを射止めたいの、というやつか。え、そうなんだ、とわたしは久喜さんに視線を向けた。眉間に盛大に皺が寄っている。

「元々はねえ、また別のを狙ってたんだけど。年齢が僕よりちよい上で、序列では兵吾達と同じくらいのがひとりいて、それが最初の標的ね。でも結局あっさり振られて、相手は人間の恋人を吸血鬼に変えて、その子と結婚しちゃった。その件で新婚夫婦に突っかつていったのが、正月に起こした揉め事ね。で、その人が結婚したもんだから、久喜姓で序列高くてトミ江と同年代か年上かつ独身の男

性つてのはいなくなっちゃったの。それで気を取り直して今度は年下の京吾に目をつけたものの、それが香苗ちゃんとの婚約の後。ライバルは所詮幼児だってんで頑張ったみたいだけど、そもそも京吾にその気がなかったらしくてんで駄目。一方的にライバル視してた幼児もそうこうしてるうちに十代後半なわけで、ついに諦めて次は兵吾に狙いを定めたものの、こちらも全然その気なし。そして最近になって兵吾の結婚式の招待状が送られてきて、相手の名前が中里香苗。だから京吾にも兵吾にも相手にされなかった原因を香苗ちゃんに求めても不思議はないかなあ、と」

え、何それ。そういう理由？ 久喜家に関わるなというのはそういうこと？ そんなので部屋滅茶苦茶にされたのかわたしは。

いや、推測だけどね、推測。多分これで合ってると思うけど。啞然とするわたしから目を逸らし、三郎太さんは独りごちた。

突然、大きな音が鳴り響いた。発信源は久喜さんが手にしていた原の携帯電話で、お寺の鐘の音にしか聞こえないそれは着信音らしい。画面の表示を見た久喜さんは唇を歪めた。

「通話着信だ、エリザベス様とやらからの」

それを聞いて何かを叫びかけた原の、動作と声が不自然に停止した。口を閉ざし、そのまま静かに横になる。久喜さんか三郎太さんか、どちらかが咄嗟に異能を行使したようだ。

久喜さんが通話ボタンを押すや、スピーカーに切り替えるまでもなくはつきり聞き取れる大音量の怒鳴り声が、携帯電話から流れ出てきた。

「ちよっと！　いつまで待たせてんのよ、このグズ！　ほんと使えないわね。どこほつつき歩いてんの！」

少し高めの、可愛らしい声だった。言っている内容と荒い語気で台無しだが。この声の主がエリザベス様こと本名白峰トミ江なのだろう。しかし、原はお嬢様によくしてもらっているなどと主張していたが、本当にそうなのだろうか。結構酷いことを言われている気がするのだが。

「聞いてんの？　ねえ、ちよっと！　なんとか言いなさいよ、洋介！」

「……これだからしょっちゅう誰かと揉めるんだよねえ、トミ江」
三郎太さんが肩を竦め、ぼやく。この態度は親しい相手だからというわけではなく、誰に対してもあまり変わらないらしい。ある意味すごい。

久喜さんが携帯電話を押しつけられ、顰めっ面をしながら三郎太さんはそれに口を寄せた。

「——もしもし？　聞こえてるかな、白峰トミ江ちゃん」

途端、携帯電話から流れ続けていた高い声がぴたりと止まる。

「あんだ、誰」

明らかに警戒している声が、電話の向こうから問う。

「覚えてるかなあ。久喜家の三郎太だけど。横浜の」

「……久喜？」

息を呑む気配がした。次いで、一段高い声でトミ江は捲くし立ててきた。

「それがなんの用なの？　なんであんだが洋介の携帯持ってたの？　なんで！　ていうか洋介の莫迦いつたい何やってんの！　あいつ、いつまで待たせるつもりなのよ！」

喋るにつれて興奮が高まるのか、声が大きく、より早口になっていく。後半はほとんど叫んでいる状態だ。彼女はどこから電話をかけてきたのだろう、とふと思う。まさか公共の場ではないと思っていたい。

「はいはいはい、ちょっと落ち着こうか、トミ江ちゃん」

「そんなダサイ名前前で呼ばないでよ！」

今までで一番激しい声が返ってきた。

「とにかくさあ、怒鳴るのやめてくれないかなあ。耳がおかしくなりそう」

三郎太さんは携帯電話を耳には近づけず、話す時にだけ口を寄せて会話していた。

「あのね、面倒だからずばつと訊いちゃうけど、君、最近思いつきり決まり破ったよねえ？　自分でちゃんと自覚はあるんでしょ」

「は？　何それ。知らないし」

と、刺々しい声。

「具体的に言うと、この携帯を持ってた原洋介っていう、多分吸血鬼になったばつかの子のことなんだけど」

「……誰、それ。知らない」

長い沈黙の果てに、まさかの素っ惚け。ついさつき自分で洋介と呼んでいたのに、それで誤魔化せると本気で思っているのか。

「いや、知らないわけないでしょ。君さあ、この原つてのに血をあ

げたよねえ。それで吸血鬼にしたでしょう。なのになんで何ひとつ報告がないわけ？ あとさ、念の為に訊くけど、まさかこれが初犯じゃないとか言わないだろうね」

「だから知らないし！ 原？ 何よそれ、原洋介なんて全っ然知らない！ どっかの野良吸血鬼じゃないの？ 別に関係ないし。気に入らないなら煮るなり焼くなり好きに処分すればいいじゃない！ 変な言いがかりつけないでよね、本当に知らないんだから！」

久喜家では人間に血を与える場合、事後でもいいのですぐ報告、という決まり事があるらしい。そして白峰トミ江は、原洋介の件でそれを無視してしまった。それが露顕したのだから咎められて焦るというのはわかるが、この稚拙な、言い訳にもなっていない言い訳はないだろう、悪戯が見つかった子供じゃあるまいし。七十年以上生きている人なのに。そして、慕っているお嬢様から野良吸血鬼呼ばわりされた原は憐れである。これ以上ないほどわかりやすく見捨てられてしまった。

「君ね、知らないわけじゃないでしょうに。じゃあ何、君は知らない人の携帯に電話かけてきて、知らない人の名前呼んだわけ？」

「ちよつと間違っただけだし！ 間違い電話くらい誰でもやるでしょ？ 本当は別の人に電話する筈だったの！ とにかく洋介なんて知らないから！ じゃあね！」

その言葉を最後に、トミ江は通話を切ってしまった。三郎太さんがすぐにかけ直すが、繋がらない。

「……どうしよつか、これ」

指先で摘むように持った携帯電話を揺らしながら、三郎太さんは苦笑う。

「どうもこうもない。家に報せる。それからトミ江の両親にも。このなりたての処遇も決めねばならんだろう」

「いい歳した子供の不始末に親呼び出し？ それどうなの。まあ仕方ないけどさあ。——それにしても君、エリザベスお嬢様に捨てられちゃったみたいよ？ 可哀想にねえ、ポチ」

憐れみを含んだ声で言うが、可哀想だと思ふならせめて人間っぽいあだ名をつけてあげてもいいのでは。

お嬢様に捨てられたばかりの原は、気丈にも三郎太さんをきつと見据えた。

「てめえらは知らないだろうけどなあ、お嬢様はそんな冷たい人じやねえんだよ！」

「いや、それ絶対に君、騙されてるから。錯覚。勘違い」

トミ江と知り合ってから年数では圧倒的に勝っている三郎太さんは即座に否定したが、

「そんなことねえよ！俺はお嬢様をよく知ってる！信じてるんだよ、お嬢様が俺を見捨てるわきゃねえ！」

先程の携帯電話越しの遣り取りを全て聞いていて、それでもなおそう言い張れる根拠がなんなのか、そもそも存在するのか否かは不明だが、とにかく原のエリザベスお嬢様に対する信頼は依然として確固たるものだった。

その日の夕食はふたり分多く作ったのだが、せっかく増やした分は食べられることなく余りものとなり、次の日の朝食に回されることとなった。

ひとり分は出張に出ていた三郎太さんの娘婿、みずのちゃんのお父さんが寄るかもしれないと聞かされたためだ。最初から「かもしれない」という話だったので無駄になるのは覚悟の上だったが、来れるかどうか不明だったみずのちゃんのお父さんはちゃんとやって来た。来はしたものの、夕方近くに九州から戻ってきて会社に顔を出し、その後そのまま北海道へ出張という強行軍の途中でなんとか閑を捻出して娘の顔を見に立ち寄っただけで、滞在時間十分ほどでお茶も飲まずに慌ただしく出ていった。見た感じでは気が小さそうで腰が低い子煩悩なおじさんだったが、三郎太さん——正確には以前同じ会社に勤めていたという三郎太さんの娘さんからの情報——によれば、職場では鬼よ悪魔よと囁かれているおっかない中間管理職、らしい。人は見かけに寄らないものだ。

食べられなかったもうひとり分は原のために用意した分で、こちらには彼がハンガーストライキを決め込んだのが理由である。大事なお嬢様と敵対している連中の出したものなんか食えるか、というのが原の言い分だ。万が一このままトミ江からの連絡がなく、迎えにも来てもらえなかったらどうするのか、それでも絶食を続けるのかと質問したところ、「その時はその時で改めて考える」という力強い返事だったので、気にする必要はなさそうだと判断した。案外、明日の朝にはしれっと朝食を要求してきそうだ。

ちなみに食事の支度は昼食以外はわたしが担当している。料理が好きなわけでは決していないが、押しつけられたわけではなく自主的にやっていることだ。他のふたりが炊事を苦手としているというこ

とでもない。ひとり暮らし歴が数十年という久喜さんは、調理器具

こそ最低限しか揃えていないものの、冷蔵庫の中身や調味料、香辛料など明らかに自炊をしていた形跡が見られるし、三郎太さんにしても分量を計って善明君のためにミルクを用意できるのだから、料理もやってやれないことはないだろうと思う。市販の本なりネット上で公開されているものなり適当なレシピを探し、その記述通りの量の材料を記述通りの順番で放り込んでいけば、とりあえず食べられるものにはなるわけだし。

わたしが自分から食事の支度を引き受けているのは、ひとえに料理の中に吸血鬼の血を混入されることを警戒しているからだ。まさかそこまではしないだろうとは思うのだが、久喜さんはないとしても三郎太さんはそういうこともやっちゃいそうな気がしないでもない、なんとなく。たとえ吸血鬼の血が混入されたところで、加熱や他のものと混ぜ合わせることでその効力を失うのではないかと考えたのだが、それとなく確かめようとしたところ久喜さんは「わからない」、三郎太さんは「さあ？」という返答だったため、用心するに越したことはないと考えた次第だ。

原のエリザベスお嬢様こと白峰トミ江は、あの後からずっと携帯電話の電源を切ったままである。久喜さんが彼女の両親に連絡を取って事情を説明したはいいが、両親も現在彼女がどこにいるのかは把握していないらしい。結局、電話をかけ続けて彼女が携帯電話の電源を入れるのを待っている状態だ。

原はお嬢様お嬢様と呼ぶが、トミ江本人もその両親も金持ち、資産持ちというわけではなく、普通に働いて金銭を稼いでいる、吸血鬼であるという一点を除けばまあまあ平均的な家庭なのだという。トミ江は現在戸籍を持たず、したがって就職も就学も公的資格の取得も不可能だ。生まれてこの方、両親の贍をかじるばかりで一度も働いたことがないために身分がなくて困ったという経験も特にないのは、と久喜さんは言うが、昨今は携帯の契約にだって身分証の提示が必要なのに、それで大丈夫なのか。そう思っていたらトミ江が現在使っている携帯電話は原が契約したもので、支払いも原の口

座からというおちだった。お嬢様のためなら当然だ、と原は胸を張るのだが、便利に使われておまけに金も出させられているだけ、有り体に言えば騙されているだけではないのか、これ。

その疑念は、お嬢様の正体がばれたためか若干口が軽くなった原から三郎太さんが聞き出した、いかにしてトミ江と出会い人間から吸血鬼になったか、という思い出話でさらに強くなった。なんでも大学進学のために上京した原は、しかしながらまともに大学に通うことなくふらふらしていたため、単位不足のまま八年経過でついに大学を追い出され、呆れ果てた両親に仕送りを止められてしまった。バイトはどれも長続きせず、一時はこうなったら当たり屋でもしようかなどと真剣に考えるまでに追い詰められていたという。ところがその矢先、当たり前に行くまでもなく原に突っ込んできた自動車が一台あった。その車の運転者がトミ江で、原の負った傷を癒すために自らの血を与えてくれたそう。もともと、話を聞く限りでは原の怪我は命に別状があるようなものではなく、むしろかすり傷と称されるレベルの軽傷だったようなのだが。

というか世間向けの身分を持たない白峰トミ江の場合、当然ながら運転免許証の取得も不可能である。端から見ればそれは、無免許運転で事故を起こした上に巻き込んだ他人に怪我をさせてしまい、慌てて怪我の治療をし、大事にはならなかったのだからと事故そのものをなかったことにしてもらった、ということではなからうか。原はお嬢様に助けられたと感謝しているようだが、事故を起こした加害者が被害者を助けるのは当たり前だし。しかもその後は携帯料金たかられているし。そのあたり、この男は今まで疑問に思わなかったのだらうか。ただ、原と出会ってから彼は彼を運転手としてこき使い、トミ江が自分で車を運転することはなくなったらしいので、社会のためにはそれでいいのかもしれない。

しかしながら、原がこのままエリザベスお嬢様の僕であり続けるのは不可能らしい。人間から吸血鬼に変化した者は、通常であれば血を与えた吸血鬼の家族——多くの場合は養子、たまに伴侶——と

して迎え入れられて家系図に追加されるが、原についてはほぼ確実にトミ江ではなくその両親、あるいはそれ以外の吸血鬼の預かりになるそうだ。無免許での運転で事故を起こしたこと、人間に血を与えておきながら報告を怠った件、加えてわたしに対するあれこれと、複数の問題を起こした以上、トミ江本人もしばらくは謹慎を申し渡されるだろうと久喜さんは言った。

次の日、わたしは大学の帰りに自分の部屋へ寄った。

毎日迎えに来てくれていた久喜さんだが、用事ができたので無理だと携帯電話にメールが入っていたので、今日はわたしひとりだ。

滅茶滅茶になった部屋の原状回復にかかる費用や引っ越し、物の処分、買い換え代は、久喜さんが責任を持ってトミ江と原のふたりから出させると請け負ってくれた。あのふたりはお金持っていないさそうなので実際にはトミ江の両親に請求がいくのではないかと推測しているが、とりあえず支払ってもらえるならどちらでもいい。当面の必要分は久喜さんが立て替えてくれるというので、ひとまずは安心して引っ越し先を探せる。

マンションの管理会社から苦情の電話がかかってくるのではないかと昨日から戦々恐々としているのだが、今のところそれはない。なのでこちらから連絡しなければならぬのだが、部屋の中の惨状をいっただいどう伝えればいいものか悩んでいる。いっそのことも久喜さんに頼んでしまいたい。身内の人がやらかした結果なわけだし、引き受けてくれないだろうか。

昨日は全部確認せずに引き上げてしまったが、収納や机の引き出しの中身くらいは無事なものがあるだろうと期待していた。しかし、三十分後には失意のため息とともに部屋を後にすることとなった。ペンキが乾いて固まり、引き出しを開けるのもひと苦労だった上、中にもしっかりとペンキが流し込まれていたのだ。無事なものなどあるわけではない。

母親や祖父母の形見、それ以外でも思い入れのあるものは全て実家に置いてきているので、今回の被害は免れているというのが一応の救いだろうか。前日にデスクトップPCを持ち出したのは正解だった。もう少し頑張って他のものも運んでおけば、とつい考えてしまいが、今更嘆いてもどうにもならない。

朝の経路を逆に辿り、途中で食料品を買い込んで久喜さんのマンションに戻る。

マンションの前まで来たところで、善明君をおんぶしてみずのちゃんの手を引いた三郎太さんとばったり会った。「香苗ちゃん、おかえり!」とみずのちゃんが飛びついてくる。お互い自分の家ではないのにおかえり、ただいまというのもなんだかなあと思わなくもないが、他に適当な言葉も思いつかない。

「あら。香苗ちゃん、帰ってきちゃったんだ」

困ったような微妙な笑顔の三郎太さんに言われた。

「あららって、ほとんど予定通りの時間ですけど」

帰ってきて何かまずかったのだろうか。

「あのねえ、今」

「エリザベスがいるの!」

少し舌つ足らずな発音でエイジャベスなんてふうに聞こえたが、みずのちゃんの言葉で事情はわかった。

「来てるんですか、エリザベス様。原さんを迎えに?」

「いや、あの子は昼前によそに引き取ってもらったから。トミ江が来たのは兵吾に直談判するためでしょ。親や偉い人達に怒られるから取りなして、みたいな。兵吾もあれ、偉い人のうちなんだけどねえ、一応。あと、そのついでに結婚しないで、っていうのも。ていうか彼女のにはこっちが本題?」

それは、わたしがのこのこ入っていかないほうがいいということだろうか。そうなんだろうな、やっぱり。しかし、

「……生ものも冷凍ものもあるんで、戻らないわけにもいかないんです」

わたしは手にした買い物袋を掲げてみせた。店からはそう距離がないので、買い物袋の中にはドライアイスも氷も入っていない。

まあ兵吾がいるわけだし、何かされることはないでしょ、という三郎太さんに見送られ、わたしはマンションのエントランスを通った。そういう言い方をされると逆に怖くなるのだが。ならば久喜さ

んがいなければ何かされる可能性が大ということか。実際に部屋は滅茶苦茶に荒らされたが、しかしあれの実行犯はトミ江本人ではなかった。

白峰トミ江というのはどんな人なのだろう。目的の階でエレベーターを降りながらそんなことをふと考えた直後、耳の横を何かが掠めた。え、と思う間もなく、背後で物が割れる大きな音がした。

振り返ると、エレベーターの床に砕けた焼き物が散らばっている。色に覚えがあるそれは、各戸の玄関脇に飾られたフラワーアレンジメントに使われている花瓶のなれの果てだ。先週初めてこのマンションに足を踏み入れた時に使われていたのは籐籠だが、おととい帰ってきた時には渋い色のどっしりした花瓶になっていた。破片と一緒にに散らばっているのは小さな白い花をつけた枝で、これが久喜さん宅のアレンジメントだとわかった。

フラワーアレンジメントの残骸を乗せたまま閉まりかかるエレベーターのドアを慌てて押さえて、わたしは花瓶が飛んできた方へ顔へ向き直った。

久喜さんの部屋の前に、小柄な女性が立っている。花瓶を投げたままの姿勢で、肩で息をしながら。

ゆるいウェーブがかかった長い栗色の髪に、全体的にふわふわした印象の淡いピンクのワンピースを着て、女性というより女の子といった感じだ。わたしと同じぐらいの歳に見える。今は興奮のため目がぎらぎらしているが、普通にしていればお人形みたいと言われるような可愛らしい女の子だ、きっと。

今ここにいて、わたしへの敵意を露わにしている以上、彼女が白峰トミ江なのだろう。まさか花瓶持って待ち構えていたとは思わないが、三郎太さんの話だと来たばかりなので当分帰らないだろうということだったのに、それがどうして廊下にいるのだ。

玄関のドアが開き、久喜さんが顔を出した。

「いい加減にしないか、いつまでそうやって——」

言いかけたところでわたしに気づき、眉を顰める。

これはつまり、早々に追い出されたトミ江が暴れ、花瓶を床に叩きつけかけたところでたまたまわたしがエレベーターから降りてきたとか、そういうことだろうか。

どうやらわたしは最悪のタイミングで帰ってきてしまったらしい。こんなことならもう少しだけ時間を潰していればよかった。

己の間の悪さを嘆くわたしに向かい、トミ江は指を突きつけた。

長めに整えた爪は手間のかかりそうなネイルアートで飾られている。

「あんたねえ、なんで避けるのよ！」

せっかく投げたのに！　と言わんばかりの苛立ち露わな声で文句をつけるが、普通は自分を目がけて何かが飛んでくれば避けるだろう、反射的に。もっとも、さっきのわたしの場合、避けたのではなくて向こうが勝手に的を外しただけだ。

しかしもしかしくなくても今のはかなり危なかったのか、自分。あと一歩横にずれた位置にいたなら間違いなく顔面か前頭部に花瓶の直撃を受けていた。遅ればせながらそれに気づき血の気が引いた。たかが花瓶、されど花瓶、投げたのがあまり力のなさそうな女性であつてもまともに食らえば大怪我していたかもしれない。そんなものを他人に向かって無言で投げるなど言いたい。何か宣言してからならいいというものでもないが。初対面の挨拶としては物騒すぎる。トミ江は視線を巡らせ、何かを探している様子だった。すぐに、久喜さん宅の斜向かいの玄関脇にあるアレンジメントに目を留める。植物は一見して異なるが、それが生けられている花瓶はよく似ている品だ。——って、まさか今度はそれを投げる気か？

「やめんか！」

やはりトミ江の意図を察した久喜さんが一喝する。トミ江は一瞬わたしを睨みつけ、そして拗ねた表情で久喜さんに向き直った。

「でも、兵吾様！」

「私は貴様にさっさと帰れと言った筈だが」

「だって、それは——」

……なんだかとても厄介な場面に自分から突っ込んでしまった気がする。考えてみれば表面上は、親族によって勝手に決められ婚約関係にある男女と、その男性に惹かれている女性という顔触れにな

るわけだ、ここにいる三人。うわ、面倒。今からでも回れ右してこの場を去ってはいけなйдろうか。

「久喜さん、箒なんてありますか？　この床、なんとかしないと」エレベーターの床は割れた花瓶と木の枝や小さな花が散らばっているし、見れば元々花瓶が飾られていた花台のすぐ傍に水溜まりができています。投げつける前に花瓶の水を捨てたのだろ。これをそのままにしておくわけにもいかない。

ところでこのエレベーターの監視カメラが撮っている映像は、リアルタイムでチェックしている人がいるのだろうか。少し気になる。「無視する気？　いい度胸じゃない。あんた、いったい何様よ！」つかつかと距離を縮めてきたトミ江が、怒声とともに掴みかかってくるのにわたしは戸惑った。無視なんかしていない、というかついさつき自分に花瓶を投げつけてきた相手など、しようと思ってもそう簡単に無視できるものではない。

小柄だとは思ったが、トミ江の頭はわたしの鎖骨より下あたりだった。わたしにはヒールで五センチほど上乘せがあることを考えると、百四十センチ代の半ばほどだろうか。なので近くに来られればどうしても見下ろすことになるのだが、それがお気に召さなかったようだ、エリザベスお嬢様は。

「ちよつと！　そうやって人のこと見下すの、やめてくれない？　生意気なのよ。相手に目線合わせるくらいの知恵もないわけ？」

……どうしろと。

久喜さんがトミ江の肩に手をかけ、わたしから強引に引き剥がした。長い爪を装備した手で掴まれていた二の腕には、しっかり爪跡が残る。

「トミ江のことは無視しろ、単なる子供の八つ当たりだ」

この人の年齢はたしか、わたし（十九歳）と久喜さん（五十一歳）の歳を足したよりも上ではなかったか。吸血鬼的には五十代と七十代の差はないも同然なのだろうか。

「無視？　無視なんてさせないんだから！　あんたとは一度、ちゃ

あんと話をしたかったのよ！」

身体を振り久喜さんの手から逃れ、トミ江が叫ぶ。

わたしには特に話したいことは——いや、彼女に指示された原によつて部屋をペンキまみれにされた件については色々と言いたいのだが、こういう最初から喧嘩腰の人と普通のお話し合いができる気はあまりしない。というか苦手かも、こういうタイプ。

エレベーターはこの一基だけではないとはいえ、いつまでもこの階に止めておくとか他の住人の迷惑になりそうなので、床の片づけだけ先にさせてくれないだろうか。散らかした本人を見ながら思う。なんでわたしが片づけなきゃならないんだという話だが、この人は片づけなんかやりそうにない。

しかし花瓶の残骸などトミ江の目には入っていないようだった。

「中里香苗、あんた兵吾様とは別れなさい。すっぱり別れなさい。縁を切るの。兵吾様とあんたじゃ釣り合わないの。わかるでしょ！」

潔く単刀直入。

別れるも何もというか、婚約だのなんだのがなしになるならむしろ嬉しいわけだが、わたしとしては。だからといってトミ江の言いなりになるのも問題があるような。

久喜さんが結婚自体を敬遠している人ではなく、トミ江がもう少し普通の性格をした子なら、熨斗つけてご祝儀つけて差し上げますと言っているところなのだが。残念である、色々と。

「兵吾様はわたしと結婚するのよ。だってわたしのほうがあんなにかよりずっと兵吾様に相応しいんだから！」

ええと、将来は知らないけれど今のところ久喜さんはこれっぽっちも結婚する気はなさそうなんです。まあ、吸血鬼は吸血鬼同士という意味では、わたしよりトミ江のほうが相応しいという部分には納得しなくもない。

それはそれとして、いい加減エレベーターから出たいのだが。買ってきた食料品を冷蔵庫に入れないといけないし。

廊下でぎゃあぎゃあ騒いでいるのを聞きつけた住人の誰かが報せたのか、あるいは本当に監視カメラの映像をリアルタイムでチェックしている人間がいるのか、警備員がやって来たことでトミ江は口を噤んだ。最後にもう一度わたしを睨めつけると、身を翻して久喜さん宅に駆け込んでいってしまう。久喜さんは忌々しげに舌打ちした。

わたしが帰ってくるより前にふたりの間でどのような遣り取りがあったかはわからないが、どうも久喜さんがトミ江を締め出したらしいので、つまりはこれで振り出しに戻ってしまったのだと思われる。しかし締め出したはいいがトミ江のあの様子では、わたしとばったり顔を合わせることがなかったとしても破壊行為に及んでいたのではないだろうか。久喜さんは結構面倒くさがりな傾向があるが、だからといってそんな状態の子を野放しにするのはどうなのか。子、なんて年齢の人ではないけど。

箒はなかったので、古雑誌を箒と塵取り代わりにして床をざつと片づける。そうしながら聞いていると、久喜さんは警備員の人達に「遊びに来ていた従姉妹が姉妹喧嘩をして」などと苦しい弁明を試みていた。わたしとトミ江ではどこからどう見ても赤の他人、血が繋がっているふうには見えない。

世の中きょうだいで全然似ていない人間は多いということに納得したのかどうか、警備員はすぐに引き上げていった。癪癪を起こして花瓶をぶん投げた者がいても、それ以上にエスカレートして暴力沙汰に至らないのなら、彼らの職分としては問題なしなのだろう。

トミ江が捨てた花瓶の水でできた水溜まりの後始末は久喜さんに押しつけ、わたしは玄関のドアを開けた。入ってすぐのところに置きっ放しにしていた荷物と買い物袋を持ち、奥に向かう。食料品を冷蔵庫と冷凍庫におさめてひと息ついた時、後ろから声をかけられ

た。

「——ちよつと」

トミ江だ。腰に手を当て、偉そうに命令する。

「わたしはお客様なのよ、飲み物くらい出しなさい。気が利かないわね」

自分で自分をお客様とか言うな。わたしはつい鬱陶しげな目で彼女を見返した。それがトミ江の反発を煽つたらしく、「何？ 文句でもあるわけ？」ときつい声で咎められる。

文句というか、家主の久喜さんが明らかに追い出したがっている人をお客様扱いしていいものか。それにわたし個人のことを言えば部屋を荒らされた恨みだつてあるのだが、そのへんを理解しているのか、このお嬢様は。

「紅茶がいいわね。アールグレイ」

平然と注文をつけるあたり、あまり考えてなさそうだ。

「すみませんけど、紅茶はないです」

「はあ？ なんでよ、信じらんない！ ほんと、気が利かない子」

ちなみにわたしには一切関係なく、最初からここにはコーヒーと緑茶は複数の銘柄が用意されていても、紅茶は存在していなかった。試供品のティーバッグが一杯分だけあったが、それは既に三郎太さんが飲んでしまったし。久喜さんは勿論のこと、三郎太さんもわたしも紅茶がなければ生きられない人種というわけでもないのだから、わざわざ購入する必要も感じなかったのだ。

「……コーヒーか緑茶なら色々ありますけど」

「それじゃあブルーマウンテン」

この人、適当に高そうなのを口にしていただけじゃないのか。しかも面倒なものを。ブルーマウンテンもあるにはあるが、粉のものではなく豆で、そしてここには手動のコーヒーミルしかないのだ。久喜さんや三郎太さんは苦もなく豆を砕くが、慣れてないせいか力の問題か、わたしはあれがあまり得意でない。トミ江がそこまで把握して言っているとは思わないが。

どうしたものかと思案しているところに久喜さんが来た。

「それには何も出さなくていいし、相手をする必要もないから」
キッチンで向かい合っているわたし達を見るや、そう言う。

「どうして？ わたし、喉が渴いてるのよ。それで何か貰おうと思
つて。それぐらいいいでしょ？」

露骨というほどではないが、久喜さんに対する時は声の調子が変わっている。そりゃあ、気に入らない相手に対峙している時と恋している——かどうかは三郎太さんによれば怪しいらしいが——殿方と話す時とは態度も声音も変わって当然だが、それを目の前で見せられると鼻白んでしまう。

久喜さんはコップに水道の水を注ぎ、それをトミ江に突き出した。
この人はこの人でわかりやすく扱いが酷い。

「飲んだらさつさとここを出て、両親のところへ帰れ」

「厭よ！ 冗談じゃないわ、あんな煩い人達のところなんて。——
そうだわ、兵吾様、わたしもここに置いてちょうだい。この女を住
まわせているくらいだもの、いいでしょう？」

内心、げつ、と呻いた。この女と同居とか、多分わたしには無理だ。あと、わたしは一時的に泊まっているだけで、住んでいるわけではない。

幸いなことに久喜さんはトミ江の願いを一蹴した。

「断る。貴様に両親の元へ帰れというのは、久喜の家からの命令だ」

「酷い！ そんなこと言わないで。ねえ、わたし聞いたのよ。兵吾
様、この女とは上手くいつてないんでしょう？ だったら結婚なん
てすることないわ。でしょ？」

そういえば、複数の吸血鬼が集まっている場で結婚拒否宣言した
ことがあった。それをどこから聞いたのだろう。しかしなんだか
話が噛み合っていないのは、わざとなのだろうか。本当に、相手に
するには面倒そうな人だ。

「帰れと言っている。命令に従え」

「厭！ だって今帰ったら閉じ込められちゃうじゃない。兵吾様、

わたしを助けると思つて——」

話が堂々巡りモードに入りそうだったので、今のうちにさつさと逃げてしまおうとわたしは数歩後退つた——ところでトミ江にぎろりと睨まれた。怖い。可愛らしい顔立ちの子なのに、凄く怖い。

蛇に睨まれた蛙よろしく立ち竦んだわたしの腕に、トミ江が抱きついてきた。

「どこへ行くの？　ねえ、さっきも言つたけどわたし、あなたとは色々話をしたかつたのよ」

絶対に逃がさないと言わんばかりに、トミ江はわたしの腕を掴んだ指に力を込めてきた。

「中里香苗、あなた、兵吾様との結婚には乗り気じゃないんでしょう？　だったら兵吾様のことはわたしに譲って」

ついさっきは相応しいの相応しくないのと言っておいて、今度は譲ってくれときた。こっちの婚約がめでたく白紙撤回されたとしても、そっちと上手くいくとは限らないのだけど。そうなったらなたで今度は久喜さんが過去に断りまくったという見合い話が復活するだけではなかるうか。

「ていうか兵吾様になんの不満があるわけ？　あなた我が儘だわ！」
本気でこの人の相手するの面倒だ。

不満というと、何が嬉しくて親族の勝手な決定で会ったこともなかった相手と結婚しなければならぬのだ、というのが第一である。しかもよりにもよって結婚する気が欠片もない人だし。そのことは結果的にはやはり結婚したくないわたしにとって好都合ではあったのだが、結婚相手を斡旋するなら当事者の意向くらい確認しておけと言いたい。どうしても早急に結婚はしたいが他に選択肢がない、という状況ならまだしも、なんでこの歳で人生決められなきゃならないのだというのもある。それらに加えて、何かの間違いで結婚してしまった日には、最低でも旧家の長男に嫁入りするのと同程度の苦労が降りかかってきそうな予感がする、なんとなく。

久喜さん個人については、別の出会い方をしていれば憧れの人あたりにはなっただんじやないかなあと思わなくもない。素の状態で不機嫌そうに見え、表情から何を考えているのか読みにくいのが難点だが、顔自体は整っているほうだし、これだけ身長ある人なら「踵の高い靴履いて横に並ぶな！」などと言われることはないだろうし。黒ずくめの服装はいただけないけれど。ちなみに年齢がひと回り以上離れている相手は言い方は悪いが個人的には範疇外なので、もし違う場所で違う出会いをしていたとしても、その場合は単に眺めて

いるだけになると思われる。

……なんてことを正直に話すとさらにヒートアップされそうなので、久喜さんには悪いが丸投げしてしまうことにした。

「わたしより久喜さん、ええと、兵吾さんの意見を伺ったほうが早いんじゃない？」

なんとなく久喜さん久喜さんと呼んでいたが、久喜さんでは個人の特定ができないということに今頃思い至ってしまった。三郎太さんや善明君も久喜さんだ。だからといって今から呼び方を改めるのも難しそうだ。

トミ江はわたしの腕を両手でしっかりと抱え込んだまま離さない。その状態で久喜さんの方に顔だけを向ける。

久喜さんは大きなため息をついた。

「駄々をこねるのも大概にしておけ、トミ江」

「その名前で呼ばないで！」

悲鳴じみた声でトミ江が叫ぶ。

「駄々なんかこねてないでしょ！ わたしは兵吾様を愛しているのに、どうしてわかってくれないの？ 酷いわ！」

臆面もなく愛してるなどと言ってしまうところは素直にすごいと思う。なんだか嘘くさいというかお芝居めいて聞こえるが、それはトミ江に対する先入観のせいかもしれない。しかしこのふたり、ずっと「愛してる」「親元に帰れ」の遣り取りを繰り返していたのだろうか。

トミ江は掴んだままのわたしの腕を揺さぶった。

「わたしのほうがずっと兵吾様のことを好きなの。だからあなたは身を引くの！ それが当然でしょ？ そうでしょ？」

「いい加減にしろ！ くだらないことで問題ばかり引き起こしておいて、まず言うことがそれか？ このところ警戒態勢にあることぐらいわかっていただろくに、紛らわしい」

必死という形相でわたしに訴えるトミ江に、吐き捨てるように久喜さんは言う。

——後から聞いたところによれば、ここ最近、久喜家に関係する吸血鬼が事故に遭うということが続き、ただの不運な偶然かもしれないが以前から揉めている他家からの攻撃を受けている可能性もある、ということだ。久喜家全体が一時警戒態勢に入っていたそうだ。

わたしが久喜さん宅に強制的に泊まらされたのもその一環で、万が一襲撃ならば半吸血鬼でも危険がないわけではないので、念の為に近場にいる中で一番異能の強い吸血鬼のところに身を寄せたかどうか？　ということだったらしい。それだけが理由じゃないような気がする。すぐくすくすするけれど。

トミ江が原に命じてわたしの部屋を荒らした件も、やり口からしてまず違っただろうと予想はしながらも、万が一の可能性を考慮しないわけにはいかなかったそうだ。しかし実際の犯人はなりたて吸血鬼の原で、その原を使っていたのは久喜の身内であるトミ江だったと。

してみると夜中に外出する際にわたしやみずのちゃん、善明君を伴ったのも、何者かを警戒していたためということだろうか。そこまで心配するような状態なら、わたしにもちゃんと最初から話しておいてほしかったのだが、何故そういう必要な手順を飛ばすのだろうか。

とにかくそういう事情もあって、久喜さんのトミ江に対する印象は、元々決してよくなかったものがさらに急激に悪化したらしい。

インターホンが鳴り、トミ江の力が僅かに緩んだ。その隙にわたしは腕をトミ江の手から少々強引に引き抜いた。爪の食い込んだ痕が目立つが、痛みはするものの傷にはなっていないのでまあよしとする。

インターホンを鳴らしたのは三郎太さんだった。合鍵は持っているしオートロックの暗証番号も知っているのに、と不思議に思うわたしに、三郎太さんは「トミ江はまだいる？」と訊いてきた。

「ええ、いますけど」

「あ、そう。今ねえ、そこでトミ江の両親と白峰さんちのまとめ役

に会ったんだわ。なんかトミ江の立ち寄りそうな場所巡りしてたみたいでさあ。これから回収に行くから、逃げられないようにしないと」

白峰家の人達はトミ江が自主的に実家に戻るのを待つのではなく、強引に連れ戻す必要ありと判断したようだ。

インターホンでの遣り取りは久喜さんやトミ江には聞こえていない筈なので、わたしはそれから三郎太さんがやって来るまでの数分間、特に何もせず黙ってればいいだけだった。

三郎太さんが案内してきたのは見た目二十代後半の男女がひとりずつと、六十は越えていそうな男性だった。若い男女がトミ江の両親、もうひとりの男性は白峰家の中では最年長の人で、再老化が始まってから数十年のご老体なのだそうだ。

わたしはみずのちゃんと善明君を預けられて和室へ追いやられたので聞こえてくる物音や声から窺うしかなかったが、トミ江の抵抗は相当のものだった。罵声、悲鳴、何かが割れる音、と派手に響いてきて、今度は戸内で何か起きていると警察に通報されるのでは、などと心配になるほどだ。

トミ江と彼女の両親や老吸血鬼、それに久喜さん達の遣り取りを聞くに、トミ江はここに至ってもなお原との関わりを全否定しているようだ。原のほうは認めてしまっているし、携帯電話の履歴でも明らかにになっているので、いくら言い張ったところで到底通りそうにはないのだが、トミ江は頑として認めようとはしない。それは取りも直さずわたしに宛てた脅迫状や部屋荒らしへの関与を否定するということだ。

お嬢様をお願いだか命令だけに忠実に従っただけと思われるのに、全部まとめて押しつけられてしまった原が不憫でならない。同情する気にはやはりなれないけれども。しかし原はトミ江のどこに慕うに値するものを見出だしたのか、謎である。

白峰さんちの人々を中心とした罵声と怒号が飛び交うお話し合いは小一時間ほども続き、結局ご両親とご老体が異能を駆使してトミ江を抑えつけ強制的に家まで連行するという手段を取ることとなった。つまり話し合いの意味はなかった。

一瞬、両親の能力を振りきったトミ江が、別室のわたしに向かい「覚えてなさい、絶対にこのままじゃすまさないから！ だいたいあんたは顔からして気に入らないのよ、あのクソ婆にそっくりで！」

と叫んだことで、白峰家の人達だけでは道中トミ江を抑えきれるか不安だと久喜さんも彼らに同行し、その日は遅くまで帰らなかった。トミ江がわたしとそっくりだと言ったのはおそらく伊斗さんのことだろうが、そんなに似ているのかと思って訊ねてみれば、三郎太さんは首を捻った。

「どうだろ。顔のパーツは似てる、かなあ？ ううん、似てると言われれば似てるような、そうでもないような？ どっちにしろ印象は全然違うと思うけど、なんなら今度並んで写真でも撮ってみる？」とのことなので、見れば親族とわかるほど似ているというわけでもなさそうだ。

吸血鬼達の話し合いの跡、というよりもトミ江が暴れた跡の片づけはわたしがやる破目になった。他に誰もいないのだ、三郎太さんは「善明の様子見てこなきゃ」と逃亡したし。乳児の世話は大事だけど。

わたしはトミ江に迷惑をかけられた被害者なのに、その上今日は彼女の後片づけばかりしている。ちょっと納得がいかない。一回ぐらい引っ叩いておけばよかった。

なんにせよ、これ以上トミ江と原から何かされる心配はなくなり一応は一件落着、の筈だったのだが。

異変が起きたのはその夜、日付は変わり午前一時も近い頃だった。既に横になってうとうととしていたわたしは、携帯電話のバイブレーションに気づいて目を開けた。

夜中であつてもおかまいなしで携帯宛てにメールを送りつけてくる知り合いは何人かいる。これもそうだろうと思いつながら、手を伸ばして携帯電話を取り、画面を確認した。

見覚えのないメールアドレス、件名はなし。

怪しい。メールを開かずこのまま削除してしまおうかと思った時、再び携帯電話が震えて新たなメールの着信を報せた。先程のものと同じアドレスからで、件名は空白だ。

なんだろう、これ。画面の表示を眺めながらぼんやり考えている

と、またバイブレーションが作動する。隣の布団に寝ているみずのちゃんが身動く気配に、わたしは携帯電話を持って廊下へ出た。

その途端、メールの着信。さらに、もう一通。

意を決して最新のメールを開き、わたしは脱力した。そこには「バーカ!」とだけある。他のメールはというと、どれも似たり寄ったりだった。「泥棒猫!」「不細工」「死んじゃえ!」「バーカバーカ!」。なんという幼稚な文面だ。

そうしているうちにも新しいメールがどんどん着信する。

脳裏を過ぎったのは家に連れ戻されたばかりのトミ江だ。彼女なら子供の口喧嘩レベルのメールを送りつけてきてもおかしくない。

携帯電話の電源を切ることでその時は凌ぎ、翌朝わたしは久喜さんと三郎太さんに相談した。

メールは数時間に亘って送り続けられたらしく、携帯電話の電源を入れた直後から大量のメール着信にげんりとなった。何通かは開いてみたが、中身はどれもこれもひと言だけだ。

久喜さんはすぐにトミ江の実家に連絡を入れた。そしてわかったのは、トミ江は家に強制帰宅させられたものの、早々に逃げ出してしまったということだった。

「トミ江のこの白峰さんちはお年寄りが多いけど、若い子はトミ江だけなんだよね。特にトミ江の母親にとつては死産数回の後によくやく授かった可愛い可愛いひとり娘だから」

まあ甘くなるのもわかるけどさあ、と三郎太さんは頭を掻く。家族総出で甘やかして育てた結果があれか。

「しかし、何故トミ江が中里さんのアドレスを知っていたんだ?」

という久喜さんの疑問には、心当たりがあった。

わたしは、多少は迷惑メール避けになるかと、携帯のメールアドレスをアルファベットと数字が不規則に入り交じった長つたらしいものになっている。適当にボタンを押して作った文字列なので自分でも暗記することができず、付箋にメモしたものを部屋の机の上にぺたりと貼っていたのだ。わざわざ「携帯メルアド・自分」なんて注

釈をつけて。

思うに、水曜日に初めてわたしの部屋に侵入した際、原がその付箋に気づいて持ち帰り、トミ江に渡したのではないだろうか。ならば説明がつく。

そのことを打ち明けたところ、久喜さんは「迂闊だな」とため息つきで評してくれた。

たしかにあれば失敗だったと思うが、迂闊というならあっさりトミ江に逃げられたそっちはどうなのだ。

数日後、白峰家とは別の家に預けられていた原も姿を消したことを、わたしは久喜さんから知らされた。

前期末試験もその期間の半分が過ぎた昼下がり、わたしは大学の正門前にある不動産屋の前で悩んでいた。

試験期間はまだ半ばだが、わたしが受けるべき試験は何者かの陰謀が厭がらせかと叫びたくなるほど日程の前半に集中していたので残すところはあとみつ。この後と明日の午前、午後に一教科ずつでわたしにとっての試験期間は終了となる。残っているのは教科書持ち込み可、自筆ノートの持ち込みも可という難易度低めのものばかりなので、気分的にはもう終了したも同然だ。

そうなると試験を理由に一時保留としていた問題、すなわち引越し先探しに思考が向かう。

わたしにはさっぱり関係のないところで話がつくか疑惑が消えたかしたらしく、久喜家に縁があるからという理由で仲のよくないう他家から危害を加えられる心配は今のところなくなった、と聞かされたのは先週のことだ。その時点で、久喜さんが自宅マンションにわたしを泊まらせておくことの、当初の理由はなくなった。

しかし困ったことに、わたしが元々住んでいた賃貸マンションの一室はあんなことになってしまったため、現在わたしには住むところがない。

加えて、実家からまんまと逃げおおせたトミ江と、こちらも行方をくらませた原のことがある。

トミ江からのものと思しきメールは、未だに続いていた。数時間着信が続き、一時間ほど休憩、そしてまた数時間という具合だ。不規則に七、八時間ほど空くのが睡眠に当てている時間なのだろう。送信側のメールアドレスは日替わりどころかほとんど時間替わりの勢いでころころ変わるため、いちいち着信拒否リストに登録するのも億劫になり、今は許可リストを作成して、そこにはないアドレスからのメールは全拒否設定にしている。多少の巻き添えは仕方がない

と割りきった。

これでメール問題は解決か、と一度は思ったのだが、二、三日前からパソコン用のメールアドレスにも同様のメールが届きだした。携帯電話のほうのアドレスを知られたことについてはわたしに落ち度があった。それはわかつている。しかしパソコンのメールアドレスがどうやってトミ江の知るところとなったのか、こちらは心当たりがない。メールマガジンを購読している企業から、などということとはまずないだろうが、それ以外の可能性となると家族、友人、残るは大学関係といったところだろうか。しかし、携帯メールとは違って、こちらのアドレスは必要最低限の人間にしか教えていないのだが。

パソコン用のメールアドレスに送りつけられてくるメールも件名が空白のものばかりだったため、件名未入力 of メールは自動的に振り分けられる設定にしたことで一応の平穩は取り戻せたものの、それ以上にできることがない。普通ならば大量のメールをコピーし、それを持参して警察へ相談に、というのが常道なのだろうが、今回の場合、メールを送っている犯人は吸血鬼だ。いや、人外であることそのものが問題なのではない。トミ江は公的な記録が一切ない、書類上は存在していない人なのだ。そのため、他の吸血鬼を巻き込む可能性なんてものを考えるまでもなく、警察に駆け込むことは躊躇われる。メール攻撃を続けている相手の見当はついていますが、となれば次は当然相手の名前や自分との関係を訊ねられるに決まっている。ボロを出さずにそこを乗りきれる自信はない。

着の身着のまま家出したトミ江と金目の物は持ち出せなかった原のふたりが、どうやって日々を過ごし、かつ大量の、携帯キャリアからして様々なメールアドレスを駆使できる環境を手にしたかという、やはり吸血鬼の持つ異能を便利に使って手っ取り早く犯罪行為を繰り返しているのだろうということであつたと久喜さん達との意見は一致している。

原は現状では使いものにならないとのことだが、トミ江ならば相

手がある程度自在に操ること、過去数分間程度の記憶を混濁させることはできるそうだ。通りすがりの人から財布と携帯電話を集めるくらいは簡単にやってのけるだろう。家族なり他の吸血鬼なりに捕らえられないことには、あのふたりは衣食住に不自由することもなく逃亡生活が続け、その間はわたしの手元にどんな悪口ひと言だけのくだらないメールが溜まっていくものと思われる。

メールアドレスを登録し直すのが手間なので今のところ様子見をしているが、この先何週間も続くようならメールアドレスの変更も必要だろう。

大量のメールが非常に鬱陶しい、毎日毎日飽きることなくメールを送信し続けられる歪んだ情熱が薄気味悪い、その二点だけで、わたしはこれを脅威というほどには重く感じていなかったのだが、久喜さんの意見はわたしと異なり、トミ江達が捕まるまでは実家へ戻っていたらどうかと勧められた。なんでもわたしの実家があるあたりに久喜家に関係のある吸血鬼が何人が暮らしているので、話を通してあげばいざという時にもちゃんと守ってもらえるだろうということだ。

試験期間が終わって夏休みに入った後であればそれでもいいのだが、生憎と実家から大学に通うのは、不可能ではないかもしれないがかなり無理がある。そのため実家に避難という案は却下。

それで、わたしは久喜さん宅に居候させてもらっている身のままなのである、少々不本意ながら。トミ江がどうこうというのもあるが、急いで新しいマンションを探さなくていいのも大きい。

もともと、わたしは最初、よその家の吸血鬼からの襲撃があるかもという心配が無用になった時点で、すぐに久喜さんのマンションを出る気だった。当面はウィークリーマンションでも借りて、ちゃんとした引っ越し先はゆっくり探すつもりだったのだ。前述の通り、トミ江達の所在が掴めていないことを理由に久喜さんから反対されたわけだが。

三郎太さんはみずのちゃんと善明君を連れて自宅に戻ってしまい、

そうなるかと久喜さんとわたしだけになっちゃってしまうのではないか、というようなことを漏らしたところ、その日のうちに柚子さんがやって来て、三郎太さん達と交代する形で久喜さん宅に逗留するということで落ち着いてしまった。柚子さんが津田良子の名で通っている大学は、彼女の家よりも久喜さんのマンションからのほうが近いのだという。しかし違う路線を利用するため定期券は使えないわけで、柚子さんにはメリットがない。

これはどう考えても気を遣われている。それがわかってしまったので、わたしはおとなしく吸血鬼達の提案に従うことにした。

従うことにはしたが、あくまで一時的にだ。いつになるかわからないトミ江達の捕縛まで久喜さんのところに居座るわけにもいかないだろう、常識的に。

というわけでこのところは、閑を見つけては不動産屋に足を向けている。

そうしているうちに厭でも気づいてしまった。わたしが一年と数ヶ月住んでいたあのマンションが、結構な良物件だったということに。あの部屋に決める際の下見に同行した不動産屋の従業員も、相場より安いし状態も周辺環境もとてもいいとしきりに口にしていたものだが、その時はどうせセールストークだろうと話半分に聞いていた。しかしわたしが間違っていたと認めざるを得ない。

家賃が同程度の物件を探すなら大学周辺は絶望的で――築数十年のものならなくもないが――、電車で下り方面にひと駅ふた駅離れたエリアを当たるほうがいいかもしれない。そのくらいなら徒歩でも充分通える範囲だ。上り方面となると相場が上がる上に、单身者向けでなく家族向け物件が多くなる。

つくづく、トミ江と原が恨めしい。

不動産屋のチラシを眺めながら、わたしは何度目かのため息を落とした。

蝶子さんは軽い調子で「ずっと兵吾君のところにいればいいじゃない」などと言ってくれるし、父親にいたっては携帯電話を残したまま国外に行ったつきり、音信不通だ。砂漠の写真を撮りに、という言葉だけではいったいどこに向かったのやら、絞り込むことも難しい。その上、あの人はその昔、北欧の森林がどうたらこうたらと言いついて出発したくせに、何故かひと月後にはオーストラリアから絵葉書を送って寄越し、帰ってきた時に抱えていたのは南米土産だったということもあった。それを思えば今頃砂漠でなく熱帯雨林をうろろろしていたとしても驚かない。

しかし、間違はなく血の繋がった身内よりも、赤の他人の久喜さんのほうが相談相手としては頼りになるような気がしてくる。

チラシを一部バッグに入れて、わたしは大学の正門に向かい歩きだした。今度は別のところにも行ってみようかと、頭の中で近隣の不動産屋をリストアップしながら。

と、後ろの方からよく知った声に呼ばれた。

「——カナちゃん！」

振り返ると、離れたところでみさ子が手をぶんぶん振っている。立ち止まったわたしのところにもものすごい勢いで走ってきた。

「よかった、カナちゃんいた！　ずっと探してたのにどこにもいないし、どうしようかと思った」

肩で息をしながら言う。

「探してたって、なんで？　つうか携帯……」

言いかけたところで思い出した。午前中に受けた試験の直前に携帯電話をマナーモードにして、それっきり忘れていたのだ。いつもならバイブレーションはオンにしておくが、試験中にはそれもまじいだろうと、こちらもちがっている。

携帯電話を取り出してみると案の定、この一時間ほどみさ子から

の着信が続いていた。

「ごめん！ まじでごめん。——で、なんの用だったの？ 急ぎだよね」

何度も電話をかけてきていた上に、何やら走り回ってわたしのことを探していたようだし。

「あのねカナちゃん、ローマ論取ってたでしょ？」

「それはひょっとして、今日の五コマ目に試験がある、あれ？」

「そう！」

みさ子は力強く頷くが、それはローマ論ではなくローマ法概論だ。縮めて呼ぶにしてもその略し方はどうかと思う。というか略すこと自体どうだろうか。

「ノートコピらせてほしいんだけど、知ってる人であれ取ってるのってカナちゃんしかないみたいで」

わたしは首を傾げた。

「別にいいけど、コピーしてどうするわけ？」

「試験前の悪足掻きってやつ。決まってるじゃん」

みさ子はそう言うが、

「あのさあ、ローマ法概論って、四月から一度たりとも教室であんた見た覚えはないんだけど、気のせい？」

気のせいではない筈だ。あの講義の出席人数は多い時でも四十人程度、みさ子がいれば絶対に気づく。

「うん……、実は一回も出てないから。つか出席したら人からノート借りる必要ないじゃん」

それは尤も。

わたし達は連れ立って正門を通過する。

「教科書がさ、四冊も指定あったし、それも高いのばつかでしょ？ それで買うの後回しにしてたらなんか売り切れちゃってたし！」

「わたし、教科書一冊しか買ってないよ」

しかも講義は毎回配布される大量のレジュメ中心に行われたので、多分教科書がなくてもあまり問題はない。それを教えると、みさ子

は「失敗した……」と肩を落とした。

「……とにかくさ、もう試験も受けなくてもいいかなって思ってたんだけど、やっぱり土壇場ぎりぎりまで諦めないで頑張ってみよっかな、なんて考え直しちゃったわけ。だからノートコピーさせて、お願い！」

考え直すならもう一週間ほど早く考え直せばよかったものを。

「コピーは別にいいんだけど、試験に持ち込めるの指定教科書と自筆ノートだけだよ、あれ」

「え、まじ？」

「まじですとも。レジュメもコピーノートも駄目。残念でした」

「えええっ？ でもさ、隅っこならばれないかも……」

「いや、無理でしょ。だって人数そんなにいないよ？ 一発でばれるって」

それを聞いてみさ子はしょげてしまった。

「ええと、とりあえず今回は試験受けるだけは受けて、後期で挽回狙ってみたら？」

それか単位取得をすっぱり諦めるかだ。

「うっ……。でもやっぱりカナちゃん、ノート貸して。できる限り写すから」

わたしは目を瞬かせた。

「え、写すの？ 今から？」

試験までは二時間ほどだ。詰め気味に書いても大学ノート一冊をほぼ使いきるだけの分量があるので、二時間で全てを写すのは到底不可能である。

「やるだけやってみるし」

みさ子の決意は固かった。せめて昨日のうちに決断していれば、手書きでもノート一冊丸写しできただろうに。

「うん、まあ頑張れ」

別に拒否する理由もないので、わたしはみさ子にノートを渡した。「ありがと、カナちゃん。この御恩は必ず何かで返すから！」

ノートは教室で返すね、それじゃ。そう言ってみさ子は購買の入っている建物へ走っていった。ひよつとしてノートを買いにいったのだろうか。それとも喫茶エリアで筆写作业をするつもりなのかもしれない。

試験までの時間、わたしはどうしようか。考えながら、みさ子と同じ建物に向かった。彼女を追ってというわけではない。書店で時間を潰そうかと思ったのだ。

そのつもりはなかったのだが、書店から出てきた時、わたしの手には住宅情報誌とバイト情報誌の入った紙袋があった。手に取ってばらばらめくっているうちにじつくりチェックしたくなり、それですい買ってしまった。

構内を歩き噴水広場にさしかかった時、タイミングよく目の前のベンチが空いた。正面に不気味なモニメントの時計盤がくる、絶好の位置だ。ここなら座って本を読んでいる最中、少し顔を上げれば現在時刻がわかる。

丁度いい。わたしはそのベンチで買ったばかりの情報誌を読むことにした。

これまでは学業優先を理由に、週末の一日だけとか連休中だけといった超短期のアルバイトしかしてこなかったのだが、長期のアルバイト先を探して家賃の足しにするべきか。そんなことを考えながらページをめくる。時々、時刻を確かめながら。

——チャイムの音が聞こえた。

何度目かの時刻確認のために時計に目をやろうとして、わたしはぎよっとした。

いつの間にやって来たのだろうか、わたしのすぐ前にみさ子が佇んでいたのだ。全く気配を感じなかった。太陽はわたしの背中側なので影も差さない。それもあって気づかなかったのだ。

「吃驚した……いたんだ」

みさ子は何も言わなかった。ただ突っ立っているだけだ。何故か手ぶらだった。

「みさ子、鞆どしたの？」

そう訊ねたが、彼女はやはり黙したまま。

みさ子の顔はどこか引き攣ったように強張り、その状態で動かない。ただゆっくりと瞬きを繰り返すだけだ。

明らかに様子がおかしい。

「どうかしたの、みさ子……」

「——かなえ、ちゃん」

みさ子の唇が動き、平坦な声を発した。しかし彼女にカナちゃんではなく香苗ちゃんと呼ばれたのは、初めて会った入学式の日以来ではないだろうか。

「みさ子」

立ち上がりかけた時、ふつとわたしに影が差した。後ろから何者かの白い腕が、わたしの首に絡みつく。

「こんにちは——香苗ちゃん」

少し高めの可愛らしい声。

白峰トミ江の声。

頭がそう認識した途端、背筋が粟立つ。

息が詰まらない程度に、回された腕がきつくなった。

「お久しぶり。元気だった？」

「……ええ、まあ一応は」

白々しい会話。

背後でくすくすと笑う気配がした。耳の後ろに息がかかる。

「みさ子を操ってるんですか、あなた達の特長能力で」

「あらやだ、ばれちゃった？」

ばれるも何も。目の前には不自然なまでに表情を動かさないまま同じ姿勢を保っているみさ子がいて、そこに他人を操る異能を持つ吸血鬼が現れた。ふたつを結びつけて考えるのは当然だ。

行方不明だったトミ江が、まさか白昼堂々わたしの通う大学にやってくるとは。

「ひょっとして、今までずっとこのへんに潜伏してたりしました？」
もしそうだとしたら、灯台下暗しもいいところだ。

「そうねえ。わたしはそうでもないけど、洋介はね」

どうせそうだろうとは誰もが考えていたが、やはりふたりは行動を共にしていたらしい。

すぐ傍で足音がした。ベンチを回り込み、それまで沈黙を守って存在を感じさせなかった原が姿を見せたのだ。

原はみさ子の隣に立ち、そして唇を笑いの形に歪めた。「紹介するわ、これ、俺のカノジョ」

わたしは瞠目した。原は明らかにみさ子のことを差してそう言ったのだ。

「……は？」

トミ江がさらに腕に力を込めた。さすがに息苦しい。喉が変な音を立てる。

「この子、お友達なのよね？ だから、何かに使えないかと思ってそれで洋介に声をかけさせたの。どう？ 吃驚したかしら」

「——あなた、趣味悪いって言われない？」

苦しい息で言えば、トミ江はさも満足げにふふふと笑う。

「結構悩んだのよ、この子をどう使おうかって。あまり顔を知られてない洋介はともかく、わたしは下手に動いたらすぐ見つかるんじゃないかって怖くて、ここに来るのだって迷ったんだから。でも香苗はあまり出歩かないから。それにせっかく準備したネタを披露しないのも勿体ないでしょ？ だから思いきって来ちゃった」

それじゃあ何か、みさ子が喜んでいた彼氏というのが実はトミ江の命令で利用するために近づいた原で、そうなったそもその原因はわたしか。しかもトミ江の言い種では行き当たりばったりで行動しているように聞こえる。そんなのでみさ子が悲しむ破目になったわけか。

「あんた、最っ低」

後ろから抱きつかれているために顔の見えないトミ江に、わたしは吐き捨てる。

「負け犬の遠吠えって言うんじゃないかしら、そういうの」

トミ江の声は心底楽しそうなもので、余計に腹が立つ。

周囲には大勢の人間がいるが、誰も異変には気づかない。それも当然だ。端からは仲の良い四人組とでも見えているだろうから。

「さて、と。香苗に吃驚してもらって目的は果たしたから、それじゃ次ね。わたし達と一緒に来てほしいの。——勿論、厭とは言わせないから」

もしそんなこと言われたら、わたし悲しくて、あなたのお友達を走ってる車の前に飛び出させちゃうかも。

毒を含んだ声が、わたしの耳に囁いた。

ふたりに連れられ、大学構内を出た。逃げられないようにということだろう、原がみさ子の手を引き、トミ江はわたしの腕にしっかりと両手を絡ませている。みさ子はずっとトミ江の異能により操られているままなので、これでは逃げようがないのだが。みさ子を見捨ててわたしひとりでならどうにかなるかもしれないが、その後このふたりがみさ子をどうするのか予測がつかない以上、そんなギャンブルめいた行動には出られない。

路上駐車していた車のところまで連れてこられ、それに乗るよう命じられる。原が運転席で、後部座席にトミ江を真ん中にして三人が並んで座る。

車が動きだした直後、トミ江の異能がわたしにも向けられた。手足の自由が突然利かなくなる。しかし、痺れでもしたかのようにとても動かしづらくはあっても、首から上はなんとか自分の思うように動かせた。多分にぎこちない動きではあるが。

「……こんなこと、しなくても。走ってる車から、飛び降りる、ほど、考えなしじゃ、ないし」

ついでに、走行中の運転手に飛びかかるほどの莫迦でもないつもり。

それはともかく、声も出る。唇も舌も一応は、思った通りに動いてくれる。完全にトミ江の支配を免れているわけではなく、数テンポ遅れるというか、まるで自分の身体、自分の一部という感じがしない奇妙な状態ではあるけれど。

どうやら敢えてそうしているのではないようだ。トミ江の様子を横目に見て、わたしは思う。彼女はほんの数分前と比べても明らかに顔色が悪くなっていた。息も浅い。異能を行使し過ぎた時の久喜さんを思い起こさせる。してみると、トミ江にとってはみさ子からは完全に、わたしからは中途半端に自由を奪っている今の状態で、

既に限界が近いらしい。

そういえば久喜さん曰く、わたしは異能の影響を受けにくいとか。それも多少は関係しているのかもしれない。

トミ江の顔は血の気が失せて青白くなっている。どう見ても病人、電車なんかで乗り合わせた人がこんな顔色でふらふらしていたら迷わず声をかけるであろうレベルだ。

「白峰さん、顔、すごい色になってるけど」

トミ江と呼ばば怒りだすだろうし、さりとて本人の希望するエリザベスと呼ぶのも癪に障る。なので名字で呼ぶ。

トミ江は苛立たしげにかぶりを振った。「うっさいわね、あんたは黙って震えてりやいいのよ！」

そう言い返すだけでもつらそうに眉を寄せ、胸を喘がせる。

「お嬢様、大丈夫ですか？」

運転席から気遣う声にもトミ江は素っ気ない。

「問題ないわ、この程度。あんたはさっさと目的地に着くことだけ考えてればいいの」

「……はい」

原は本当にトミ江のことをお嬢様と呼んでいるのか、と、わたしはこの状況下においては限りなくどうでもいいことに思わず感心した。そもそもトミ江が無免許運転の末に原に怪我を負わせたことから始まった関係であるのに。携帯電話の契約に名前を使われたり運転手をやらされたりと、思いつきり便利に使われていたのに。こういうの、なんというのだろう。貢ぐ君亜種？

「どこに向かっているのか教えてほしいんだけど。あと、みさ子は解放してあげてくれない？ 用があるの、わたしなんですよう」

さっきよりもすんなり声が出た。トミ江の支配は確実に弱まっている。だが、みさ子のほうは変わらず、人形のように同じ姿勢のまま座っているだけだ。

「駄目。この子は人質なの。あなたには有効でしょ？ それに少しは足しになるわ、この子の血でも。——本当はあまり好きじゃない

んだけど、ただの人間の血なんて」

彼女の言葉にわたしはぎよっとした。

「みさ子の血を飲むつもり？」

「飲むわよ。最近は血を飲んでないから、本調子じゃないの。背に腹は代えられないでしょ」

ここにいるのは吸血鬼で、吸血鬼なのだから血を欲するのはしょうがない。それはわかっていても、この、仕方がないからこいつの血で我慢してやるか的な言い方が無性に腹が立ってならない。

「でもね」

下からわたしの目を覗き込むようにして、トミ江は笑った。今にも倒れそうな顔色で。

「まずはあんたの血を貰うわ」

「……たしか、吸血鬼同士で互いに血を与え合ったらそれで充分だ、とか聞いた覚えがあるんだけど。力の使い過ぎで倒れそうだっていうなら、原さんの血を飲めばそれで済むんじゃないの？」

以前の久喜さんの例から考えるに、必要な血の量はそう多いわけでもないようだし。

しかしトミ江は一笑に付した。

「冗談じゃない。第一、そんなの全然意味ないわ。だって洋介に血を与えて吸血鬼にしたのはわたしだもの。だから洋介の中に混じっているのはわたしの血だけなの。その洋介の血を飲んだって、少し身体が楽になるだけで、何も得るものはないんだから。それに喫煙者の血って不味いわ」

その少し身体が楽になるという部分は重要ではないのかと問いたい。蒼白を通り越して土気色になっているのだけれど、トミ江の顔色。

——というか、ならばわたしの血からは、得られるものがある？

内心の疑問を正しく読んだかのように、トミ江は語る。

「あなたは京吾様から血を与えられたんでしょう？ あなたの中には今も京吾様の血が生きている。だからあなたの血を飲めば、京吾

様の力を、僅かであつても取り入れられるかもしれないの。わかる？ わからないでしょうね。これは大きなチャンスなのよ、わたしにとっては」

吸血鬼って、そういうものなのか。正直なところわたしにはまるでぴんと来ない。血を貰ったといつてもただ一度きりのことなのだが、それがどれだけ自分に影響を及ぼしているのかだって、よくわからない。しまった、もう少し色々掘り下げて久喜さん達から聞き出しておくべきだっただろうか。

「あなたから血を貰った後で、ちゃんとお返しをあげるわね。わたしの血をあなたにあげる。わたしの血でああなたの血を汚してしまうの。そうすればあなたの価値は下がってしまうわ。ただの屑吸血鬼にしてあげるから」

トミ江は冷たい手でするりとわたしの頬を撫でた。

「よくわからないんだけど……それはひょっとして、自分のことも屑吸血鬼だつて言つてない？」

「言ってるわよ。うちの血統はてんで駄目なの。わたしも両親も異能持ちだけど、近親にも無能は多いし。わたしは他の家の、力の強い人の血も貰いながら育つたのよ？ でも所詮は屑の家系だから、元々の血が勝つたのね、あまり力は強くなかったの」

吸血鬼の中でも、異能持ちは少数派だと思つていたのだが。

「わたしはもつと上を目指してるの。久喜の血は特別なのよ。あなたの血で薄まっけていてもいいわ、この際。そこらの吸血鬼の血よりも効果は期待できる筈」

呆れた。歪んだ向上心だ。

一時間半あまりのドライブの末に到着したのは、古い住宅街の中にある一軒の家だった。

狭い庭は背の高い雑草の楽園と化し、割れた窓ガラスは屋内からビニルシートで塞がれただけで放置されている。二階は全て、一階も半分ほどの窓は雨戸が閉まっているのだが、それも経年のために木が傷んだせいか、あちらこちらが破れた状態だ。

荒れ家である。現在も住んでいる人がいる住宅には、とても見えない。

がたがたと音を鳴らしながら原が玄関の引き戸を開けようとするが、十センチほど開いたところで何かに引っかかりでもしたのか止まってしまい、両手を扉にかけて力任せに押し開かねばならないという有様だった。

まさかこんなところに隠れ住んでいたのだろうか、このふたり。わたしなら一日だって耐えられない。

「——この家、いったい誰の家？ 入っていいの？」

以前からトミ江が使っている、あるいは彼女の身内が所有している家ならば、現在逃げ隠れしている彼女が立ち寄ることはないだろう。

「ただの空き家よ。誰も住んでいないから使ってやってるの。——そんなこと、どうでもいいでしょ」

それはまあ、見たところ年単位で放置されているようだから、出入りの際に人目につかないように注意してさえいれば、咎める人もいないのかもしれないけれど。周囲に建つのも一戸建てばかりだが、夕方という時間帯の割には静かだ。どこからか子供の遊ぶ声が聞こえるし、夕食の準備のいい匂いも漂ってくるが、全体的には住人の少ない一帯ではないかと思う。

トミ江は、異能を使ってわたしの身体を操ることは、ついに諦め

たらしい。今は思うように手足を動かせる。

つまりは、負担の大きいわたしを解放して、その分みさ子のほうに集中しているのだ。わたしの行動を縛るという結果には違いがないから。

原が真つ先に家の中に入っけいき、しばらくして戻ると「特に問題ありません」とトミ江に報告する。留守中に誰かが――彼らを探している身内が――侵入して待ち伏せていないかと警戒しているのだろうが、そのくせ玄関の鍵をかけてもいなかったような。ふたりが易々と入り込めたのだから、最初から壊れていたのかもしれない。ぎくしゃくと歩くみさ子の腕を捉え、トミ江が家の中に連れていく。わたしはおとなしくその後を追っしかない。

今にも倒れそうな顔色をしているが、トミ江はみさ子を解放するつもりはなさそうだ。わたしを直接操るのが難しい以上、彼女としてもそうするしかないのだろう。

わたしが久喜さんや三郎太さんに身体を操られた時は、五感や思考能力までは奪われなかった。それを考えると今のみさ子も周囲の状況は把握している筈だ。心の内は恐怖でパニック状態か、それとも彼氏だと思っけいた原のことを嘆けいているのか、硬直した表情から窺い知ることばできない。

どうしよう。

みさ子が巻き込まれたのはわたしのせいだ。彼女に白羽の矢が立ったのは、わたしの近くにける人物だというだけの理由なのだからわたし自身にしてもあまり関係ないよその揉め事に巻き込まれたようなものばだけど、みさ子は完全に無関係なのに。

三人に続いて足を踏み入れた屋内は、庭に負けていない荒れっぶりだった。足の踏み場もないという言葉がびったりだ。玄関からして段ボール箱が積み上げられていて、人ひとりが身体を横にして通れる程度のスペースしかない。

靴を脱がずに――そのようなスペースはない――そのまま上けると、そこも段ボール箱の山と、とりあえず突っ込んでみましたとい

うような横倒しのテーブルで塞がれている。そんな中、二階へ上がる階段まで繋がる獣道のような細いスペースだけが、かろうじて確保されていた。

みしみしと軋む階段を、慎重に上がる。今にも段板が抜けそうというのもあるが、階段すら両側に物が大量に積まれていて、うっかりしている足に引っかけたしまいそうなのだ。それに階段はかなり急なものだった。

物、主に段ボール箱が積み上がっているのは二階も変わらず、廊下の幅の三分の二は物置として使われているも同然だった。住人が引っ越した後でがらんとしているならわかるのだが、ここはその反対だ。この家のこの状態はなんなのだろう。住んでいたのが物を溜め込むタイプの人で、その人が急に入院するか亡くなるかして、その後ろくに整理もされないまま忘れられていたといったところか？ わたし達が連れていかれたのは二階へ上がったすぐの部屋だった。ここも壁際に段ボール箱の壁ができてはいるが、これまで見せられた光景と比べればすっきり片付いている。何しろ足を踏み出す場所で悩む必要がない。

雨戸が閉まっているために部屋の中は相手の顔もよく見えないほど暗い。電気はきていないだろうしどうするのかと思っていたら、原が用意していたランタン型の明かりを点けた。非常時用品によくあるタイプの、電池で点灯するものだ。小さい割に光量があり、さほど広くない部屋を照らすには充分だった。

部屋の入り口近くで立ち止まっているわたしに、トミ江は尖った声で命じる。

「こっちへ来なさい」

仕方なく一歩、二歩、近づいたところでトミ江は苛立ちも露わに舌打ちした。トミ江がつかつかと寄ってきてわたしの手をぐいと引く。それと同時にほんの一瞬、彼女はわたしに向けて異能を使った。自由を奪われた足が縛れ、わたしは為す術もなく床に倒れた。衝撃で舞い上がった埃と塵を吸い込み、盛大に嘔せてしまう。

咳込むわたしをトミ江はしばらく見下ろしていた。そして、わたしの背に乗り上げ、首筋に手を当てて床に押さえつける。

すぐ傍で短い悲鳴が上がった。みさ子だ。ほんの一瞬でもわたしに異能を向けたことで、みさ子のほうが疎かになっただけ。しかしみさ子が自由を取り戻したのはほんの僅かな間だった。何事か叫びかけたみさ子を、飛びかかるようにして原が抑える。そしてトミ江が改めて彼女を操り、数秒後にはみさ子はおとなしく座るお人形になっていた。

限界が近いだろうにトミ江は粘る、忌々しいほど。

「洋介。何か——そうね、刃物がいいわ。そいつに持たせて」

トミ江の言葉に従い、原はポケットから取り出した折り畳み式ナイフをみさ子の手握らせた。みさ子はそれを両手でしっかりと持ち、己の喉元に向ける。トミ江の操るままに。

「あんだ、何考えてるの」

「こうしておけば逆らおうって気にはなれないでしょ？ 大事な友達が血塗れになっちゃうもの。ね？」

その声は弱々しい。精一杯首を振って見上げると、トミ江は目をほとんど閉じた状態で、頭をぐらぐら揺らしている。座っているだけでもつらいらしい。

腹が立つが、トミ江がみさ子にナイフを持たせたのは上手い手だった。それがなければこんな半病人状態の女に従ってなんかいないのに。

トミ江の手がわたしの首筋から喉元へ、そしてまた首筋へ、滑るように動く。

「——やっぱりこのまま殺して血だけ貰おうかしら。それともさっき言った通り、あなたを屑にしておもうかしら」

掠れた囁き声で、恐ろしいことを歌うように呟く。

額に汗が滲むのを感じた。

「意思表示させてもらって、殺されるのも吸血鬼にされるのも真っ平ごめん。それに人ひとりを殺したら後が面倒だと思っただけ」

わたしは必死だった。こんなところで人生終わりたくなんかない。トミ江に思い止まらせようと、咄嗟に思いついたことを口にする。

トミ江は「ああ、そういえば」と独りごちて、ふふつと笑った。厭な予感。

「そうよね、死体を隠すのって大変そうなものね。それじゃあ、こうしましょう？　わたしはあなたの血を貰う。それからあなたにわたしの血をあげる」

「……それで？」

そこまでなら、さっき聞いたわたしを屑吸血鬼に、というのと同じだ。

「——吸血鬼に変わったあなたを、殺すの。そうしたら死体は残らないでしょ？　全部砂になっちゃうもの。京吾様は死後砂に変わるまでがすごく早かったらしいの。あの方の血を与えられたあなたも、だからきつとすぐに砂になる筈」

でも、わたしの血も混ぜるんだから、それほどでもないのかしら。トミ江は可愛らしい仕草で首を傾げる。

冗談じゃない。叫び、喚きたかった。頭の芯がぎゅつと痛む。

「なんなら砂に変わったあなたを、好きな場所に撒いてあげましょうか。そのくらいのお願いは聞いてあげてもいいわよ」

どうする？　目を合わせ、トミ江は訊いてくる。わたしは何も言えなかった。

「洋介、もう一本ナイフはない？　包丁でもなんでもいいんだけど」
血を飲めばトミ江は、今のいつ倒れても不思議ではない状態から回復する。もしかしたらわたしの血が合わず、逆に彼女を苦しめることになるかもしれないが、その可能性はどれくらいのものなのか。期待はできない。

みさ子はナイフを喉元に突きつけたままだ。あと数ミリでも動けば刃が彼女の皮膚を傷つけそう。

わたしが弱りきったトミ江を撥ね退けることは簡単だ。しかしそうすればみさ子が怪我を負うことになるかもしれない。

どうしよう。

この期に及んでも、わたしは甘いことを考えている。トミ江が考え直してくれないか、などと。だって殺すの殺されるのと、まるで現実感がない。

「ええと、わたしの血をあなたにあげることは同意するから、殺すのはなしにして、みさ子と一緒に帰してもらえない？」

傷つけられて血を奪われるのも厭だが、殺されるよりはましだ。

「駄目。だって、そうしたらあなた、久喜の人達に泣きつくでしょう？　そうしたら追っ手が増えちゃう。それに、あなたをこのまま解放するんじゃ、わたしが面白くないもの」

わたしは彼女を睨みつけた。わたしの血が彼女に合わなければいいのに。それくらいの奇跡、起きてくれてもいいだろう。

「お嬢様、これで」

原が、隠し持っていたもう一本のナイフを差し出す。トミ江がそれを受け取ろうとしたとき、階下で大きな物音がした。

トミ江がはつと全身を強張らせるのが伝わってきた。首の後ろを押さえる手に力が入る。

「洋介！」

「見えます」

原が慌てて部屋を出ていく。

ナイフはトミ江の手にある。しかし彼女は階下に気をとられ、その刃はわたしに向けられていない。

怒号が響く。次いで、何かが落ちる派手な音。至る所に積み上がっていた段ボール箱を思い出す。あれが崩れた——あるいは崩されたのか。

と、今度はさらに大きな音が聞こえた。重いものが、たとえば人が、階段を転げ落ちるような。

複数が争う気配。

「あの役立たず！」

トミ江が罵る、その声をかき消す悲鳴が上がった。すぐ傍で。

みさ子だ。トミ江の支配が解けたのか。

手を滅茶苦茶に振り回し、恐怖から意味のない叫び声を発する。

みさ子の手から離れたナイフが部屋のどこかに飛び、かたんと音を立てた。

トミ江の注意は外の物音とみさ子に向かっている。それを確認し、わたしは動いた。

身体を捻りトミ江を振り落とす。最優先は彼女の持つナイフをどうにか手放させること。身を起すより先に、足でトミ江の手を蹴飛ばす。狙った通り、トミ江はナイフを取り落とした。しかし、近い。手を伸ばせば簡単に届いてしまう。

わたしが立ち上がりかけて中腰になったタイミングで、トミ江が飛びかかってきた。ふたり纏れながら倒れ、埃だらけの床を転がる。

髪を振り乱し、上になり下になりしながら相手を掴み、引つ掻き、拳にした手で叩く。いい歳をしてやっていることは子供の喧嘩だ、などと考える余裕もその時はなかった。トミ江の爪がわたしの頬に食い込み、抉る。わたしは彼女の腹部を膝で打つ。

ようやくトミ江から離れたところで、じくじく痛む頬に手をやる。ぬるりとした感触があつた。手を見れば、赤く染まっている。

この女、なんてことを。痕が残ったらどうしてくれよう。

埃が舞う中、わたしは丁度窓の近くで、わたしと部屋の入り口の間に立ちはだかるようにトミ江が、入り口のすぐ脇にみさ子がしゃがみ込んでいて、譫言のようにわたしの名を繰り返している。そして、最悪なことに、さっき床に落ちたナイフは今、トミ江の足元にあつた。

トミ江がナイフを拾い上げる。

「カナちゃん……！」

みさ子の震える声。

その時、わたしを呼ぶ別の声が聞こえた。

「——香苗！ 中里香苗、そこにいるか！」

久喜さん？

どうやってかはわからないが、トミ江達がここに隠れているのを突き止め、久喜さん達がやって来たのだ。

助かった、そう安堵したわたしに、トミ江が凄絶な笑みを浮かべた。

彼女の長い髪が揺れる。光るもの。ナイフの刃先。

咄嗟に躲けたのは、単なる僥倖だ。

しかしトミ江は諦めなかった。再び揉み合いになり、トミ江の身体を押し返し、そしてトミ江が再度、ナイフの切っ先を向けて——。背後の壁——いや、カーテン越しの窓にぶつかった。その筈だった。

それなのに、身体が不自然に傾く。

トミ江諸共、背後に倒れる。

足が床を離れる。

みさ子の悲鳴が耳を打つ。

風を感じた。

——気がつけば、わたしは雑草の間から、董色をした日暮れの空を眺めていた。

背中がずきずき痛む。ああ落ちたのか、と思った。ここは庭だ。荒れ放題で雑草に占領されていた、狭い庭。

あの部屋の窓と、その外の雨戸は、わたしとトミ江のふたりを支えることができなかったのだ。元々、ちよつとした拍子に外れかねないような危険な状態だったのかもしれない。そもそも、ちゃんと窓は存在していたのだろうか。雨戸はあった、それは間違いない。外から見て確認している。しかしカーテンの向こうにあったのは、窓ではなく応急処置のビニールシートや段ボールではなかったか。ならばこうも簡単に転落したのも頷ける。

不思議と冷静に、わたしは思考を巡らせていた。

目がおかしい。董色の空が、急に暗くなったり、また明るくなったり。目を擦ろうとするが、手が上手く動かなかった。誰かが、複数の人が、騒いでいる声が遠く、近く、寄せては引く波のように聞こえる。

背中が痛い。酷く打ちつけたらしい。当然だ、二階から落ちたのだから。

何故か肩と足にも違和感を覚えた。右肩と、左の太股のあたり。その二力所が熱い。こめかみを流れる血がどくどくと音を立てる、そのリズムに合わせて右肩と左足の熱が増すような気がする。

なんだこれ。

声に出して呟いたつもりだった。なのにちゃんと音になったかどうか、よくわからない。

視界が急速に暗くなり、瞼が閉じかかる。それを気力を振り絞って目を見開く。ちゃんと空が、暮れる空に浮かぶ雲が見えることに安心する。

すぐ近くで声がした。音量調節機能がおかしくなったように、大きく小さくなる声。おかしいのはわたしの耳か？

視界に知った顔が飛び込んできた。柚子さんが、わたしを見下ろしている。彼女の口がぱくぱく動く。だが、何を言っているのか、よく聞こえない。その表情から何かを必死に伝えようとしているのはわかる。しかし肝心の声が、まるで水中にいて水上の音を聞いているかのよう。それが、狭い空間の中わんわんと反響する音の塊。重く閉じかけた瞼をなんとか持ち上げた時、柚子さんはもうわたしを見ていなかった。わたしではなく他の誰かに何かまくし立てているようだった。

そして柚子さんがわたしから離れた。ええと、さっき何を言われたか全然わからなかったんですけど。あと、みさ子がどうなったかちゃんと無事なのか、教えてほしいです。そう思っ、視線だけで柚子さんを追おうとするが、そこに別の人物が割り込んできた。

久喜さん。

わたしはその人の名を呼ぶ。唇は動いた筈。しかしちゃんと声になったのかどうか。

久喜さんは珍しく、というかわたしが初めて見る焦った様子で、何かを言っている。

でも、ごめんなさい。よく聞こえません。

そういえば、さっきまで熱かった肩も足も、今はそうでもない。逆に寒気がする。身体の上に氷を乗せられているみたい。

久喜さんがわたしに何事か語りかけ、それから掌でわたしの目を覆い隠した。

何をしているんだろう、この人。

ややあつて、わたしの顔に、口元に、何かがぱたぱた落ちてきた。温かい液体が。幾らかが唇の隙間から口の中に流れる。舌に触れる。鉄の味。

血。

久喜さんの――吸血鬼の血？

厭です、そう言っただつもりだった。吸血鬼になるつもりはないんです、だからあなたの血は飲みたくないです。わたしのことはわたしに決めさせて下さい。

耳の奥でわんわんと音が響く。これは声だ、久喜さんの声。それはなんとなくわかるが、言葉が聞き取れない。

誰かの指がわたしの口をこじ開けた。目は覆われたままなので見えないのだが、おそらくはこの指も久喜さんだろう。

舌の上に直接、生温かい液体が落ちる。ぼたぼたぼた、幾滴も。

口の中に温かみを感じるのとは逆に、わたしの身体は冷えていく。手も足もどんどん感覚が失せ、ただ寒い。

すつと意識が遠ざかる。

ちよつと待て、わたしはこの人に、今傍にいる吸血鬼に言いたいことがあるのに。

不意に耳鳴りが消え、ほんの一瞬、クリアな声が届いた。

「……は後でいくらでも聞く。今は君の命を助けさせてくれ、でないと――」

切羽詰まった声。

それを最後に、わたしは意識を手放した。

目が覚めた時、わたしはどこかの病室に寝かされていた。

病室には蝶子さんと、何故か柚子さんが付き添っていて、ふたりから自分が丸一日近く眠っていたのだと教えられた。

それでもって、思いつきり叱られた、柚子さんに。主に携帯電話の件で。

大学でトミ江達に会うより少し前、わたしは携帯電話をマナーモードに設定したまま、バイブレーションもオフにしたままでぼけつと情報誌なんぞを読んでいたのだが、その間に久喜さんや三郎太さんや柚子さんから、大量の着信があった。わたしの通う大学付近でトミ江達を見失ったという連絡が回ってきて、それで危険を知らせ

ようとしてくれていたのだ。ただ、わたしが全然気づかなかったため、無駄になってしまった。

「どれだけ気を揉んだか、わかってる？」

などと言われては反省するしかない。

ちなみにわたし達のいた廃屋を捜し当てたのは、それまでの情報で予め大体の地区は絞り込まれており、そこから原が運転していた車の色だけを手がかりに、ご町内全戸総当たりした成果とのことだった。それが本当か嘘かは判断のしようもないが、手間をかけさせたことだけは間違いない。

あの時、トミ江と争った末に二階から落ちた時、わたしは失血死しかけていた、らしい。

トミ江が持つていたナイフが左足の太股を、庭に転がっていた割れたガラス瓶が右肩を、それぞれ深く傷つけていたそうだ。

トミ江のほうは屋根の端で踏み止まり下には落ちなかったそうで、運のいい女だ。もっとも落ちるとしたらわたしの上という可能性が高かったわけで、それを考えれば彼女が屋根に引っかけたくれたことに感謝をすべきか。

一時は人生二度目の三途の川渡河の危機にあったと聞かされても、目が覚めた時には、それを思わせるような傷はわたしの身体のことにもなかった。

動かせばぴりつとした微かな痛みが走る、じつくりと見ればそこだけ皮膚の色が少し違う、その程度だ。荒れ家の庭に放置されていた割れガラスが刺さったというのに、そこが膿んでいるということもない。トミ江に引つ搔かれた頬がえらいことになっていたとも教えられたが、それも全く痕跡が残っていない。

久喜さんの血を与えられたおかげだとは、言われずともわかっていた。彼がわたしを死なせないために自分の血をくれたことも。

しかし命を助けられておきながらどうかとは思うのだが、正直なところ少し——いや、かなり気色悪い。あり得ないだろう、この回復。柚子さんの手前、言葉には出さないが。

勿論、感謝はしている。していますとも。けれどちょっと複雑というか、なんというか。

その上、久喜さんに飲まされた血の量は結構多かったらしく、柚子さんによれば「そろそろリーチかもね」らしい。通常は何回かに分けて少しずつ血を与えていくところを、量で一気にすっ飛ばしてしまったとか。人間から少し吸血鬼に近くなっていただけのところから、見事に吸血鬼数歩手前だ。

衝撃の事実には頭を抱えるわたしをよそに、蝶子さんは「無事でよかったわ」のひと言を残してさっさと帰っていった。叔母の愛をほんの少し疑ってしまった瞬間である。

「もう心配はないでしょうけど、しばらくは泊まっていきなさいな」と柚子さんに言われ、一週間の予定で入院生活を送ることになったのだが、わたしはそのほとんどを寝て過ごした。

他にやることがないのでごろごろしてますというのではなく、文字通りの意味で。一日二十四時間中、睡眠二十時間超、ぐうすか寝てばかり。どういうわけか、やたら眠かったのだ。

ひょっとして吸血鬼の血の副作用なのでは、と疑いながら、欲求に抗えず寝て過ごす毎日。三郎太さんや柚子さんが何度か様子を見に来てくれたらしいのだが、寝こけていたわたしは枕元に残されたメモでそれを知るだけという始末だ。

そんな寝てばかり生活も今日限りという退院前日、既に面会時間は終了している時刻だった。久喜さんが現れたのは。

寝穢く惰眠を貪っていたわたしは、夢うつつに頭を撫でる誰かの手を感じ、眠りから引き戻された。反射的に自分を撫でる手を払い除け、目を開く。ベッドの脇に置かれた椅子に、いい加減見慣れた、しかしこの一週間は一度も見なかった黒づくめの男が座っていた。わたしが無意識に払い除けた大きな手が行き場をなくして中途半端なところに浮いている。

「何してるんですか……」

「見舞いに」

久喜さんは短く答え、身を起こしたわたしの頭にまた手を伸ばしてきた。

そっちではなく、なんでわたしの頭を撫でているんですかと訊ねたつもりだったのだが。そして病院へお見舞いという場面でもやはり黒づくめなのか。まあ、今更黒以外の服を身に着けた久喜さんも想像し難いので、それは別にいいんだけど。

寝起きの呆けた頭でそんなことを思いながら、わたしは久喜さんに撫でられるがままになっていた。

眠い。朝からずっと眠り続けているのに、全然寝足りない。

零れそうになる欠伸を噛み殺し、わたしは久喜さんに胡乱な目を向けた。

「楽しいですか、わたしの頭撫でて」

「別に楽しくはないが、死なせずにすんでよかったと実感していたところだ」

淡々とした口調で言いながら、なおも頭を撫で続ける。

「はあ。わたしも死なずにすんで嬉しいです」

頭を撫でられるのは久し振りの気がする。しかしこれは、子供扱いされているのではなからうか。実際、久喜さんの実年齢は五十一、うちの父親は五十五で母親が生きていれば四十三歳なので、久喜さ

んはわたしの親世代だけど。

まるきり子供相手にするようにわたしを撫でながら、久喜さんはしみじみと呟いた。

「君を死なせたら京吾に化けて出てこれかねないからな」

なんだそれ。思わず笑いかけたが、久喜さんの顔は真剣だった。

言葉を探し、さまよわせた視線が久喜さんの、わたしの頭にあるのとは逆の手を捉えた。黒いシャツの袖口から白いものが覗いている。

「久喜さん。その手、どうしたんですか？」

「——ああ」

頭の上の適度な重みがなくなる。

久喜さんは左手を顔の高さまで上げてみせた。手首には包帯が巻かれている。

「君に血をやった時に、少し」

「え……」

「適当な刃物がなかったので、噛み切った」

事も無げにそう明かした。

噛み切ったって——手首を？

「さすがに治るまで時間がかかると言われた。刃で切り裂いたようなきれいな傷口ではないからな」

「でも、久喜さん達って怪我が治るの早いんじゃない？……？　だって、わたしの怪我はもう治ってるし」

「君の回復が早かったのは、吸血鬼でない者が吸血鬼の血を与えられた時に見られる劇的な反応によるものだ。もしも今怪我をすれば治るまでに相応の時間を要するだろう。完全に吸血鬼に変わってしまった後ならば、直後に他の吸血鬼から血を得ても、はつきり目に見えるほどの効果は期待できない」

「それじゃあ、しばらくはそのまま？」

「利き手ではないから大して不自由はない。それに人間に比べれば治りは早い。もう二、三日もすれば包帯も要らんだろう。だから、君が気にすることはない。そもその原因はうちの不始末だ」

包帯をしていないほうの手を、わたしの頭にぼんと置く。

そんなことを言われても無理だ。本人が気にするなと言っただから問題なし、なんてふうには考えられない。

「それに、君の意思を無視した。私の血を拒んでいたのに、無理に飲ませた。――すまなかつた」

いや、それは謝られるようなことではないというか、あの状況でわたしの意思を尊重されていた場合、今頃は骨になつて墓の中だった可能性が大なわけだからして。吸血鬼にぐんと近づいたといっても、考えてみればわたしが半吸血鬼だということには変わらないのだし。

そんなことをつらつら考えているうちに、瞼が重たくなる。ただでさえ眠くて眠くてしょうがないというのに、頭の上の体温が拍車をかける。ひとと話している最中だというのに――。

「中里さん？」

頭ががくりと揺れ、わたしははっとした。久喜さんがわたしの肩を支えてくれている。

「すみません。なんか、ずっと眠くて」

眠気を少しでも追い払おうと頭を振り、わたしはずっと訊ねたかったことを久喜さんにぶつけた。

「これ、吸血鬼の血を貰ったことに関係ありますか？ 副作用みたいな」

無関係ならそれはそれで、というかそちらのほうが原因不明で困るのだが。

「……長引くようなら診断書を書かせるが。睡眠障害か何か、適当に」

微妙に即答を避けてきた。

「いったいどういうことでしょうか」

たとえ睨んでいるように見えたとしても、今のわたしは眠さのあまり目つきが悪くなっているだけだ。

「私が赤ん坊だった頃に主に血をくれたのが、非常に異能の扱いに

優れてはいたが、その反面やたらと寝てばかりいる人だった。病などではなく、そういう性質の現れる血統なんだ。私自信にはその性質はさほど強く現れなかったが、それが君にも伝わり、発現した可能性が高い」

「……それって、一時的なもの——ですよね？」

そうだと云ってほしい、頼むから。

わたしの切なる願いも空しく、久喜さんは首を横に振った。

「はっきり言うが、判断がつかない。この先おさまるようならば、吸血鬼の血を与えられた直後の一時的な反応だったということになる」

「……………な」

なんですかその、なってみなきゃわかんないな回答は。

「ちょ、それじゃこのまま元に戻らなかったらどうすればいいんですか、わたしは」

一日二十時間以上寝てるんですが、今のわたし。仮に、もし、万が一、この先ずっとその状態が続くならば、日常生活に支障なんてレベルじゃない。

「悲観的に考えず、あくまで一時的なものだと思って気楽に過ごしてはどうだ？」

いや、それなんの解決にもならないし。

「一時的じゃなかったらどうしてくれるんですか!」

「……私は一応謝ったぞ、先程」

「それとこれとは別問題でしょうが。一緒にたにするな!」

叫ぶわたしの目を、久喜さんの掌が覆い隠した。その手に軽く押され、そのまま後ろ向きに倒れ、ぽすんとベッドに横になる。この体勢だとますます睡魔に負けそうなんだけど。

上から、久喜さんの声が語りかける。

「吸血鬼の血を与えられた直後に異変を訴えるケースは少ない。五感が鋭敏になったり、その逆だったり、他にも色々。大抵は長くて数週間程度だ。今は本調子でないため身体が長時間の睡眠を

求めているだけだ。そう考えておけ」

ひと事だと思つて、簡単に。

「ずっと続く可能性ありとか、聞きたくなかった……」

「私が黙つていても、三郎太や柚子あたりは君が訊けば教えるだろう」

それはそうかもしれない。結局、知るのが早いか遅いか、誰の口から知らされるかの違いでしかないのか。

「——ところで、私達の婚約の件なのだが」

いきなり話が飛び、わたしは久喜さんの掌のしたで目を見開いた。慌てて彼の手をどけ、久喜さんを見上げる。

「そうだ、その話つて今どうなってるんですか？」

わたしの人生を左右する重大問題なのだが、白状するとぐうすか寝こけていたこの一週間、完全に忘れていた。しかしその間も時は流れ、わたしが二十歳になる日が近づいているわけで。

焦るわたしに久喜さんが告げた内容は、とんでもないものだった。「考えたのだが、君、将来の破棄を前提として私との婚約関係を継続する気はないか？」

「……………はい？」

多分わたしの目は今、点になっている。

「なんで？」

将来の破棄が前提の婚約つて、何それ。それになんの意味があるのだ。

「有り体に言つてしまえば、君が今すぐの婚姻を望んでいないので十年ほど先延ばしを、というあたりが妥協点として丁度よさそうだった。三郎太が言っていたが、君の人生設計では三十前後で結婚して寿退職なのだろう？」

それって単なる問題の先送りなのでは。

「今時二十歳、それも学生の身分で、本人も乗り気でないのに結婚を急がせることもないだろう、という事情なら賛同も得やすそうだし」

……ええと、十年後にまた、どうやって結婚を回避するかに頭を悩ませる未来が見えるのは、わたしの気のせいだろうか。

まずい、頭がくらくらしてきた。

「もしかして久喜さん、婚約済みですってことにしてしまえば見合
い話を持ち込まれずにすむし、とか思ってますんか」

「それもある」

うわ、あっさり認めた。

「……それで、とりあえず結婚式は回避できそうなんですよね？」

それなら一歩前進とすべきなのだろうか。あれ、この場合は後退？ 前進でいいのか？

……眠くて頭が回らない。

「せっかく招待状を送ったのだから結婚式の代わりに婚約のお披露
目を、程度は予想しているが」

ああ、それありそう。久喜の人はどうか知らないが、蝶子さんが
言い出しそうなことだ。

「なんなら薔薇の花束でも持って出直してこようか？」

それで仮面婚約者になって下さいと申し込むわけか？

「ええと……」

眠気がもう限界。わたしは浮かせてかいていた頭を枕に戻した。思
いついたことを口にする。

「薔薇を貰えるなら、花束よりもミニバラがいいです。どうせなら
寄せ植えの豪華なの」

死んだ母親はミニバラが好きで、沢山育てていた。わたしが物心
つく頃には空っぽの鉢やプランターしか残っていなかったのだが、
古いアルバムにはミニバラを撮った写真が何枚もある。それを思い
出していた。

「……本気か？」

何故だか、久喜さんは驚いているように見えた。自分で言い出し
たくせに。

「本気というか、なんか今はもう、考えるの面倒というか」

とにかく眠いんです、本当に。

目を開けているのもつらくなってきた。

久喜さんがくつくつと喉の奥で笑うのが聞こえた。

「わかった。ミニバラが欲しいなら退院祝いに贈ってやる」

婚約云々については、今度改めてちゃんと話をしよう。

そう話しかけてくる声がすうつと遠くなる。

どうやらわたしはミニバラを貰えるらしい。言ってみるものだ。

「おやすみ」

眠りに落ちる寸前に届いた声に、わたしは心の中でおやすみなさいと返事をした。

――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3175w/>

吸血鬼の花嫁（仮）？

2011年10月22日00時17分発行